
いわゆる二次創作ってヤツです。

黎翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いわゆる二次創作ってヤツです。

【Nコード】

N8765G

【作者名】

黎翔

【あらすじ】

「銀さんは、親子って何だと思います?」「塩どこ?レベルで難しい質問してくれるねエ、お兄ちゃん」「アレだヨ。毛が生えてきたら一緒に風呂入りたくないんだヨ」「カッコ3つ目で早速かつ飛ばしてんじゃねーよっ!!もつとマシなこと言え!!」「るさいヨ新八。お前の名前打つとき一発で変換出てこねーからメンドクせーって作者言ってたぞ」「名前から全否定!?僕に何とか出来るレベルじゃないでしょコレ!!!?」「ハイハイ、ちよつと銀さん大事なこと言うから、お前たち暫く黙ってなさい。『この話は一章が

長めなんで、更新クソ遅いです。半年とかよゆーです。でも引かないでくださいーい！！！」
「次回1月中更新予定！！！」（1/6現在）

はじめに（前書き）

「初めまして。作者の黎翔です」

1 あいわし

初めまして。作者の黎翔です。来てくれてほんっとーにありがとうございます。ございます。

あー、わかりますわかります。おっしゃりたいこと手にとるようにはわかります。あの題名なんだよ、ですよ。真面目にあらすじ書け、ですよ、ハイ。てゆーかお前呼びじゃねーよ、ですよ、ハイ。ま、正直この章は確かにぐだぐだなんですけども……でもお目通しただけると嬉しいな……みたいな……あ、ハイ、すいません、これ以上は喋らないでおきます。なんか、視線痛いんで、ハイ……

……えっとじゃー、私がダラダラやっちゃうのはあまりにも味気ないので、どうせダラダラなら、銀魂の方たちにでちゃってもらっちゃいましょう。ハイ、みなさん、お願いしまーす。

「……って、オイ。なんだよこの始まり！完成度低っ！……どうせダラダラ、って、ホントでもなんかムカつくんですけど」

「もっとカッコよく登場したかったネ。なにヨこの早速のぐだぐだ

感」

「まあまあ。コレ見てる人ならちゃんとかわかってくれるって。銀魂なんだしって。みなさん、ぐだぐだでも出来るだけお付きあいください」

「そうやって視聴者ナメてると痛い目みるアル」

「神楽ちゃんが言うべきじゃないよね。ていうより『視聴者』じゃないよね、『読者』だよ、今は」

「カンのいい奴ならいまアニメではいつものBGMオンリーの場面が浮かんてるハズネ。浮かんでない奴はまだまだアル。出直してくるヨロシ」

「だアーも、そういう細けーことはあとあと。こんままじゃこの章終われねエだろ。今はアレだ、あらずじだよ、この話の」

「そんなのテキトーにでっち上げときゃいいネ。『攘夷』とか『白夜叉』とか出しとけば大概つれるアル」

「お前ホントでももっとオブラートに包めねーのか」

「神楽ちゃんにそんな高度なことできるワケないじゃないですか。銀さん、ここはバシツと主人公らしく言っちゃってくださいよ」

「へいへい。え〜と、なにになに……ある日、銀さんのとじろにひと……」

ベシツ

「カンペ棒読みじゃねーかッ！OPくらいセリフ覚えてこいよ！……」

「抑えるネ新八。ここは私に任せるアル。

ある日、銀ちゃ……（オイ、見えにくいアル。もっと近付けるネ）……
銀」

バシツ

「オメーもか！……カンペ見えねえってどんだけ目悪イんだっ……！カンペ見えてる銀さんの方がまだマシだわ……！……」

「あーあ。やっぱり旦那たちには任せられやせんぜ」

「何だよ」のぐだぐたは。あらずじも満足に言えねーのか」

「お、沖田さんに土方さんっ!？」

「んだよオメーら。ここはオメーらの出る幕じゃねーだろが」

「旦那たちだけじゃ收拾つきそうにないんでねエ。俺らから説明させてもらいまさア。

ある日、いつものようにダラダラと過ごしてた旦那のところに、一人の訪問者が訪ねてくるんでさア」

「その訪問者がこの話の鍵。いろんな事柄に関わってくんだと」

「真選組にも何か動きがあるらしいですぜ。他にもいろんなヤツの思惑が……おっと、これ以上はNGらしいでさア。詳しくは本編で、らしいですぜ」

「オイコラ、サディスト野郎。何でしゃばってくれてるアル。オメーの出演は予定になかったネ」

「俺だっていきなり出るって言われたんでイ。テメーらが予想以上にぐだぐたでなかなか事が運ばねえから、仕方なく出てやったんで

さア。感謝しろイ」

「ひくじかくたくくん。主人公の俺を抑えて横からセリフふんだくるたア、いつにも増していい度胸じゃねーか、あ”あ?”」

「ああん? テメーが文句言える立場か。俺らはもともとここに出る予定はなかったんだよ。なのにテメーらが仕事しねえから、わざわざ出てやったんだ。文句あんならすることできるようになってから来い、腐れ主人公が!」

「…やっぱりこうなっちゃいましたねー。何でも予定通りにならないのが彼らですよ。こんだけ長いあらすじになるなんて、マジで予定外ですよ。え? 人のせいにするなって? してないしてない。」

さて、志村さん。後はお願いします。

「…え！？僕！？えーっと…いろいろとツッコミどころあるかもしれないけど、大体銀魂を活字化つてのがそもそも無理なハナシなんで、そこんところは大目に見てください。とりあえず、視聴者のみなさんが楽しんでいただけたらいいと思います。…って、オメーらいつまで騒いでんだアアアア！！！！」

いやー、さすが銀魂のまとめ役。言いたいことほとんど言ってくれました。

そんじゃ、本編もぐだぐたですけど、勘弁してください。では。

…あ、こんな始まりですけど、ちゃんと攘夷要素ありますからね。更新遅いけど、見捨てないでネ！！ひと月ふた月はよゆうだから！半年あいてもするから！！てゆうか一年くらいあいちゃうこともあったりしちゃうかー)

序章（前書き）

「『スナックお登勢』の上……あともう少しで着けるはず」

序章

「ふーっ、ついに来たかぶき町！」

へソに届くかくらいの丈の風の靡きに為すがままに揺れる程よくウ
エーブの入った艶やかな浅葱色の髪。

この日差しのキツくなる頃合いには、日焼けとは無縁の六花を
彷彿とさせる透き通る白の肌。

初夏の季節に似付かわしい、着こなされた露出の目立つ艶美な着物。
いかにも若者といった風体だ。

「……やっぱりご連絡したかったなあ。でも、辰馬さんが知らないんじゃないよね……携帯も持ってらっしゃらないらしいし……。こんなときに限って陸奥さんはいなかったしなあ……うん、仕方ない。それよりちゃんとお会いできるのかな……」

彼女のもつ罫線の入った小さなメモ紙サイズの紙切れが緩く吹く風に揺れる。
その紙には

『新宿かぶき町5 - 11 - 4』

住所と共に、彼女が目指しているらしい場所が記してあった。

「『スナックお登勢』の上……あともう少しで着けるはず」

第一部 再会（前書き）

「……どっかでお会いしましたっけ。……いや、ないない。うめエ甘味処とキレーなネエちゃんはずってー銀さん忘れねえもん」

第一部 再会

「あー、あちーいー。どーしてこーもあちーんだ。まだ五月だぞ。銀さんもう干上がっちゃうよ」

「仕方ないですよ。今日は太平洋側からの湿った空気もろこつちに来てるらしくて、湿度も気温も高いらしいですよー。それにまだ五月って、もう一週間もしたら六月ですよ」

「まじでか。この時期にこんな蒸し暑くなるなんて聞いてないアルヨ。一体誰の許可とってこんななってるネ」

「まあ、テレビはもう少しで梅雨入りって言ってたから、湿度高いのはソレだろうね」

「…よし。こーもムシムシあちーときはアイスでも食うに限る。えーと、アイスー…」

特徴的な銀髪の天然パーマと臍脂の瞳。だらしなく着流しを身に纏い、ソファに寝そべっていたのを重い足取りで台所へ立ったこの男は 坂田銀時。

「銀さん、僕の方もお願いしまーす」

針仕事をしつつ、今朝の天気予報を冷静に口にしたのは眼鏡がトレードマークの 志村新八。

「銀ちゃん、私もー」

不満げな声色で気もなく不平を呟いている色白の娘子は 神樂で
ある。

「オイ神樂、オメ昨日今日でアイスいくつ食ってっと思っただ。
あんだだけ大量に買い込んだアイスくんたちがもうこんだ……アレ？
もしかしてもしかするともしかしなくても……無い」

「くおらチャイナ娘エエエ!!!いくら大食いでも一本二本おいと
けや!!!」

「アレ、おかしーアルナ。私の計算ではあと一箱まるまる残ってた
ヨ」

「オメーのぶっ飛んだちんけな脳ミソではじき出された計算なんて
アテにならねーんだよ。殺すぞコラ」

「アイスくらいでガタガタ吠えるなアル。あの子たちは私に食べら
れて幸せそーだったネ」

「どーいう腐った目と頭持てばそんな風に見えんですか。オメーに
食われるなんて食いモンからしたら死刑執行なんだよ。閻魔様行き
なんだよ!!!」

いやはや、暑さは人を苛立たせるもので、ただでさえ気の長くない彼らがこうならない訳もないだろう。

時期は春などもうどこかへ行ってしまった、そろそろ梅雨の時期を意識し始める頃の五月下旬。正確には新八の言葉通り、あと五日もすれば六月。暦の上ではもうすっかり夏。とはいえ、この時期にしては例外的な暑さに三人はうちのめされ、いつもにも増してダラダラと過ごしていた。

「まったく…オイ、なんか冷てー食いモン買ってこい。あ、俺わらび餅がいー。きなこで」

「じゃあ僕は黒み…ぶはっ」

「何で私がわざわざテメーらのためにこんなクソ暑いなか買い出しにいかなきやならないアル。お前らが買ってくるヨロシ。私ソウが
いい」

「オーイ、今までの会話覚えてっかー。まだページ変わってねエーぞー」

「僕叩い^{はた}ときながら何ちゃっかり神楽ちゃんリクエストしてんの。いーから早く行ってきてよ、もう」

「モウじゃない、ソウアル。早く行ってこいよオタク」

「るせーな、誰のせいで5箱ものアイスが一夜にして姿消したと思っただ。ソウの何ですか？1ですか2ですか3ですか？足鎖で繋いでバスルームに監禁してやるーか」

「あ、そういえば、前の文通篇のあとに土方さんと沖田さんの話あったじゃないですか。地愚蔵の。アレの元ネタソウの1って僕最近知ったんですけど」

「オイオイ、お前よくそれで銀魂のレギュラーやってんな。ジグソウに殺されんぞ」

「いや、その前に私が殺してやるアル。早くソウ買ってこいヨ」

「2ね。1もう観たから」

「オーダー増えてんじゃねーか。何で和菓子屋の後にビデオ屋行かないやなんねーんだよ。ていうか何で僕が行かないやなんねーんだよ」

「ったくぐだぐだぐだ細けーこと言うなって。お前が行けば全て丸く納まるんだよ。行ってこい、新八」

「オメーはその為に生まれてきたんだ。だから新八なんだ。それ行け新八」

「それ行けポチのノリで言うなよ、意味わかんねーよ!!!元凶はお前だろーがっ!!!!!!」

『ピョーンポーン』

理不尽な責め立てにあい青筋を立てていると、来客を知らせる音が万事屋に響いた。新八への猛攻が若干弱まる。

「…まったくタイミングワリーな。もう少しでタマ行かせるところだったのにアル」

「何度もチャイム鳴らしてねエってこたあババア共じゃねーな。よし行けシロ」

「せめて統一しろよな。せめて。

はーい、今でますよー」

急ぎ足で玄関へ向かう。引き戸越しにうつすら見える丈の短い着物のシルエット。

確かに、家賃の取り立てではないようだ。

『お待たせしました』という声と共にガラッと引き戸を開く。

「…くんちは」

開くと同時に外から湿度を含んだ熱気が入り込む。鼻をくすぐったほのかな香り。目に入る夏の気配を帯びた日差しと、そして、その女性。

「ここ、万事屋銀ちゃん、ですか？」

潤んだ唇が動くのを、ぼおっと見つめてしまう。

新八は、素直に、綺麗な人だと思った。モデルや遊女のような妖艶で華々しい美しさ、というよりは、すれ違ったとき、ふと振り返りたくなるような、そんな感じ。

「あ、はい……依頼の方ですか？」

「いえ、そついう訳ではないのですが……」

「……？」

申し訳なさに少し顔を歪めて、彼女は続ける。

「こちらに、坂田銀時さん…はいらっしゃいますか？」

「えーと…いますけど…」

「本当ですか？？会わせて頂いてもいいですか？」

「か、構いませんけど……」

…取り敢えず、御上がりください」

「銀さん。お客さんですよー」

「デキターにお相手してさしあげて、シロー」

「違うヨ、タマル」

「だからどっちもちげーよ。」

もじもじといらしてゐるんですけど。銀さんにお隣さんですよ。」

「あー？」

ソファに横たわって仰向けに読んでいたジャンプからやっと視線を移した。

「…………えーっと、…………」

ようやく身体を起こしてしばしのシンキングタイム。しーちゃんしーちゃん頭の中から彼女の記憶をまさぐる。

「……………どっかでお会いしましたっけ。…いや、ないない。うめエ甘味処とキレーなネエちゃんはずってー銀さん忘れねえもん」

立っていたのは目を惹く浅葱あまぎの髪を惜し気もなくそのまま下ろし、この日に日に暑さを増し始める五月下旬の頃合いに似付かわしい、薄手の着物を纏った女性。

膝上丈の裾からは折れてしまつのではとも思えるほどに華奢な両足が晒され、その色はまるで今日日きょうじつの時候を忘れそうになるほどの透き通った白を呈し、潤沢を帯びた瞳は品の良い、清澄な百塩茶ももじおぢゃの色を湛え、目を惹く浅葱の髪と鮮麗な調和を為していた。

纏う着物は彼女の相貌と見事なまでに釣り合い、またそこから彼女のセンス、内面的な美しさ等も窺い知れる。

万事屋従業員二人はソワソワしていた。彼女は銀時を知っていて、銀時は記憶にない。しかもかなりの美人。

…軽犯罪法違反ではなかつたか。

「お久しぶりです……白夜叉様……」

「…は？」

しかし彼らの予想は彼女のこの言葉でぐらりと揺らいだ。

そして銀時も、心地のよい訳はない呼称に若干眉をひそめる。

「え？いや、あの……どちら様？」

「お、お忘れですか？ナギ榊ですよ！昔、大変お世話になった」

「榊……？」

もう一度全身を眺めてから彼女の顔をまじまじと見つめる。

「あの、と、取りあえず、座ってください。お茶、出しますので……」

向かい側に姿勢正しく彼女が座る。

揺れる浅葱色。向けられた百塩茶。

……あ。

『お前、行くあてはあんのか?』

真夏のそれとは違う柔らかな陽光。肌に触る涼やかな秋風。ヒゲラシの声はまだちらほらと響いていた頃。

偶然通った川沿いで偶然そこにいた少女と偶然出会った。

人相が変わるほどの酷い衰弱とやつれ、そして涙により赤く腫れぼった目。

あの時の光景は、今でも鮮明な状態で脳裏に焼き付いている。

…そうか。

「久しぶりだなア、枷！」

「思い出されましたか^^」

「あー思い出した思い出した。ちょっと見ねーあいだにすっかりデ
カくなっちゃったじゃないのオ。銀さん気付かなかったよ」

ようやくと目の前の人物との切っても切りがたい関係を思い出し、
銀時も顔を綻ばせて久しぶりの再会を喜ぶ。

「突然押し掛けてしまい、申し訳ありません…ご連絡しようと思っ
たのですが、連絡先まではわからず…」

「いーっていーって。それより、いつ来たの？元気してた？」

「…あの、銀さん」

「このネーちゃん誰アルカ？」

先ほどまでの戸惑った空気が一変し、どうやらかなり付き合いの長
い間柄な様子。

銀時がこの二人と会う以前からの仲のようで、当然二人は知るよし
もない。

「ん？あー、まあ、昔の連れってどこかな」

「あ、申し遅れました。私、榊と申します。昔、白夜叉様に変お世話になった者で」

姿勢を正して丁寧な口調で挨拶する榊。

銀時の知り合いにこんなまともな人物がいたとは、と、内心二人は意外に思っていた。

「そうでしたか。初めてまして、僕は志村新八です」

「神楽アル。おしりおきを」

「お見知りおきね」

くすり、と優しい笑みを顔に浮かべる榊。

何故だろうか、見た目だけみれば彼女はかなり年若い。なのにそのわりには言葉が乱れておらず、品のない振る舞いもしていない。

ひとつ言うなればその態なりだけは若者らしいというくらいだろうか。

着物もメイクも、きつと流行りのものだ。

「あー、あのさ、榊……“白夜叉”って、やめてくんない？」

「え？あ、はい……では、どのようにお呼びすれば……？」

「銀時なり銀さんなり、好きにしていーけど」

「…わかりました」

“ 白夜叉 ”

それはつまり、彼女の言葉にもあったが、銀時が白夜叉といわれ戦場を駆けていた頃からの仲ということ。

それならば、自ずと桂、高杉、坂本などといった面々との繋がりも容易に想像できる。

「で？今日はわざわざこんなとにまで足運んでくれちゃって、どーしたの？久しぶりに顔見せに来てくれた？それとも、なんか用が…」

バタンッ

銀時の言葉を遮るように、近くで聞こえた大きな物音。加えて、何やら外が騒がしいような気もする。

…何だか嫌な予感。

「すまん、銀時。しばらく匿ってはくれぬか」

予想的中。招かれざる客人の登場だ。しかも玄関からではなく、なぜか銀時の自室から。

その人物は、かつては銀時らと共に戦場を駆け互いに背を預けあい、終戦後のいま現在も攘夷活動を続けている、桂小太郎だった。

狂乱の貴公子、爆弾魔、逃げの小太郎……様々な名で称される彼だが、正直、一言で言えば、少々頭のぶっ飛んだ人物である。

「それともなんか用があつて来たワケ？ま、普段なら身内の依頼でも払うモンはきつかり払ってもらうんだけどよ、お前なら特別にタダで銀さんばりばり頑張っちゃうぜ」

「あれ？いや、あの、ちょっと？少しかくま……」

「銀ちゃんのツレなら私ごっさ張り切るアル！！任せるヨロシ」

「あー、すいません、銀時くん、僕少し匿ってもらいた……」

「そういうことなら僕も喜んでお力になりますよ。お枷さん、どうぞ遠慮なくおっしゃってください」

「いやあの、本当にすいません。その前に僕のお力になってくれませんか、ホントに」

苦笑いする枷にお構い無しにいつもの万事屋ワールドを展開する三人。桂があちこち動き回って視界に入りどれだけアピールしようとも、蚊の羽音ほどにも気にせず徹底ムシ。

遂に存在を認めた銀時がやっと反応を返す。

「るっせーな、チラチラチラチラ視界に入ってくんじゃねエーよ、うっせーしい！……とっせーと帰れ」

「ヅラあ、そこ邪魔アル。カメラの前に立つなヨ」

「なに、カメラだと？今回は全編活字体だと聞いていたが、カメラがあるのか」

「あーめんどくせー、クソめんどくせー。オメーが出てくっせと途端に話がややこしくめんどくさくなんだよ。とっせーと帰れ」

「カメラはどの辺りだ？そうか、ここか。なら俺はこの辺りに立つとしよう。どうだ？これで……」

「……っせー……っせー……っせー……っせー……」

とぅとぅ蹴倒されてしまった桂。

ぐはっ、という声と激しい打撃音と共に床に横たわる。

「何でオメーはいつもいつもノーサンキューなタイミングでしか登場できねーんだよ！！！！すっこんでろお尋ねモンが！！！！！」

「ぐぶっ……何を言う、きちんとノックをしたではないか」

「オメーの代わりに俺が閻魔様への扉をノックしてやるよ。いてま
じぞ」

青筋を立てて

『どーせイヤつたつて出ていかねえんだろ』

と桂を睨み付ける銀時。

匿ってくれ、と言うのだから、いつもの通り真選組を引きつれて追いかけてこの最中なのだろう。榊が訪ねてきているというのに、今日に限ってヤツらを連れてこないでほしい、と心密かに思う。

「お久しぶりです、桂さん」

微笑をこぼしてわざわざ立ち上がり、口元の血を拭う桂に一礼する
榊。

予想通り、桂とも面識があるようだ。銀時と同様、桂に対しても敬意が感じられる。

「お、お前……お榊か!？」

「今気付いた! てリアクションすんじゃねーよ! …!」

またしてもベシツと一発くらう桂。

一目見てスツと名前がでてきた桂に対し、銀時が思い出すまで少々時間を要したのは桂には内緒の話である。

「久しぶりではないか、お枷！すっかり大きくなって……いつこちらへ来たのだ？今はどうしている？」

「オーイ、久しぶりに会った親戚のおじさんみてーになってんぞ」

「アンタが来たせいでなんか話がこっちゃんになっちゃんってるじゃないですか」

「ページ変えて仕切りアル」

「うむ、なかなかこの生地はいい風味をしているな」

「ふおおー!!!このクリーム最高アル!!!!!!」

「くどすぎなくて程よい甘さですね」

テーブルを囲んだ彼らの手にはいかにも美味しそうな洋菓子。そしてテーブルには有名な高級洋菓子店の名が入った箱。榊が土産にと、糖分好きの銀時のことを考えて持参してきたらしい。

一般庶民にはなかなか手の届かない店の品を計五つも土産に持ってきたのだから、経済的な余裕がうかがえる。

「うんめエ…一度は食べてみたかったんだよ、このケーキ。お前店のチョコイスもケーキのチョコイスも全てにおいてセンスいいわ、マジで。銀さんの好みをど真ん中直球ストレート」

「ご満足いただけたようで何よりです^^*」

朗らかに、それでいて慎ましく微笑む榊。まるで初春の野のように穏やかで美しい笑顔だ。

見れば見るほど、接すれば接するほど魅力的な人物である。

「そっぴゃお前、よくここが分かったな。どーやって調べたんだ？」

「潤ですよ。彼が辰馬さんたちに聞いて、教えてくれたんです」

「潤…が、辰馬に…？」

「お、お忘れですか？^^…今は船で商いをしているんですが…」

「あー、そーいや潤は商いをー…って、知らねーよ銀さん！今の今まで知らなかつたよ！？」

「まったくこれだからお前は…。潤ならたまに大阪にも出入りしているって俺は聞いたぞ」

「ええ、その通りです^^今では経営も安定して、規模も随分大きくなっているんですよ」

「…や…ちょっとマテ」

新八や神楽は初めて聞く潤という名前。

銀時が複雑に絡み合う記憶を手繰っていく。

白き衣を羽織っていた頃。

失ったモノの喪失感と共に幕を閉じた戦乱。

それぞれの道を歩もうと、散ったかつての盟友…

過去の記憶が色彩を帯びながら蘇る。

ああ…そついや、あんな出会いだっけか。

「潤ちゃん…久しぶりだな」

「ああ。あやつとはあの時以来だな…」

お榎、口振りからして、今の潤をよく知っているのだからっ…」

「はい。現在は星間貿易“陸援隊”を組織して、辰馬さんと同じように異星から異星へと渡り歩きながら貿易業を営んでいます。また地球でもたくさんのお金をしたりで、現在では名の知れた商人の一人となっています」

「…そうか……あんなだった潤が、まさかそんな道を辿るとはな…
…あの頃からは微塵も想像できん」

懐かしさに目を細める二人。その表情からは“潤”を慈しく思う程度の深さが窺い知れた。

「オメーは今どうしてんだ？てか今までどうしてたんだよ？潤とい
るのか？」

「はい。あの後、それぞれが散り散りになってからは、仰せの通り
潤と暫く行動を共にしました。現在は…」

「ちょいちょいちょい…『仰せの通り』って？」

「お前の記憶能力の乏しさには今更ながら失望する。

…確か、俺の記憶が正しければ、潤はお前に、榊のことを頼むと言
われていたはずだ」

話が読めず慌てて聞き返す銀時へ呆れを含んだ溜め息を一つつき、
自分の記憶の程を話す桂。

徐々に表情には確信さが帯び、やがて頷きながら、いつもの間延び
した声で言った。

「…あー、はいはい。言ったわ俺。そんな感じのこと」

『榊のことはよろしくな』

『承知しました。仰せのとーりに』

よく晴れた日のこと。

くすみの無い千歳茶の髪を風に靡かせ、澄んだ^{ますはないろ}舛花色の瞳を伏せて、右腕を緩やかな動作で胸の前に運び、左腕は腰の後ろに添える。左足を軸にして右足を円を描くように一歩引き、爪先をトンと地面につけ、すらりとのびた腰から上を折った冗談混じりの洋式敬礼スタイルで目の前の青年は命を快諾した。

『あなた様の頼みなら、喜んで』

「…で？今現在はどーしてんの。潤というワケ？」

「はい。現在も潤と共に行動しています。ただ、私は完全に商いに従事している訳ではなく、時たま気ままに星々を渡り歩いたりすることもあります。彼の艦隊が私の家で、私も彼の補佐をしています。取引先の星に一人滞在してみたり、またその星から近辺の星へと一人行ってみたり…そう頻繁ではありませんが、潤が快諾してくれることもあって」

「…なるほど。言ってたもんな、オメー…
…で、今日わざわざ俺んところに来てくれたのは？ただ単に遊びに来たのか？それとも…」

「あの一…非常に言いづらいんですけど…」

「あ？」

『んだよ、空気読めねーな』とイラつく銀時。

違う次元の話をする戦時経験者たちの全く読めないやりとりを蚊帳の外で聞いていた新人たちが、話の花が咲く前に状況を告げる。

「銀ちゃん、外なんか騒がしいアル」

「騒がしいのはいつものことだろ」

『全員、位置につけー』

「…ん？」

嫌な予感。テーブルの湯呑みに、ぴしっとヒビが入りそうだ。

どこかで聞いたことのある声。…そういえば、ここにいる長髪は追われている身だったような。

「…銀時。裏口はどこだ」

「オメーここ二階だってことわかって言ってるか!？」

ダン　ダン　ダンッ

『だぁーんなぁー、すいやせーん。ちとお伺いしたいことがあるんですがー』

インターホン音の後に戸口を叩く音。

間違はなくよく見知った人物。指名手配中の攘夷浪士を追う重要な職務の遂行中とは思えない、間延びした声が響く。

「チツ…ツラっ、早く出る！」

「ツラじゃない、桂だ。
すまぬな、銀時。邪魔をした。お枷、また会おう」

「え？あ、はいっ…」

桂も桂で、追われている身とは到底思えない物腰で状況を把握しきれない榊に暫しの別れを告げる。

ガラツ、と戸口が開く音がした。

『すいやせん、旦那。鍵開いてたんで、入らせてもらいやすぜー』

有無を言わさぬ響きの入宅宣言。すぐ傍まで気配が迫ってくる。

「あーっ、ちょっ、待て沖田くん！お願いだからもうちょっと待って！いま取り込み中ってヤツだろう！！！」

必死に銀時が留まるよう声を張り上げる。

桂を逃がす時よりもずっと焦った様子で銀時が指示を出した。

「新八っ、神楽！ 柵を俺の部屋にでも入れろ！」

「えっ、ど、どういふことですか？」

「いーから早く！」

訳がわからず戸惑う二人。だが、雰囲気的に柵を戸口にいる来客と接触させたくないのだろうということはわかる。

仕方なく新八は急いで柵を銀時の部屋へと通した。

「はいはい、いま出るからねー沖田くん」

銀時が急ぎ足で居間から戸口へと向かう。

そこには、数名の隊士を従えた、真選組一番隊隊長、沖田総悟が立っていた。

見かけは虜になる女性も多からう甘いマスクに、遊び心を覚える耳障りの良い声の江戸っ子口調。私服姿でいれば、十八の若さで武装警察の一部隊の隊長を勤めているとは思えない、さわやかな好青年。

しかし、人を見かけて判断してはいけない。安易に近づけば、彼のドSという名の毒牙にかかることになる。

「ハア……また物騒なモンぶらつかせていきなり人んち押し掛けて来やがって、一体何の用？」

「桂を追ってたらここいらでまかれちまったんですが、旦那、匿ってやせんかイ？」

「オイオイオイ、何でそんなクソメンドくせーこと俺がすんだよ。喜んで門前払いしてやらア」

「じゃあ、何さっきバタバタしてたんでイ。ちいと家ん中、見せてもらいますぜ」

「沖田くん。男ってのはな、誰だって他人を家にあげたくねーときがあんだよ。銀さんいまお取り込み中なの、わかる？」

小指を示しながら銀時がわざとらしく沖田に迫る。

対して沖田は軽く微笑み、いかにも興味ありげな口調で返した。

「へえ。遂に旦那にもそういうのが。なら、尚更あげてくたせエ。
どんな女が旦那を口説き落としたのか是非見てみてエ」

「だから今はダメなんだってば。アレだから、いいとこだから」

「昼真つから旦那もやりますねィ。どの部屋でィ」

「わーっ、ちよっ、ダメダメ、ほんとーにダメだから！いくらドS
だつてここは銀さん譲らねーからな！！！」

変な方向へ話が行き、むしろ彼を助長してしまった様子。靴を脱ごうと沖田が迫る。

そのとき、沖田の視線が端に綺麗に並べてある下駄へと落とされた。

黒塗りの台に、華やかな柄の二石鼻緒^{にしはなごも}。明らかに、女物だとわかる。

「…まるつきし嘘じゃなかったんですかい。チャイナのものにしちや、洒落すぎてる。旦那……ここはひとつ、腹を割って話す必要があるみてーでせう」

「いや、俺はナイね、全く。お前と語り明かすことなんてこれっぽっちもねーから、だから今すぐお帰りください」

「水クサイじゃねーですか、旦那。俺とアンタの仲でしょうっ？いつからでイ。どっちからいつたんでさア？」

「オイコラー。お前の年頃にそーゆーのに興味があるのはヒツジヨ
ーにわかるが、大人をからかうモンじゃねエぞー。いいから早く帰
つてくれよ、頼むから」

まずい。このままでは押し負けてしまいそうだ。完全に仕事そつち
のけで違う方向へスイッチが入ってしまったている。

このまま力押しで突っ返すしか…

『おっ、沖田隊長オォーっ！！！！！！』

『桂が現れましたアアア！！！！！！』

銀時がじりり、と足蹴りの準備をしようとしたとき、外にいた隊士が叫んだ。沖田が素早く戸口から様子を窺う。

先程沖田が押し掛ける寸前に桂は逃げ仰せたはず。逃げの小太郎とも称される彼が敵方に遭遇する前にその場を後にしておいて易々と見付かるはずはない。

「たった一人の侍も未だろくに捕まえられぬ真選組の諸君！たまにはまともな手柄の一つでも立ててみたらどうだ！」

銀時も戸口から様子を見ると、通りの向かいの屋根には確かに桂の姿があった。

逃げるところかわざわざ声を張り上げ、挑発めいた発言をしている。

「あいつ……」

「かアつらアアア……!!望み通り今日こそお前をしょっぴいてやる……!!」

沖田がバズーカを片手に下にいた隊士に先に命令を出す。

「旦那、今日のところはひとまず切り上げませう。またじっくり、お話をうかがいに来やす。覚悟しといてください」

そう言い残し、階段を駆け降りていった沖田。
ふう、と銀時が息を吐く。

「…助かった……」

「オーイ、もういいぜー」

居間への廊下を歩きながら声をかける。

襖が開かれ、納得のいかない表情をした神楽、新八に続き、敷居を踏まぬよう注意を払った榎が出てきた。

「銀ちゃん、どーゆうことアルか。何で榎ヤツから隠したネ」

「銀さんや桂さんと昔から面識があつて、沖田さんと会わないようにしたつてことは、お榎さんは攘夷と関係してることですか？でもそれにしても、今はそんな攘夷活動とかしてないみたいですし……どうしてわざわざ……？」

至極当然の疑問を口にする二人。

当の本人は右手で頭をボリボリと掻きながら、その気だるげな雰囲気を一層強くして、いかにも面倒臭そうにしている。

「あー……まあ、アレだ、色々と事情つてもんがあんだよ。大人の事情つてもんが」

「大人の事情つて何ネ。そう言えば毎度ピンチを切り抜けられるとか思ってたんじゃないぞ天パ。こちとらそんな単純じゃねーんだぞ糖

尿」

「単細胞のクセに何ナマ言っただよ、るせーんだよテメエはよオ
！！事情ついたら事情なの、ファイリングで黙つとけそこは」

明らかに何か隠し事をして煮え切らない態度の銀時。

こいつが嘘をつくときといえば、自分の欲を満たすなり得をするなり、何かしら自分の為になるものが大半だ。

しかし今回はこの『大人の事情』とやらを守り通しても、この意地汚い大人が得をするような事柄があるとは思にくい。ならば考えられる理由は数少ない。

怠惰という言葉そのものとも思えるこいつが自分の利益なくして何かしら嘘なり隠し事をするとき、その裏には何かがあるのか。それは伊達に同じ時を過ごしてきた訳ではない自分にならわかる。

そこまで考え、新八は話を元に戻した。

「それで……話がきれてしまいましたが、お榊さんはどうしてこちらへおいでになったんですか？」

「そうそう。遊びにきたのか？なら“花のお江戸”を案内してやってもいいぜ」

「え！？ほ、本当ですかっ？」

冗談とも本気ともとれない銀時の誘いに、榊が目を輝かせ若干身を乗り出した。

憤ましくも、やはり今時の若者だろう。

「おうよー。あんなところからこんなところまで、江戸っ子として詳しく案内してやらマ」

「あ、いや、でも……………案内だなんて、ご迷惑では……………？」

「ご迷惑になんてなりやしねーよ。それともアレか？銀さんと二人きりのデートは嫌か？」

「ふ、ふたりきりでッ、でっ、でーとオツ!!???

いい、嫌な訳ありません……………ッ!!」

何かに気付いた相好でハッと口を押さえる榊。

「あら、嫌じゃねーの？それは榊ちゃん、どういう意味っすかね
エ？」

「~~~~~ツツ！／／／」

「あれ？顔赤いよ榊ちゃん？どうし……………」

「くをおらアアアアアア！……………」

「ほあたああアアア！……………」

「ブフオオっ」

極めつけと言わんばかりに赤面紅潮状態の榊の顔を覗き込もうとするも、それが叶わぬうちに助走をつけた玄人跳の飛び蹴りが炸裂。

（しかもダブルで）

某青春ドラマを彷彿とさせるような煌やかな形状の鮮紅の雫が宙を舞った。

音を立てて銀時の身体が床に叩きつけられる。

「てんめえいつぺんいわしたるか、あん？調子こいて何ハレンチなニヤけ顔さらしてんだアアア！！！！悪ふざけも大概にしろコノヤ
口オオオ！！！」

「榊が低腰なのがいい気になって好き放題やってんじゃないネ！何さり気にデートとか言ってるアル！！オメーなんかリードされた

ら間違いない最後はホテル行きヨっ！何されるかわかんないネ！！」

「ブ…ちょ、ま…違つって…ほら、アレだ。俺は二人きりの方がよく案内できると思ってたなあ……………」

「何処で何をよく案内するネ！最終的に何を案内しようとしてるアル！！榊が下手についてるからって、立場利用すんじゃないネ！！」

「お榊さんも、過去になにがあつたかは全然知りませんが、こんなについてくるとろくなことありませんよ！！！！
つて大丈夫ですか？顔真っ赤ですよ？」

「…だ、だいじょぶ…ですよ……………わ、わたし…何も、ふ、不埒なことなんで…考えてませツ…からっ……………」

「ちょ、全然大丈夫なことないじゃないですか！！すごい血ですよ！？」

「…し、新八くん…………俺このままじゃ貧血になっ……………ブハッ」

「テメーに言っただけじゃねえんだよ！そのまま垂れ流してる永遠に……………」

「それでもって出血多量でのたれ死ぬアル。なんなら身体破損で逝くアルか？あん？今なら“出血”大サービスで特別に選ばせてやるネ！！」

「いや、あの……それだけは、ほんと勘弁してください……ほんと何か、曙光的なものがみえてきそうなんで……てか、やめてオメーだと死ぬからマジで！！」

「お榊さん？目が据わっちゃってますよー？……しっかりしてくださーい！！？」

第二部 お江戸巡り(前書き)

『もしもし、近藤さん？非番のときに悪いな』

第二部 お江戸巡り

「ケホンツ…………と、取り乱してしまい、…失礼致しました……」

襟元を正して背筋をキチツと伸ばし、姿勢正しくソファに座る榊。額、首筋にはうっすらと汗。顔は僅かに紅潮している。

「大丈夫ですよお榊さん。悪いのは全部コイツですから」

「榊は何も悪いことないアルヨ」

向かいのソファには居丈高気にするいつもの二人と、保存状態の悪い死体が一体。

「…それで、どうしますか？お榊さん、お江戸巡りなさりたいんですよね。……コイツと行きますか…？」

「いやっ、あの、やっぱり、ぎ、銀さんのみならず、お二方にもご迷惑になってしまいますし……お頼みするわけには……」

「…でも、誘われたとき、随分嬉しそうでしたし……遠慮なんてなさなくてもいいんですよ？」

「こんな奴どこ引きずり回しても何も罰あたんないネ。好きにつか
ってやったらいいアル」

「いえ、そんな………ハハ！」

自分が敬愛してやまない人物と彼らの間柄を知らない榊は、この家
の流れに若干気後れ気味。

大都市 お江戸を見て回りたいのは紛いもない本心だが、だからと
いって自分の敬慕する人物に案内人をしてもらうのでは、文字通り
申し訳がたたないというのが彼女の心中だ。

とはいえ、彼女も見掛け通り年頃の若娘。大都市に対する好奇心は
水際立ったものがある。

「……………ッテテ……………」

無惨な状態となった万事屋オーナーが緩慢な動作で身体を起こす。

「…あー、いってエー……………うわコレ絶対やっちゃったよー……………肋のあたりボキボキだよ、コレ。もう骨としての役目果たしてなくなるといっつよりもう六骨じゃなくなね？二十骨くらいじゃね？」

「自業自得です」

「二十で済んでよかったアル。なんならあと5セットでキリよく百骨にしてやるーか」

報復を受けたにもかかわらず未だ軽口をたたく銀時に冷やかな目を向ける神楽と新八。

だが、居住まいを正し一呼吸ついた銀時は、それにはただ溜め息をひとつ返しただけで、いきなり唐突な質問を投げた。

「…なあ、オメーら。榊は好きか？」

目付きは普段と変わらない。声もいつもの気だるげなヤル気なしト
ーン。

いきなり何をとは思ったが、質問の答えはすぐにでてきた。

「え？そりゃあ……誰かさんと違って礼儀正しくて謙虚で清廉で、
素敵な方だと思えますよ」

「おまげにかわいくて性格もいいネ。誰かさんと違って私好きアル」

「ほんっとかわいくねーなお前ら」

いちげい
一睨してまた盛大な溜め息をついたあと、軽く戸惑いの表情を浮かべていた榎へ視線をあわせた。

「なあ、榎。こいつらがよオ、どおーしてもオメーに江戸を案内してえんだとよ」

「…え……………」

銀時が二人を見遣る。

「すまねえが、ちと付き合ってやってくんねーか」

やっと意図がわかった二人は、まったく、と言わんばかりに目を見合わせ、微苦笑した。

「わあ〜っ
」

やや汗ばむ初夏の陽気に包まれたかぶき町の町に行く。

行き交う人々、移り変わる景色、そしてなにより、前方に聳えるこの国の象徴

この国が天人による傀儡政権下へと伏した象徴が、訪都の代表として榊を迎え入れていた。

「降りてきたのは初めて！^^」

今や江戸は流行、情報、文化、等々様々な面においてその最先端をいく大都市だ。“花のお江戸”ともよばれ、地方からしてみれば憧れにも近い存在。まして年頃の若い娘であるところの榊にとっては一度は行ってみたいという思いが殊ことの外ほか強い。

これまでの腰の低さ、慎ましさから、彼女が銀時に何かしら事を頼むなど、彼女にとってはまさに畏れ多くも、というものだろう。にもかかわらず、憚はにかりはしたものの最終的には申し出を断らなかつたのがその徴しるし憑じゆである。

彼女の地球における活動拠点『大阪』も、決して地方などに分類できるものではない、大都市だ。全くの地方からでてきた田舎者の都市に対するそれとは、度合いも何も違うものがあるだろう。

しかしながら、あまりにも無邪気に、屈託の無い笑顔で百塩茶の瞳を輝かせ笑み栄えている榊の様子は、どうも大阪なんて都市を知っているようには見えにくい。

榊の後方からそれを眺める三人、ただ一人 銀時を除いてそれを顕著に感じていた二人は、堪らず疑問を口にする。

「ねえ、銀ちゃん」

「あ？」

「枷つて、大阪出入りしてるアルヨネ？大阪、そんなに田舎なところだったアルか？」

「大阪も商いが盛んな町で、江戸に次ぐ大都市ですよ。別に、そんなに変わったところもあまりないと思いますけど……」

自然な疑問に、先程から幾度かみせている訳知り顔をチラつかせながら答える。

「榊はよオ、見てのとーりピツチピチの若娘、人生謳歌中の花盛り時だ。若え頃、特に女に限っては、何でもかんでもに興味持ってはしゃぐ時。それがこの国の首都、この星の玄関口的なここに来てみる。いくら都市に慣れてたって、ああなっても何ら不思議はねーよ」

さらりと合点のいく返答を返され、納得してもう一度目線を榊へ戻す。

確かに、野暮ったい田舎者とは無縁の洗練された彼女の風体は、すっかり大都市 お江戸の風景に馴染んでいた。イマドキの若者であ

る。今日初めて江戸に入ったとは、見た目では思えない。

「そついえば、お榊さんておいくつなんですか？」

「え〜っと……アレ、ちょっと待てよ……いくつだっけな」

ちょうどその時、目移りして足早になっていたのに気付いた榊が慌てて歩みを止めた。

「あ、すみませんっ はしゃいじゃって^^」

「んなこと気にすんな。それよりよ、オメー今いくつだっけ？」

「え？ええっと…17です」

「アレ？じゃオメ、まだ酒飲めねーの？」

「はい 車にも乗れません^^」

「僕よりいつこ上なだけか…」

「のワリに随分よくできた娘さんネ。新八、それでいいアルか」

「テメー少しは遠慮ってモン覚えるよな。凶星突いてくんじゃねえ
よ」

心の中を見透かされたように言われ、静かにキレる新八。

彼女が一つ上なだけと知らされれば、16の少年少女は確かに落胆するかもしれない。

「…さーてと、んじゃ、そろそろ行くか」

逸る気持ちを抑える枷を察し、本題へ入る銀時。
空は晴れ渡り、そよ風もあつて絶好の散策日和だ。

「榊。どっか行きてーところはあつか？」

極力抑えようとしているのが感じられはするものの、やはりやや興奮した様子で希望を告げる。

「…それじゃあ……」

『はい、団子っつね。まいど』

『ありがとう！おじちゃん！』

『…では、近頃話題の上方見物の取材で、現場に花野アナが行って
もらってます。現場の花野さん。花野アナー』

『はい。こちら現場の花野です。ご覧ください……』

行き交う人々で雑踏する賑やかな繁華街。人々の声や、電化店の陳列窓に並ぶ液晶テレビ等、意識を巡らせなくとも耳に届く様々な音に溢れて殷賑としている。

いわゆる、江戸の平生の風景だ。取り立てていう程の名物がある訳でもなければ、別段、観光対象となるものもない。

「どーだ？お江戸の空気は」

「やっぱり違いますねっ　ほんと、わくわくしちゃいます^^」

すっかり満悦として破顔する榎。

『榊、どっか行きてーところはあつか？』

『…それじゃあ、まずは……………』

普通の、お江戸の空気を感じたいです^^』

銀時の問いに、彼女は嬉々としてこう答え、今に至る。

どこか好きなどころへ案内してやるといっているのだから、都市に
対して馴染みのない、全くの田舎者であれば、彼女とは違った行き
先を所望しただろう。特に場所を指定しなかったのは、彼女が大阪
という地を知っていたからだっただろうか。

「僕ら、江戸以外の都市のことなんて全然知らないんですけど、大阪とはどこら辺が違うんですか？」

「んー…やっぱり、雰囲気とかも違いますし…人の服装とか、天人や飛行船の数…もちろん、言葉や語調も違いますね」

「なるほど……」

「大阪ってどんなところなのアルか？私全然知らないアル」

「どんな所……んー…活気がある、っていうんでしょうか……みなさん元気な方たちが多くて、他人同士でももう家族のような方々がいらっしたりもします。天人が来る以前の大阪を知っている方は、変わった、とおっしゃいますが、それでも私は、決して悪い町だとは思いません」

実感のこもった口調と眼差しが、彼女が心からそう思っているのだということを確然と示していた。彼女の大阪という町に対する視点

の確固さを感じられる。

「…そういえば、お榊さんって関西弁じゃなくて標準語ですよね。使い分けてるんですか？」

「はい、そうですよ。私、生まれも育ちも大阪じゃないので……それに、今でこそ向こうでは自然と関西弁になったりもしますが、やっぱりこっちの方が性にあってますしね」

「関西弁も喋れるアルか？私榊の関西弁聞いてみたいネ！話してみ
るアル」

「えっ！？いや、そんなっ…あまり上手でもありませんしっ……」

「意識して使ってる方言じゃないならうまいへタなんてありませんよ！僕も聞いてみたいですっ」

「…な、何と言えば……？」

「『神楽ちゃんって超カワイイよねー もう万事屋の男共なんかにはもつたいなあい。どうして一緒にいてやってんのかわかんないけど私がいないとコイツら全然ダメダメだから、出てくに出ていけないカンジー。てか、そろそろ御供の一人や二人欲しいんだけどーしてコイツらこんなにもイカしてないワケ？近場の男がこんなじやイイ女が廃るっていうかー。はきだめに鶴ってカンジだよネ。どっか繰り出して男の一人や二人ひっ捕まえて……』」

ドベシッ

「待てゴルアアアアア！！！！テメエどんだけお糞さんに喋らすつもりなんだよ！？てかなんてこと言わせようとしてんだ、ああ！！！！」

「黙って聞いてりや好き放題言いやがってっ！いいカンジに事流れてくかと思いきやテメーは何様のつもりですか、ああ”ん？何が『御供』だ、何が『イイ女』だ、何が『はきだめに鶴』だ！！笑わせてくださいんじゃねーよコノヤローっ！！！！」

「なっ、お前ら何してくれるアルカツ！！！！こんなか弱い美少女に鉄拳制裁下せるとかどんだけ凶太い神経してんだうをらア！！」

「オメーこそんなこと自分でペラペラペラ言つてて恥ずかしくなんねーんですか、あん？オメーがか弱い美少女なら全世界の淑女の方が弱い美少女になつちまうだろーがアアア！！！！」

「お通ちゃんに謝れ！お榊さんに謝れ！オメーがお榊さんの前でそれを名乗る資格はないわッ！！！」

「そこまで言うか、そこまで言い切るアルカッ！？いくらなんでも失礼ってモンアルヨ！！確かに榊は言うまでもなく見た目も中身もごっさかわいいネ！だけどあのお通だかいう小汚ねー小娘とは一緒にすんじゃネーヨ！！私の方が断然イカしてるネ！！！」

「お、お前なんつーことぬかしてくれとんのじゃわれアア！！！！お通ちゃんを侮辱するヤツは、どんなヤツでも許さねーぞクソヤロオオオオ！！！！！」

この三人が共にいる限りいつ絶えるとも知れぬ争いが勃発した。

最初は驚きと戸惑いに顔を染めた榊だったが、次第にそれは破顔して穏やかな笑みへと変わっていった。

自分の知らない、己が慕う人物の新たな面、いま彼が、共にいるという選択をした者たち、そして彼らの、酷く見えにくいのが、確かに真っすぐ通った“糸”によって結ばれたその強さ

出逢って僅かばかり、まだ互いの生い立ちや素性も知らぬというのに、彼らを見ているだけで、『互いが互いの居場所』とでもいえようか、繋がり深さが感じられた。

「……………きゅっ」

「あっ」

念慮に更けていると、誰かの肩口が軽くぶつかった。

「す、すみませんっ」

「いいえ、いいのよ。私が少しよろけてしまったの。ごめんなさいね」

申し訳なさそうに笑う女性。

きちんと纏められた焦茶の頭髪、乱れなく纏われた紅梅地の着物、
榊と同じ女性らしい丸みのあるラインに、薄皮の剥けたような白の
肌、整った顔立ちには淀みない澄んだ瞳という相貌は、初見の榊に
彼女の清楚さを疑いもなく感じさせた。

会釈してまた視線を戻す。が、それを見た清楚な女性に

『あら？』

と、また声をかけられた。

「あなた、あの人たちと知り合いなの？」

「え？あ、はい……もしかして、あなたもご友人か何かなのですか？」

「ええ^^^あの眼鏡の子は、私の弟よ」

「ええっ!?!し、新八さんのお姉様なんですか!?!」

目を見開き手を口元に添えて驚く榊。

肩が触れてしまった女性は、銀時らを見かけて視線を遠くへ向けているうちに足をもつれさせてしまった

志村妙だった。朗らかに微笑む彼女は軽く頷いて言葉を続ける。

「私は志村妙よ。新ちゃんと私は二人兄弟。新ちゃんと取っ組み合ってる神楽ちゃんとはお友達ね。その隣の銀さんとは、付き合いの長い知人ってところかしら」

『あなたは？』

と笑顔で訊ねる妙。

「私は柳と申します。銀さんとは、昔から懇意にさせて頂いてて…
…幼い頃、ある事情で銀さんが拾ってくださってから、何から何ま
で面倒を見てもらって、今の私があるのは、あのお方のおかげなん
です。今日も、何の連絡もなしにいきなり押し掛けてしまったので
すが、快く受け入れてくださって……本当に昔から、よくして頂い
てるんです。…あ、ごめんなさい 滔々といきなりこんなことを」

細めていた目を開き苦笑して詫びる榊。

黙って聞いていた妙が笑顔で口を開く。

「謝ることなんてないわ。お榊ちゃんがどれだけ銀さんを慕ってるか、とても伝わってきたわよ^^

新ちゃんからあなたの話は聞いたことがないわ。新ちゃんや神楽ちゃんとは会うのは、今日が初めてなのかしら？」

「はい。私、今は友人の艦隊で星間貿易業をしています。なので、江戸はもとより、地球の外で活動することが仕事柄多くて………地球での拠点も大阪の方ですので、銀さんとお会いするのは本当に久しぶりなんです。新八さんや神楽さんとも、今日初めてお会いして」

「まあ、そうなの？てことは、お江戸のことよりも、大阪辺りのことのほうがよくご存知なのかしら？」

「全くその通りなんです^^;ですので、僭越ながらも、こうして
お江戸を案内して頂いてるんです」

そう言つて、また視線を前方へ向ける柳。

先程からの相変わらずの口調と物腰、そしてこの眼差しも、言葉を
交わしながら妙の耳目に付いていた。

「……………ん？」

榊の視線になのか偶然なのか、銀時が妙の存在に気が付いた。遅れて二人も取っ組み合う手と口をとめる。

「あ！姉御オー！」

「姉上！」

神楽と新八が妙らの元へ駆け寄る。遅れて銀時も右手を頭へ持って

いきながら気怠さ全開で足を動かす。

「姉御！もしかして、榊と知り合いだったアルか！？」

「いいえ、違うわよ。夕飯の買い物帰りだったんだけど、神楽ちゃんたちが目に入って、声をかけようとしたら足先がもつれちゃってお榊ちゃんにぶつかってしまったの。そしたら、お榊ちゃん、神楽ちゃんたちと知り合いみたいだったから、声をかけてお話ししてたのよ^^」

「自己紹介の感じのようなことを話してたんです」

「そうだったんですか^^なら、仲立ちしなくてもいいですね」

新八の言葉に靡き顔を返し、そしてそのまま表情筋を僅かに変えた顔で銀時を見遣って妙が言う。

「ちょっと銀さん。銀さんがお榊ちゃんに江戸を案内したりしてるみたいけど、お榊ちゃんにへんなこととか教えてないでしょうね？」

いつもの笑顔を湛えたまま、妙が無言の圧力をかける。

「ああん？オメーのいう『へんなこと』ってどんなことだよ。どっからが『へんなこと』の部類に入んだよ。オメー、いまの短時間で榊がどんなタチかわかったろ。こいつにしてみりゃ、江戸自体がへんなことだらけだろ。江戸は“粹”の町だぜ」

榊のパーソナリティーを考えると、もっともな言い分である。

『それによ、』

と銀時が続ける。

「お前、勘違いしてねーか？聞いたかどうか知んねーが、コイツ、一応大阪に出入りしてんだぜ。へたすりゃこの町よりアウトゾーンだろ」

右手の小指を耳に突っ込みながら言う。

そして、それに妙が口を開こうとしたまさにその時、事は起こった。

「……お……えぞアアーン……！！！！」

何処からともなく、男らしい若干の囁れを含んだ声が。

「……あー、マテ、頼むからいまは……」

銀時が頭を抱える。

「うをつ妙さアーん！！！！いやあ、奇遇ですねえええー！！！！
こんなところでお会いできるとは、いやもうほんとに、偶然なのに
感謝ですねー！！！！」

相変わらずのテンションで向こう正面からゴリ、あ、いや失礼。

特別武装警察真選組局長 近藤勲が駆けてきた。

剣を握らせればその豪快かつ剛勇な剣捌きで敵を薙ぎ倒し、内面では人の欠点を包み込み長所を伸ばす善人の一面。クセ者揃いの真選組を一つに束ね、その信頼を一身に集める偉大な好漢

だが、今はただの変態ストーカー以外の何者でもない。彼が紺地に黄色のラインの隊服を着でもしていなければ、誰も彼が、まさか真選組隊員、ましてその頭だとは思えないだろう。

「いや、これは偶然なんかじゃないっ！俺とお妙さんとの間にあ
る、閻魔大王でさえ切れない深い愛の絆が俺たちを………」

「……………? ? ;」

もちろん状況を理解できるはずもなく困惑顔を浮かべる榊。
銀時かというと、近藤が纏っているのが緒そほの着流しだとわかり、抱
えていた頭をやや持ち直していた。

彼がこちら半径2 m以内に接近したその瞬間に、榊の困惑顔が驚きと動揺と、僅かといえない恐怖で引き攣ることになるのは大抵の方が御察しの通りだろう。まったく、期待を裏切らない御方である。

「……………」

つい数分前と

状況は何ら変化していない。

ただ一つ、

付近に死体が一体

転がっていること以外は。

死因 顔面強打 及び精神的打撃

「……あ、あの………」

やっこの思いで榊が口を開く。

「どーした榊。顔引きつってんぞー…って、それもそうか。慣れてねーモンな、オメーは」

「お榊さん。おっしゃりたいことはよくわかります。いつものことなんで、気にしないでください」

「飽きも懲りもしねーでよくやるアル。毎度まいどご苦労様ネ」

慣れた三人が口々に開口。

手前を披露した女性が
満面の笑みを
顔に貼りつけて言う。

「あら、どうかしたのお枷ちゃん？表情が強ばってるわよ？」

素知らぬ様子で襟裾を正す
爽やか笑顔の妙。

枷とて、馬鹿ではない。

たった今目の前で起きた
出来事を現実としてとらえ
られないほど愚鈍な思考回路を

持ち合わせてはいない、が、
いくら何でも我が目を疑いたく
なるというものだ。

榊の頭の中では天使の如く
頬笑みを浮かべていた
つい先程の妙と、
がたいのいい成人男性を
問答無用に拳一つで
殴り飛ばした女性の姿が
渦巻いていた。

「……お、お妙殿は……柔術か何か、稽古をつけていらすのですか……」

つつ立つたまま、
伏した男に声をかけるのも
忘れて及び腰に尋ねる。

「お柳さん、姉上はですね……見た目はそんなこともないんですが……なんていうか、ちょっと……个性的というか……ゆ、ユニークな内面というか……」

「ま、要するにアレだな。見かけ倒しの猫かぶりオ……ぐはっ」

「まあ、銀さん？何かおっしやいました？」

弟という立場として

しどろもどろに答える新八の
言葉尻をとって続けた銀時へ
妙の裏拳がクリーンヒット。

血の滴る鼻を左手で押さえる。

「姉御はそこにのたれ死んでるゴリラにずっとしつこくストーキングされてるネ。自分の身を護るために常日頃の鍛練を怠らないアル。私姉御のこと尊敬してるネ！」

「…や、やはり、武術などの心得がおりなのですか…？」

「いや、常日頃の鍛練とか行なってないからね。姉上何の心得も持ち合わせてないからね」

冷静に新八が訂正。

ようやっと

状況を整理できはじめた榎が
近藤を気に掛ける。

「……あつ、あの男性はごく無事なのですか？ 気を失っていらっしやる
ようなんですが……」

「あー、気にしないでいいぞー。ヤツは殺しても死なねえから」

すると、この展開を待って
いたかの如く、近藤が
むくりと身体を起こした。

「…いやあ、相変わらずお妙さんは、惚れ惚れするような筋の通っ
たパンチを……こんな白く美しい、白魚おしほのような手からどどどやっ
あんな……って、アレ？」

膝をついて右手を

両手で包み込む。

いつも飛んでくるはずの
拳がこない。

それになんだか、いつもの
殺気も感じられなくて……

腕をたどった視線の先には、
困惑と戸惑いを浮かべた
見知らぬ顔がこちらへと
向けられていた。

「あ、アレ？ええっと、あなたは……」

確かに妙だと思った女性が
全く見慣れぬ人物だったため、
包んだ手もついた膝も、体勢を
そのままにまごつく近藤。

しかし、急に手を取られた
榊のほうは当然更に
まごついていて、先程からの
流れをみる限りこの男の根は
悪くないようだし、仮にも
我が恩人の知人ともなれば、
この握られた右手を返して
スナップをきかせ、反動を
利用して背負い投げを
かますことも憚られる。

ただ困惑顔を浮かべるしか
できず、恩人に助けを求めて視線を
送ると、それに応えてトゲを含んだ
声と共に、鋭い右ストレートが
目の前に飛んできた。

「『アレ？』じゃねえよ！……いつまで初対面の女の手え握ってんだアアア……！」

「ぶるるるる」

またしても近藤が地に伏す。

登場してからこれまでの

あまりの扱いに、

さすがの近藤も音を上げる。

「ち、ちよつとオ！登場してからろくろく人物紹介もなく殴打連発
つてどーなのコレ！？なにこの扱い！？オメーらなんかカツコイイ
紹介あつたじゃん！……！」

「あーんしんしろつて。ちゃんとオメーの紹介もあつたぜ？『善人
の一面』とか、『信頼を集める偉大な好漢』とか。十分じゃねーか」

「104字も使つてやつてるネ！ありがたく思うアル！……！」

「まあやだわ。これ、ちよつと説明不足なんじゃありません？だつ
て『ゴリラ』の文字が抜けてるじゃありませんか」

「あ、ほんとネ！こいつの説明文で必須ワードの『ゴリラ』がわざ
わざ言い直されてるアル！チヨオかけー紹介になつてるネ！なん
かごっさハラ立つアル……！」

「い、いや、そーじゃなくて！その下の方の文も問題だし、何より、
俺この抗議でいままともに喋らせてもらったつていう……！」

「そりゃオメエ、テメーがストーキングばっかしてる結果だろーが。
登場シーンが女のケツの追っかけて、パンチの一発や二発制裁受

「けとかねーと折り合いつかねえだろ」

やりとりを半分聞き流しながら、
新八はなんだか、よくわからない
けれど、頭か心のどちらかに
引っ掛かりを感じていた。

なんだろう……
何か、そのまま流せないものが
どこかに引っ掛かっているの
だけけど、それが何で、どこに
引っ掛かっているのかも
わからない。

モヤモヤした感じだ。

「折り合いつて何!?!どことの折り合い!?!」

「んなモン決まってるだろ。読者の皆様方だよ」

「いつもの視聴者の皆様方もはいつてるネ!」

「パンチ二発なんかじゃ全然足りないわ。もっとこう、血の出るようなことじゃないと」

「いや、血の出るようなことって、限られちゃうでしょオオ!?!じゅーぶん鼻から血たれてるじゃないすかアアア!?!?」

「ただどこのモヤモヤは
いくら考えあぐねても
どうにもならなさそうな」

モヤモヤだ。

…ま、いいか、
と保留にして、

本来の業務へ復帰。

いまだ続く討論会を
ひとまずお開きにする。

「はい、ち、ちよつとみんな、とりあえず落ち着いて、これじゃ話
がすす……ぐはっ」

「さあ近藤さん。いい機会だわ。日頃の行いの報いを受けて頂きま
しょ」

「姉御！私も手伝っネ！」

「え、いや、えっ？ちよつとお！？えなにコレ！！？？」

「お、お妙殿！？お待ちください、どうか、ご自重くださいー！」

「まあ、お榊ちゃん、大丈夫よ。でもちょっと目閉じてたほうがいいかしら」

新八がその場を

取り成そうとするも、

既に手のつけられなくなった

妙の二次災害を左頬に受け、

無言で流れを見ていた榊が

近藤へ馬乗りになろうとする

妙に驚愕しあわてて止めに入る。

周囲の人々の視線が痛いなか、

もはやこのメンバーのなかでは

貴重ともいえる人材の榊と新八が

その場を収めようと尽力する。

「みなさんっ、お、落ち着いてください！お妙殿、どうかその拳を
……」

「て、てめーらしい加減にしろオオ！！どんだけ話滞らせたら気
が済むんだアア！！！」

「……はあ……」

二人の活躍により何とか騒ぎはひとまずの終息を迎え、近場にあつた茶屋で取り敢えず休息をとることに成り、神楽が団子をいくらか娘に頼んだところで、新八は溜め息をついた。

「…落ち着くまでにいくらかかったか……」

呆れと疲れで
脱力する新八であつたが、
こんなメンバーが

偶然にも揃ってしまった。

恐らく、休息という休息はないのだろうと予想してまた心のなかで息をつく。

「…あの、近藤さん、とおっしゃいましたよね…？初めまして、私、
柳と申します」

柳が相変わらずの
礼儀正しさを挨拶をする。

あまりにしつかりとした態度に
思わず瞠目する近藤ではあったが、

そこは三十路近い二十代後半の
大人の余裕、ともいうべきものが
幸いし、さしてまごつくこともなく
貫禄を醸し出す。

「お榊ちゃん、ていうのかい？いい名前だね。俺は近藤勲だ。こち
らこそ、よろしくな」

「はい、よろしくお願いします^^」

「にしても……随分しっかりとした受け答えだなあ。年はいくつな
んだい？」

「17です」

「え！？じ、じゅっしち！？」

「まあ、私よりひとつ下なだけじゃない。これからが楽しみだね^^」

「…恐れいります…」

榊を中心に話の弾む三人。

それに耳を傾けながら
出された茶に
新八が口をつけたとき、

『…おい、新八ー』

と、銀時にコソリと
声をかけられた。

「?どうしたんですか、ぎ……おわっ!？」

銀時の方へ首をひねりながら
口を開こうとした新八だったが、
それよりも早く銀時に片腕を
首に回され、グイと強引に
引き寄せられた。

「(いいか、ぱっつあん。間違っても『お互いの身の上話』とか
に話題持っていくじゃねーぞ。とにかく、ゴリラが真選組だっここ

とを絶対エ榊に知られんな」

「（え？…あ、そういや、さっきも沖田さんと会ったの避けましたよね？銀さん、一体どういうことなんですか？あのときはうまくはぐらかされちゃいましたけど……）」

「（いーから。…あとでちゃんと話してやっから、つまりことその話題避ける。…めんどくせーことになっから）」

最後の一言は一際声を潜めて
咳かれ、新八が聞きなおそう
としたその瞬間、先ほどの
娘が大皿を抱えて戻ってきた。

皿の上にはひたすらうず高く
積み重ねられた団子、その
黒蜜が小窓からの初夏の
陽射しを受け、つやりと
光沢を放っていた。

「お待たせしました。黒蜜団子四十人前になります」

「わあ、ありがとうアル！おいしそうネ」

「ええ！？ちょ、コレ、みんなで食べるにしても、少し多すぎぢやしませんか！？」

頼んだ張本人はもちろん
みなさんもご存知神楽、
であるのだが、当然榊は
まずその量の多さに驚き顔。

「なーに言ってるアル！コレ全部私が食べるネ」

「は、え、ええええ！！？」

言うまでもなく、
もう一度さらに
喫驚することとなった榎。

既に両腕使いでパクパクと
三、四本ばかりを平らげる
神楽に目を剥く榎に、妙、
近藤両者も、やや驚き、
意外といった様子だ。

「あら、お榊ちゃん、聞いてなかったの？」

「えっ？」

「アレ？……ああ、そうか。お榊ちゃんは、万事屋とは昔から付き合いがあるが、新八くんたちと会うのは、今日が初めてだったね」

「（シメたばっつあん！そのまま神楽の話へ持ってけ！）」

「（わ、わかってますよ！）」

「あ、ああそうだ。俺とはずーいぶん昔っから付き合いがあんだが、こいつらとは今日知り合ったばかりだよ。神楽だって、コイツから見りゃまだそこら辺のガキと大差ねえ、ってワケだ」

「お榊さん、ええつと…聞いたことありませんか？神楽ちゃん、

夜兔族” っていう、戦闘民族の出身なんだけど……」

「、夜兔……？か、神楽さんが……？」

“夜兔”の言葉に
ピクリと榊が反応した。

そして、特に首を傾げる様子も
驚倒する様子も伺えぬところ
から、職業柄か、いかほどか
伺い知れはせぬものの、
夜兔に関し何らかの知識を
持ち合わせているようだ。

「なるほど……その肌の色に、差してた傘、そしてその食欲……
全て、夜鬼の特徴に当てはまります……」

「アレ？なにお前、夜鬼のこと知ってんの？」

「はい、心得ております。宇宙三大傭兵民族の一つ、夜鬼族……
……透けるような白の肌と、陽を嫌うために常に持ち歩く傘が外見
上の特徴。内面的には、驚異的な食欲と、生身とは思えぬ怪力、ま
さに、人並みはずれた身体能力を有することが共通する大きな特徴
です。そして、夜鬼が……」

そこで、榊は言葉を切った。

気が利く彼女だからこそ
だったのかもしれない。

言葉尻を捉えたのは、
神楽だった。

団子を頬張る手の動きを止め、
口を開く。

「枷、言おうとしたことわかるアル。たぶん、どーして夜兔が、『最強最悪の民族』なんて呼ばれるかってことネ。ただ強いだけなら、『最悪』なんてのはつかないアル。最悪の民族っていう、謂いわれの話しよつとして、気利かせてくれたアルネ？」

「…はい……………」

同調の意を示す柳。

「夜兔が戦闘力に長けてて、最強っていわれるのは知れた話ネ。最悪って言う謂れは、夜兔が、『血が好き』だからアル。持つてる能力いいことに、昔っから夜兔、殺し合いすることどーとも思わずいるんな星潰し回って、いろんな種族壊滅させたりしたネ。それが災いして、『最強最悪』が定評になってったアル」

そう話す神楽の表情は、
いつもと変わらないながらも、
やはりどこか、ほんの少しだけ、
いつもの神楽には無い色を
帯びているように感じられた。

もちろん、

それに気付かぬ榊ではない。

そしてまた、彼女が夜兎である

ならば当然あるはずのものが

感じられないということも、

とうに感付いていた。

「…あの、もし、お気を悪くされたのなら申し訳ないのですが……
私には、とても神楽さんが夜兎だとは………」

どうやら、短絡的な考えで
言っているわけでは

ないらしい。

その言葉に神楽が
口を開こうとしたそのとき、
くぐもった電子音が響いた。

持ち主が懐をまさぐる。

「…オイ、オメー、空気読めねーのにも程があんぞ」

「KYですよ、KY」

「まあやだわ。よくそんな話の腰をボツキリ折るようなことができますね」

「しっ、仕方ないでしょオオ!? 明らかにコレは俺のせいでも何でもないじゃないすかアアア!?!?!?」

『 ったくもー………』

と口籠もりながら渋々顔に
持ち主が着信に出る。

『 ……もしもし』

『 もしもし、近藤さん？非番のときに悪いな』

電話の主は、局長 近藤勲を
公私両面で支え、真選組設立
当初からその卓越した我流剣術と
持前の頭脳で江戸の治安維持に
多大な貢献を果し、現在では
『鬼の副長』と敵味方から
恐れられ、その名を轟かせる
土方十四郎であった。

「いや、いい……どうしたんだ？」

『んや、実はよオ……いま、真選組に入隊希望ってヤローが屯所に
来てんだが……』

「お、いいじゃないか。俺は大歓迎だぞ。細かい査定はトシに……」

『や、そうじゃなくて……取り敢えず、話聞こうって部屋に通したんだが……』一番隊長の座をくれ』ってのがそいつの言い分だ。だ、……いくら話し合おうにもその一点張りなんだわ』

「な、何イ！？そりゃあ、本当かトシ！？」

団子を追加注文する神楽と

茶を啜っていた榎が

顔を見合わせる。

『ああ……それでよ、んなモン、武力行使でとつと追い払っちまえてって原田が相手したんだが、完敗。藤堂に至っては居合いで瞬殺。いまは永倉が相手してんだが、どーもそろそろ勝負が付きそうだよ』

「ほお……総悟はどーしてんだ？」

『残念ながら、そいつが来る少し前に桂捕縛から戻ってきやがった。んで、永倉の勝負がつき次第、自分が相手してやるってよ』

「総悟が腰上げたか……おい、トシ、いくらなんでも……」

『……心配いらねえとは思うが……断言はできねえ』

「……そいつの名は？」

『ヤクモ……とか言ってたぜ。それ以外はなんも』

「……つむ……」

『どこのモンだか知らねーが、気に食わねえヤローだ。』局長を出せ』とも抜かしやがる。近藤さん、非番のとき悪イが……』

「……よし、わかった。今からそっちへ向かう」

『すまねえな』

携帯を閉じる近藤。

新八が声をかける。

「どうしたんですか？近藤さん」

「いやあねえ、ちょっと、急用ができちゃって、屯所の方に戻らなきゃいけないってみたいんだよ。」
「じゃあ、…あ、お榎ちゃん、話途中で止めちゃって悪かったね」

「あっ、いえ、とんでもありませんっ」

「すまないね」

「……お妙さんっ……この近藤勲、お妙さんがいるこの場を、自らが
離れ……ぐはっ」

「とっとと行かねーかおんのらアアア!?!」

「ふうー。結構遊んだアル」

「ですなっ」

時刻は三時過ぎ。

近藤が足早に
タクシーを拾って帰り、

『まあ、バーゲンダッシュ買ったの忘れてたわ！急いで冷やさなき
や！』

と妙も慌てて帰っていったことで
ようやく本来のパーティに戻り、
再び江戸の町に繰り出して
早二時間弱。

あらかた江戸の中心部は
巡り終わり、もとより榊が
田舎者の類でもないため、
殆ど榊を神楽がひっぱる形で
雑貨屋呉服屋ゲーセン等々
遊び歩き、それに男性陣が
くつついていくという

フォーメーションであった。

「銀さん……もうムリです……足が棒です……」

「ぼつはぼつでも木偶の坊だ……明日がこえーよ、こりゃ」

はしゃぐ二人を前に
足を引きずる二人。

人一倍に気兼ねのきく榊が
当然二人を気遣わない訳もなく
何度も繰り返し声をかけてきた
のだが、そこは銀時が強引に

押し切り、神楽もそれに助勢する形で押し通して、とりあえずここにいる間は全てを忘れて楽しめと言い聞かせた。

それが功を奏したのか、序盤は幾度か声をかけてはいいからのやりとりが繰り返されたが、後半になると神楽にひっぱられる形で、まるで、巷の女子高生の様にキヤツキヤとはしゃいでいた。

榊は無論、こつという遊びらしい遊びをできる自分と同世代の遊び相手を得た神楽にしても、それは同様だった。

「榊！次はあの小物屋へ寄るアル！」

「ちよ、まだアイス食べきれてませんっ……」

はしゃぐ榊を見て、
銀時は密かに思った。

大体年頃の娘が、
町を案内してやるというのに
わざわざただ歩いて回るだけの
コースなど希望するだろうか。

有名な観光スポットなど、
江戸にはごまんとある。
その一つや二つに興味の
惹かれるものがあつて
当然だろう。

なのに何故それらを
指名しなかったのか。
彼女の心中を考えても、
想像に難くない。

自分一人の希望で
銀時らを連れまわす訳には
いかない、そう判断したと
考えるのが適切だろう。

「(やれやれ……相変わらず、思慮深いこつて)」

神楽がやや強引だった、
ということもあるが、
神楽が相手なら特別
遠慮する必要もないし、
銀時に直接頼まなくても済む。

そんな仔細しさいも

あつてか、今はすっかり
時間も経ってこの状況だ。

「…銀さん、どうします？僕らも少し休憩にしませんか？」

新八がすぐその
喫茶店を指差して言う。

「…そうさな……ちと休むか」

カラン、と
入店を告げる音が響く。

店内は既に昼も
過ぎた時分であるためか、
客の入りはそうそう
見受けられず、空席が
ちらほらと目立つ。

「よっこらせっと……」

「はあ…足パンパンですよ……よくあんなに歩けますよね……」

「ああいうことになつと女はいくらでも精力的に動きまわんだよ。日頃仕事左手でパパツとテキトーに片付けてる女なんかは特にそうだ」

「銀さん、何かトラウマでもあるんですか…… それに、そんな言い方は左利きの人に非難浴びますよー」

注文を伺いに来た
ウェイトレスに
チヨコレートパフェと
葛餅を頼む。

『すいやせくん。トマトスパゲッティとオムライス追加おねがい
』

ふう、と出された茶を啜って
一息つこうとしたとき、
どこからか間の抜けた、
突拍子な声が耳に触れた。

声だけで推断するならば
二十代前後。
飄々とした声音だ。

「え、ちよ……スパゲッティにオムライスって、追加注文するメニューじゃありませんよね……？」

声のした方を窺うと、

そこには殊勝にも据え置き
のナプキンを胸に掛けた青年が
四人掛け程度のテーブル席に
一人陣取り、フォークと
ナイフを両手に至極満悦
といった様子で特大サイズの
ハンバーグを頬張っていた。

その青年というのは、

遠目ながらよくよく見れば、

榊よりは上、しかし

上といってもそれほど

差はない二十代前半程度で

あろうと思われる容貌である。

尋常ならざるのはその卓上で、
空となつた食器や彩り豊かに
盛られた料理の品々、そして
今現在頬張っているデミグラス
ハンバーグ等々、とても彼一人
が手に負えるはずのない量が
所狭しと並べられていたのだ。

「お待たせいたしました……」

「お、ありがとう、あ、ねえねえ、この宇治金時と、バニラアイス
フルーツ添えつても、追加お願い」

さながら横綱相撲取りの重鎮的
光景ではあるが、何せそれを
平らげ呈するのがうら若き
青年であるのだから、何とも
妙な、不釣り合い光景である。

もつとも、彼ら二人は
日常的にこれに近い環境下
おかれてはいるのだが。

「あの人、すごい人ですね……まるで神楽ちゃんですよ……」

「神楽みてえなのに生きてるうちにもう一人お逢いするたあ思いも
しなかったぜ……アレ人間なのか？」

手をつけていたはずの
ハンバーグをいつの間にか
食べきり、ウエイトレスの
運んできた次の品に
早速手をつける青年を
茫然と見遣る二人。

まるで神楽のようだ
というのは、もちろんこの
驚異的な食欲の点でもそうだが、
ただそれだけではない。

彼の一際目を惹く、
その美麗な、淡い
撫子色の頭髪である。

神楽の珊瑚朱の髪、

柳の浅葱の髪も

なかなか人々の目を

惹くものではあるが、

この青年の髪も

それに引けをとらない。

またそれは、青年のまるで

女性のような色白の肌とうまく

フィットし、見目よく互いに

それを引き立てていた。

「お待たせいたしました。チョコレートパフェと葛餅になります」

「あ、ありがとうございます」

「お、きたきた」

出された茶を手に二人して
青年に見入っていると、
注文の品が運ばれてきた。

二人が向かいあって座って
いるのは店のロゴが入った
ガラス際のテーブル席。

ウェイトレスが盆を前に抱え
会釈しようとしたとき、銀時が
背を向ける形で座っていた
後ろの座席から声かけられた。

「すみません。こちらにも一つ、その葛餅を頂けますか」

「あ、はい、かしこまりました」

それはどこかで、
聞き覚えのある声。

ある人物曰く、
いかにもクソ真面目そーな声。

「……………アレ？」

「……………おい、新八。いま俺の後ろに、何が見える」

「……黒毛と白い半球です。白い方は人間離れした大きさです」

黒毛に、白い半球、
そしてこの声。

しかし、お隣の座席は
気付かないらしく、
話を始める。

「……という訳だ、エリザベス。そういうことで、明日の総会は頼んだぞ。すまぬな」

『いいですよ。気にしないでください。
でも桂さん、気になることって何ですか？』

「いや、ちよつとな……」

客の入りは少なくもやはり
店内はあの青年のおかげか
そこそこに賑やかで、特に
片方は筆談であるために
一体何を話しているのか
こちらからは伺い知れない。

だが銀時はそんなことを
気にするつもりもないらしく、
身体をひねってこちら側に背を
向ける形で座っていた黒毛の
頭にいきなり勢いのついた

平手打ちをくらわせた。

ぐはっ、という声とともに大きく頭を屈める相手。

そして上半身を起こすと

そのままの流れで

身体を大きくこちらにひねり、

殴った張本人へ猛抗議する。

「貴様何をするかッ！！そこへ直れ！たたっ斬ってくれる！！！」

「うっせーよ。てめーこそそこに直ってここに平然と登場してる理由を15文字以内で今すぐ述べやがれコノヤロー。指名手配犯が何こんな公共の場で地球外生命物体とのんきに茶なんてしてやがんだ」

「のんきに茶などしておらん。エリザベスに明日の総会の代役を頼んでいたのだ」

「何もこんなところでこんな時間帯にやんなくてもいいーだろーが。時

と場所と場合ってモンを考える。忘れた頃にもついついペンでてきせがって」

早速いがみ合う二人。

しかし、何かに気付いた面持ちで桂が訊ねる。

「銀時、お榊はどうした？」

「んあ？榊なら神楽とそこの雑貨屋だかにいんぜ。ほら、その店こつからよーく見えらマ」

「…貴様、もしやお枷をそこから中連れ回しているのか」

桂の眼光が鋭くなる。

パフェを一口頬張り、
そ知らぬ顔でスプーンを片手に
ひらりと言葉を返す。

「おいおい、人聞きの悪いこと言っつんじゃねーよ。まるで俺が強要
したみてえな聞こえじゃねーか」

「お榊の性格を利用して貴様お得意のノリで流れに巻き込むなど容易いことだろう。そういうのも強要と言っんだ」

まるで娘のことを心配する
過保護な父親状態である。

榊が江戸の町を出歩くのが
心底好ましくないようだ。

口調や語気から
ありありと感じられる。

「…だ、大丈夫ですよ桂さんっ。お榊さん、お江戸巡りしたかった

のに遠慮されてて、それを銀さんが気をきかせて連れ出したんですよ。それで、今は神楽ちゃんと二人であちこち巡ってるのに、僕らがついて行ってたんです」

「新八くん……銀時からきいていないのか？」

「？」

要項を述べた新八に桂が問う。

何のことかわからず戸惑う新八。

「まだこいつらには言ってねーよ。榊の過去もまだ知らねー」

「…別に、お榊の全てをこの子たちが知る必要はないが……関係をもつつもりなら、必要最低限のことは、伝えておくべきなのではないか？」

桂の真剣な言葉に、
銀時が暫し真顔をみせ、
そしてフツと瞳を伏せて
微笑した。

「…ま、様子みて言つつもりだったんだけどよ。あいつがいつと、
言っつに言えねーってかな……」

「…俺もそこまで過保護のようになる気はないが、…真選組のことはもとより、少し気になることがあってな……………」

桂の表情が曇りをみせる。

「…んだよ、いかにもまずそーなツラしやがってツラ」

「ツラじゃない、桂だ。そのツラはいらないだろう。口癖のよつに言っな」

「るせー。いいからそのツラの説明しろツラ」

「…貴様、そんなに御仏の顔を拝みたいか」

「御仏のツラもそのペンギンオバケのツラも御免だ。さっきからためーの後ろでチラチラ視界に入りやがんだよ」

銀時が桂の肩越しに

向かいの座席を覗き込む。

葛餅を手にしたエリザベスが
それをじっと見返し、

…堪えられずに銀時がふいと
視線を切って、咳払いをして
冷や汗を拭いながら
席を座り直し話を戻す。

「ん”おほんっ……………んで、何が気になんだよ。榊に関係あんのか？」

「…まだ詳しくは俺も知らんがな。……………近頃、…“白夜叉”のことについて、嗅ぎ回っている輩がいるらしいと耳にしてな」

銀時のパフエを頬張る
手の動きがピタリと止まる。

それを一瞥して、
茶を啜りながら
桂は話を続ける。

「まだその輩の目的も、そやつが個人で動いているのか、徒党の端くれなのか、…細かいことは何もわからん状況だ。だが…：“白夜叉”が貴様であるとそやつが掴むのも、時間の問題なのではないか？」

黙った銀時を腕組みをして
揺るぎのない真つすくな瞳で
横目に見遣る桂。

少しばかりだったパフェの
残りを、いつもとは少し違って
一息に掻き込んで、ふう、と
息を吐き口元を拭いながら言う。

「…俺のことを、ねえ……………随分とまあ、俺も人気者じゃねーか」

「のんきなことなど言っておられん。もしかしたら、既にそやつは貴様が白夜叉であると掴んでおるのかもしれんのだぞ。そやつの目的がわからん限り、こちらも気は抜けん。特に……………お榊がいる、いまの状況ではな」

「んなこと言われてもよオ……………んじゃ、どーすりゃいいってんだ？ ツラも名前も、男か女かさえわからねえ状態で、ビクビク見えねえ相手に怯えてろってのか？」

「誰もそんなことは言っておらん。運よく、まだ向こうからの目立った動きがある前に情報を掴むことができた。それを貴様の耳に入れておこうと思ったまでだ」

「そりゃどーも、ご親切に。でもよオ、その、俺の熱烈なファンがいるっていう情報自体、信用できるモンなのか？」

「勝手に解釈を変えるな。まだ敵意のある者かそうでないかは不明だ。だからこそ、気を抜けんと言っているだろう。」

それに、この情報は信憑性のあるものだ。既に何人もの攘夷志士たちの間から話があがっている。私意私考様々だが、どちらにせよ、攘夷志士たちの間で、白夜叉を知らぬ者はおらんからな」

一方は足を組み、

一方は腕を組みで、

互いに背中合わせで話す。

葛餅も食べ終えてしまい、

茶を啜るしかない新八は

二杯目を湯呑みについで

また会話に耳を傾ける。

「アレ、俺ってばやっぱ人気なの？いやあく銀さんまいつちやうよ
もう」

「…貴様の口は低レベルなことしか言えんのか」

「だあーも、わあーったわあーった。…んで？どーすんの」

「…ハア……………まずは情報収集だろう。あまりにも情報が少なすぎる」

「情報収集つたって……………」

「貴様には期待しておらん。俺が動く。それに、貴様に動いてもら
っては、何かと不都合だ」

「動く気なんてねーよ。子持ちナメんなオラ」

「…お榊の予定はどうなっておるのだ？」

「さあな。俺あきいてねーぜ」

「…まあ、どちらにせよ、お前といるならば尚更心配はいらんだろ
うがな……」

「…ま、確かにな。あいつとずっと、氣イゆるんじまうぜ」

「貴様の気が引き締まっているときなどあるのか？」

「…ジラ。今日こそそのうっとうしい長髪切り刻んでやる。もしく
は取る」

「やめておけ。後悔することになるぞ。それに取れん」

「俺が大胆へアチエーンジしてやんだよ。ありがたく思え」

「……………」

……え？

感じたのは視線。

誰かに見られている感覚。

引き寄せられるように、
その方向を見る。

「……………」

そこにはただ、
雑踏が広がるばかり。

新八が視線を感じたのは、
ロゴ入りガラス越しの、
外からのものだった。

この喫茶のロゴが入った
ガラスは、そのロゴと
半透明に加工された
曇りガラス部分で
目隠しの要素を担っている。

しかし、その加工は

おおよそ下半分程度に
とどまり、そのロゴも
ガラスを埋め尽くす程には
当然無いので、結果的には
内からも外からも、
見晴らしがよいのである。

「とにかくだ。まだそやつ
の意図も何もわからん。もし
かしたら、そやつ単体の興
味本位ということもなくて
ないかもしれん。どの道、
こちら側からは行動を起こ
すことはできん。そついう
情報があると、いうこと
だけ、頭の隅にでも置いて
おけ」

「……………」

席を立ち、刀を
腰に差しながら桂が言う。

「それじゃあ、新八くん。長くなってしまっすまなかつたな」

「あ、いえ、…桂さん、これからどうなさるんですか？」

「明日は攘夷志士たち同士の集いがある。そこで俺のかわりにエリザベスに聞き込みをしてもらうつもりだ。俺は少し、野暮用があつてな」

笠を手に、代金と伝票を

銀時たち側の机に置く。

「勘定は頼んだぞ」

「お、危ねー。ボーっとしてたらちよろまかされるとこだったぜ」

「貴様のようなみっともない真似はせん」

「お上に目エつけられて逃げまわってるヤツがよく言つな」

「……………銀時」

銀時の言葉に
微笑を残した桂が、
歩を進めようとしたのを
わざわざ止めて言う。

「……近頃、幕臣や幕僚といった幕府の人間をターゲットにした殺傷事件が相次いでいるのを、知っているか？」

「殺傷事件？」

「まあ、無理もなからう。表沙汰にはされておらんからな。その殺傷事件、…裏に『あいつ』がいるというのが、もっぱらの噂だ」

「……………高杉か……………」

「!?!?」

「ああ。まだ噂だな。だが、その可能は低くはなかるう。手口も残忍なものだ。鬼兵隊の人間が犯行に関わっていると幕府も睨んでいる。…まあ、直接ヤツに関する情報は、相変わらず霧の中だな」

「……………」

「それじゃ、お榊のことは頼んだぞ。行くぞ、エリザベス」

カランとまた音が響いて、
二人は出ていった。

「……銀さん、高杉って……あの高杉晋助さんのことですよな？」

「それ以外ねーだろ」

「……………」

真正面に向かい合って

座っており、互いが

よくよく見える。

銀時の表情は、明らかに

喜怒哀楽のいずれにも

当てはまらないものだった。

「…あの、銀さん。さっき、銀さんたちが話してる最中に、誰かに見られてた感じがしたんですけど……」

ガラスの外の、
先ほどの物陰を示しながら
新八が言う。

「あ？気のせいなんじゃねーの？通行人でモンがあんだろーが」

「いや、なんていうか……アレ、…ただ単に見られてただけじゃない気がするっていうか……」

「気がするだろ。勘違いだよんなモン」

真面目に取り合わず、

左耳に指を突っ込みながら

あしらう銀時。

「でも、銀さんのことをかき回ってる人がいるって話だったじゃないですか。もしかしたら、桂さんの言う通り……………」

熾烈を極めた攘夷戦争時代に
その名を馳せた“白夜叉”が
銀時であると既にその人物が
掴んでいるのならば、
先程感じた視線の主は、
その者なのではないか
と訴える新八。

「…ま、何でもいーや。深く考えるなんて性にあわねエー。あいつ
に任せときゃいいだろ」

座席の背もたれ部分に
腕を伸ばして大きく
のびをしながら
間延びきった声で言う。

はあっ、と

のびの反動で息を吐いて、
頭に手をやりながら
立て掛けてあつた
木刀を手に取つた。

「っしょっと……そろそろ行くか。随分長居しちまつたな」

「……そうですね。神楽ちゃんたち、大丈夫でしょうか？そんなに
遠くへ行つてなければいいですけど……」

「傍^{はた}から見りゃ美人姉妹ってか？ いやいや、榊に失礼か」

冗談をかましなが
レジへ先行する銀時。

納得はいかないが、ひとまず
今は銀時にあわせる。

席を立ち、視点が
高くなって新八が気付いた。

「…アレ？そついや、さっきの人…いつの間に帰ったんだろ………」

そのルックスに似合わぬ
振る舞いでそこそこに
店内の注目を集めていた、
あの青年。

あの様子からするに、彼が
店を出るのに気付かないとは
考えにくいのだが、彼が
陣取っていたほぼ店の中央部
に位置するテーブル席には
彼の姿はなく、あとに残った
大量の空の食器等、後片付けに
追われるウエイトレスの姿しか
確認できなかった。

「なーにやってんだ新八。置いてくぞー」

「…あ、いま行きまーす」

第三部 金平党（前書き）

「あの……私が、その子の代わりになりますから、その子を離しては頂けませんか？」

第三部 金平党

梅雨の時期六月も間近、五月下旬の昼過ぎ。

今朝からの湿気を含んだ蒸し暑い陽気は、灰色がかった雨雲が東の空から広がり始めやや緩和されていた。

「さーっと……お嬢さん方はどちらまで行かれたんでしょうかねえ………」

「移動するの早いですからねえ……さっきの小物屋にいるとは到底思えませんけど……一応寄ってみますか？」

「ま、一応な。え〜と……その店か」

喫茶店内から確認できた例の小物屋へ立ち寄り、開け放された引き戸から暖簾を手でよけて中の様子を流し見る。
やはり、目立つチャイナ服も鮮やかな浅葱も見当たらない。

「やっぱりどこか行っちゃいましたね……」

「ぱっつあん、どーするよ?」もうここは女性陣だけで勝手に遊ばしときましょ』的なノリじゃダメなのかよ」

「何言ってるんですか。お榊さんを神楽ちゃん一人に任せるつもりですか?」

「神楽だつて一応男じゃねえんだから何の心配もねーだろーが。相手が男なら、そりゃあ、考えモンだけだよ」

「そういう問題じゃないでしょオオ!!なに年頃の娘の父親みたいな素振りしてんですか!お榊さんのご予定もまだわかってませんし……どの道、とりあえず落ち合つとかないですよ」

「そーいわれてもなあ……さがしようがねーだろ。連絡もとれねーしよ」

「携帯……ってお榊さん持つてるんでしょうか?あ、でももし持っても番号わかりませんよね……銀さん、知りませんか?」

「知ってたらとくに連絡とってるっつーの。ま、持ってんじやねーの?貿易カンパニーの副官殿だろ」

「あ、そういえば、潤さん……でしたっけ?辰馬さんの快援隊みたいな星間貿易業を営んでる、って言うてましたよね。お榊さんはその補佐で……」

「潤ちゃんか……そいや、名前聞くのもひっさしぶりだなあ。カンパニーなんざ立ち上げるたア、あいつもやるな」

雑談をしながらぼつぼつと歩を進める二人。

会話しながらそれとなく周りに目を向けてはみるが、彼女らしい人影はやはりどこにも見当たらない。

と、そのときだった。ドンツ、と耳を打つ一発の銃声が、突然辺りに響いた。打ち上げ花火のようなドクン、という振動が心臓に響いて苦しい。

「なっ、何だ!？」

「いいいまの、じ、銃声ですよ!」

ビクツと肩をすばめたのを顔をあげながら音のした方を見ると、この通りの前方の広い十字路になっている辺りに、枯茶やら小豆色やら青褐やらの擦り切れた袴姿の男達がいた。それぞれ既に抜刀済みであり、周囲に刃を向けている。通りにいた人々が逃げ惑って、さつきまでの賑わいとは違う喧騒が辺り一帯に広がった。

「ぎっ、銀さん！どうやら銃撃したのは真ん中にあるあの男みたいなんですけど、見てください！アイツ、小さな男の子人質にとつてますよ！」

「ああ？本当かそりゃ」

数メートル離れたここから垣間見えたのは、首元に銃口を添えられ羽交い締めにされたまだ幼い六、七歳程度と思われる小柄な少年であった。目には大粒の涙が溜まり、既に頬は濡れて顔が真っ赤になっている。

「動くな！静かにしろ！動けばこのガキのどタマが吹っ飛ぶ！」

「ごうちゃんっ！お願いです、その子は助けてください！！！！お願いします……！！！」

側には涙を流す母親らしき女性が男性二人に

『お母さん、とりあえず離れましょう！』

と肩を押さえられながら、必死に我が子の保身を訴えている。

「我々は攘夷集団『金平党』だ！今の落ちぶれた幕府に、この国の未来は任せられん！！」

リーダー格らしきその男が声を張り上げる。周囲の人々はみな一様に肩を震わせ、状況を見守るしかない。

「金平党だつてよ……ネーミングセンスのカケラもねーな、オイ」

「そんなことより、あの男の子を助けないとですよ！」

まさに『浪士』の名が相応しいような身なりの男達。

見るに、距離をとって囲むように並ぶ人々に刃を向ける数人の浪士達の刀は、いずれも管理状態の思わしくないもので、刃零れまでしているものもある。

中心にいるマシンガン突き付けている男の側には同じくマシンガンを携帯した二人の男がおり、いつでも発砲できるような形で、周囲に銃口を向けている。

人数が少なくな、人質をとられ、更に拳銃が三丁とあっては手も足も出せず身動きのできない人々。それは銀時らも同じことであった。

「…銀さん、どうしますか……」

「…チツ……おい、新八、アレ見えるか？」

「？」

そして事態は更に深刻なものであった。

「あ、アレ、もしかして……っ！」

「…たぶん、そのもしかしてだろーな」

リーダー格の男の側の一人が、片手に何かを抱えている。

形状からするに、恐らくは爆弾の類いだろうと見てとれる。あの様子からして、何かしらこちらから動きがあれば構わず爆破させる可能性だつて否定はできない。つまりは、最悪の状況だ。

「あの
」

打つ手なしと思われた、そのときだ。

若い女性の、少しの恐怖も怖じ気も帯びていない、玲瓏たる澄んだ声がどこからか響いた。何故か辺りの騒々しさに掻き消されることなく、真っ直ぐと、耳に届く声。まるで今の状況に、何の危機感も抱いていないかのような声。

この状況下でこんな声を出せる者など、そういるものではない。

「あの……私が、その子の代わりになりますから、その子を離しては頂けませんか？」

スラリとした背筋、柔らかな物腰、風に靡く鮮やかな長髪

二人は目を見張った。

「なっ、柷!？」

「おお柷さんっ!？」

少年を解放するかわりに自分が身代わりになると申し出た女性は、
榊だった。

そして彼女がいる付近には、やや心配そうな面持ちでそれを見つめる神楽の姿も発見でき、互いに存在に気付いて落ち合う。

「銀ちゃん、新ハイ！」

「神楽ちゃん！」

「ねえ、銀ちゃんっ、榊のヤツ、あのガキの身代わりになるなんて
いって自分から行ってったアル。私止めたのに、大丈夫ってきかな
かったアルヨ！あんなヤツら、榊じゃ到底無理アル！どうするアル
カ！？」

ことの経緯いきさつを話す神楽。

榊の性格を考えると彼女らしい行動ではあるが、とてもあの榊があんな危険な場面に飛び込むなど、二人とも心配で居ても立ってもいられないといった様子だ。

「ほう？貴様が代わりになると？」

「ええ。いくら何でも、そんな小さな子を人質にとるだなんて……あんまりです。私が代わりに人質になりますから、その子を離してくださいませんか？」

「だめだ。ガキ一人で十分だ。隙をみて何か事を起こすつもりであ

るづつ?」

「拳銃を持っている相手にどう隙をつくのです?それに、私は女。武具の類いもどこにも持ち合わせていません」

リーダー格の男が仲間と何か耳打ちしあう。そして、ニタリと意地の悪い笑みを浮かべながら榊の方へ向き直った。

「よし、いいだろう。貴様がこちらまで来たら、このガキを離してやる」

徐々に距離を詰める榊。

そして少年が離されると同時に男が彼女の腕を掴んでグイと一気に引き寄せ、あっという間に羽交い締めにして銃口を喉元に突き付けた。

少年が泣きじゃくりながら母親のもとへ駆ける。

「……」

「……」

片腕で拳銃を突き付けられ、もう片方の腕でがっちり両腕もろとも身体の動きを封じられた。完全に、彼女だけの力でこの場を切り抜けるのは、不可能な状態となった。

「っ、…」

「余計なマネはするなよ？死ぬのは貴様だけではないからな」

「…どっしりっしょっ。」

「我々はちよつとした時限式の爆弾を持っていてな？あの幕府の犬『真選組』がご登場したとき、この観客もろとも盛大なご挨拶を申し上げようと思っっている次第だ。さぞかし、面白いことになるだろうなあ、ククッ」

「そんなのっ……あなたたちだって無事じゃ済まないわ！」

「まあ、これをタネにヤツらを揺ることだってできる。ヤツらだつて、大事な一般市民のお前がこんなに関わると密着しては、手も足も出んだらうからな」

不必要なまでに榊と密着し、

『それに』

と男は囁くように続ける。

「なかなかイイカラダつきしてんじゃねえか……ツラも上等、こんな上玉、みすみす殺しまうなんざ、勿体ねえからな」

「っ！」

先程彼らがニヤついたのは、これだった。

「っあんのウスらハゲ野郎！最っ低ーアルー！！枷から離れるアルヨ
ッ！！！！」

彼らの言動に固唾を飲んで事を見守っていた神楽が遂にキレ、閉じていた紫陽花色の傘の先を男へと突き付けて、声を荒げた。

「ああ？何だガキ！いま『ハゲ』って言ったろ！『ハゲ』って！！
いまの自分の状況わかって言ってるのかア！？」

「ハゲにハゲって言って何が悪いアル！ちゃんと『ウスら』付けたヨ！」

「ハゲハゲ言うなアアアア！！世の中なあ、好きでハゲてるヤツなんていねーんだよ！！俺だって好きでハゲてんじゃねーんだよ！！育毛剤どれ使っても全然効かねーんだよ！！！！」

「マジかよ。そりゃもう毛根からアウトだな。ナヤミムヨウヘレッツコールだぜ」

「バカにしてるだろお前。自分がフサフサだからってバカにしてるだろ！！！！」

「銀ちゃん、アイツ毛の根も性根もアウトアルヨ」

「この騒動も毛が無い逆恨みですかね」

「だな」

「るせーよ！オメーらどこまでバカにすんだっ！！！！」

「「足の裏まで」」

「…何で足の裏なんですか」

「や、何となく」

「流れアルヨ」

「何が流れだっ！貴様ら、もう許さん！！俺をここまで愚弄したこ
と、後悔するがいい！！！！」

男の指図で、抜刀した浪士たちの数人が流れ込むように銀時たちを取り囲んだ。

互いに背中合わせになり、三つ巴の逆の様になってそれぞれ身構える。

「……たく、気に入わねーとすぐコレですか。随分ご立派な志士様なこつて」

「黙れっ……！木刀なんてハンパな得物なんぞぶら下げおって、侍の風上にもおけんようなヤツにそんなことを吐かれる筋合いなどないわ……！」

男が息を荒げながら声を張り上げ、枷に突き付けていた銃口を、怒りに任せて銀時の方へと向けた。

「言っただろう？我々は死ぬることなど恐れてはおらん。まずは貴様らから殺してやる！」

「白夜叉様っ！！」

男が勝ち誇るようにニヤリと口角をつりあげ、引き金に人差し指を添えて銀時へと標準を合わせた直後、依然男の片腕に抱えられていた榊が咄嗟に叫んだ。

“ 白夜叉 ”

攘夷を語る者なら知らぬはずはない、その名を。

「 …… ああん？ てめえ …… いま、 なんつった？ 」

「 白夜叉 …… ？ 」

「 し、 白夜叉 って …… あの 白夜叉 か！ ？ 」

口々に浪士たちが呟き、白夜叉と呼ばれた銀髪の侍への注目が集まる。口走った榊は目を見開き、しまったという気持ちがありありと見てとれた。

「貴様……あの、白夜叉か？」

「……………」

「返答なしか……その銀髪にその様子からすると……間違いねえみてえだな」

無言の銀時をみて、男は口角を吊り上げた。

クックツ、と喉の奥で笑う。

「…おめえが白夜又とはなア！？たあまげたモンだぜ！噂にや聞いたが、まさか本当に生きてるたあな！！！」

「お目にかかんのは初めてだぜ、何せ戦の後すぐお姿が見えなくなつちまつたつて話だ」

「まさかこんなところでなア…？あの伝説といわれた侍にお会いするたア……」

明らかに蔑んだ目付きや口振りをする浪士達。
新八が彼らの様子を疑問に思った。

「ちよっ………どういうことですか？あんなたち、攘夷浪士なんですよ？だったら、白夜又って攘夷の同志だったんじゃないんですか？」

それをきいた浪士達は一層嘲笑を深めた。そして更に乱暴な口振りで言う。

「以前はそうだったさ！牙は抜け落ち、仲間も見捨てて半端に戦から逃げ出した、廃れちまう前の白夜叉様はなア！」

「だが今は違う。そんな、腑抜けた野郎なんざに興味はねえ！！！」

「女ガキ連れてる野郎なんか、白夜叉でもなんでもねえーさ！！！」

口汚く野次を飛ばす。酷い言い様だ。

新八は先程の桂の言葉を思い出していた。

『私意私考様々だが、どちらにせよ、攘夷志士たちの間で、白夜叉を知らぬ者はおらんからな』

桂が言っていたのは、こういう意味だったのか。

榊のように白夜叉を崇め敬愛する者もあれば、半端に戦から逃げ出して行方をくらました白夜叉は臆病者、愚か者だ、として快く思わない者もいる。そういう意味での言い回しだったのだ。

第四部 綺麗な薔薇にはトゲがある？（前書き）

「ええ。私、幼い頃に両親を亡くして。身寄りもありませんでしたから」

第四部 綺麗な薔薇にはトゲがある？

「随分なこと言ってくれんじゃねーか。こんな白昼の町中で堂々と物騒なモンぶらつかせやがって、人が連れてる丸腰のガキ盾に取るよーな卑怯モンが、よくそんな口叩けるな」

「貴様ツ！まだこの状況をわかっておらんようだな！この娘の生き死には、我々の手にかかっておるのだぞ！！」

「バカか。ついさっきテメーが『殺しません』って言ったようなモンだろーが、エロオヤジ。それに、やれるもんならやってみなさいよオ？てめーらにゃ、そいつに傷一つ付けることだってできやしねーよ」

「っフン！貴様はどうだ？自分らに向けられた刃を忘れたか？」

お前達を殺すことは雑作もないといった様子でいう男の言葉にあわ

せ、銀時達を取り囲む浪士達が白刃を閃かせて切っ先を向け直す。

チラと枷を見遣ると、その眼には映るはずの恐怖はなく、かわりにあの身代わりになると申し出たときの、恐怖なんか感じさせない強かな瞳が銀時へと向けられていた。

あの眼には、見覚えがあった。

「…ヅラみてーなこと言うつもりはねえが……江戸の明日を案じ同じ志を抱かんとするのが攘夷志士なんだろ？それを名乗るモンがよオ……天人が持ち込んだ技術で作られた武器の武力行使で女に現つ又かそうなんざ、…都合よすぎんじゃねーか？」

「ッ」

「テメーらは攘夷志士なんてモンじゃねえ……ただの狼藉モンだ」

真つ直ぐ、反らすことなく見据えられた紅い瞳に言葉も返せず、ただたじろぎどもる男。

「ええい！殺れ！！」

「神楽！新八イ！」

銀時らを取り囲んでいた浪士達が振りかざした白刃は、振り下ろされる前に神楽、神楽から傘を受け取った新八たちによって制された。

それに驚いた男が更に続けて幾らかの抜刀した浪士達にも命令を出したが、何せ刀の手入れも十分にしない身なりの崩れた不逞浪士たちである。分は神楽たちにあつた。

銀時かというと、その浪士共はろくろく相手にせず適当に受け流し、手にした木刀を構えるのではなく、なんと丁度槍投げの要領で枷を抱え込む浪士の頬目がけ、勢いよく投げ込んだ。

「ふぬがつ」

「それによオ、」

絶妙な投てきで放たれた木刀は綺麗な放射線を描き、そのまま吸い

寄せられるように男の右頬へ。

尖った木刀の先が直撃し、哀れなことに目に涙を浮かべた男は、そのあまりの痛さに頬を抑えるため、思わず腕を解いてしまった。

その瞬間を逃さず、抱え込まれていた少女は反動で宙を舞う木刀を、男の周りにいた数人の浪士達が狙いを定める前に、掴み取った。

「「そいつ」に目をつけちまったア、テメーらも運が悪いわ」

全ては、瞬く間だった。

「……………」

他、十数名余居たはずの攘夷浪士たちは、各々身体のどこかしらに打撲傷を負い、羽交い締めにしていたはずの娘一人残して、見るもあつけなく地に伏していた。

彼らはもちろん、状況を見守っていたはずの黒山の人だかりも、浪士共を相手していた神楽、新八も、ただ一人銀時を除いてその場に居合わせた誰もが、たった今起こった出来事を即座に飲み込むことはできず、目を瞬しばたいた。

横たわる浪士共の中心にただ一人、すつと佇む『洞爺湖』の木刀を手にした榊の姿はまるで別人のようで、今までの印象からは全くもってかけ離れたものであった。

先程までとは違う騒つきが群衆の間で広がるなか、恐らくこの場で最も驚いているであろう神楽、新八は、最早言葉も無いといった様子だ。

「残念ながら、コイツは人質なんてモンにできるほど甘くはねーんだよ。致命的な人選ミスだな。攘夷浪士さん方よオ」

銀時の余裕な言葉にも低い呻きを返すしかできない浪士たち。

数メートル程離れていた榊のもとへ歩み寄り、銀時が木刀を手にした彼女へ声をかける。

「お疲れさん、榊。さすがだな」

しかし、木刀を手に俯いたままの榊は、礼よりも何よりもまず、両手を前で揃えて深々と頭を下げた。

「申し訳ありませんでしたっ！私がすっかり余計なことを言ってしまったばかりに、銀さんに不愉快な思いをさせてしまい、その上、神楽ちゃんや新八さんまでも巻き込んでお手を煩わせてしまっ
て……本当に、すみません！」

突然の謝罪。

予想だにしない展開に三人とも驚く、が、驚きの度合いには遙かに差があった。取り纏めるように新八が早口気味でいう。

「ちよっ、ちよっと待って！お榊さん、取り敢えず顔あげてくださいー！」

「何か知らねーけど頭ん中こんがらがってきたアル……」

頭を下げる枷をどうにか宥め、錯綜する頭の中を整理する。

ひとまずは、先程一体何が起こったのか、だ。目前の浪士に気をとられていたためなおさら状況がよくわからないが、一ついえるのはいま木刀を手にしているのは銀時ではなく、枷であるということだ。そして浪士がこちらへ斬りかかってきたとき、銀時はろくに彼らと刀を交えてはいなかった。

単純に考えれば一言で説明のつくこの状況だが、いやいや、と頭の中がすっかりその考えに戸惑いを示してしまう。

「んだ？どーしたんだよ、ぱっつあん」

「どーしたんだよじゃありませんよ！驚いて当然でしょうが！……てか驚かない訳ないでしょうがッッ！……！」

「枷ってこんな強いヤツだったアルカ？」

「?……アレ、いつてなかったっけ」

「何も聞いてません」

「榊、オメーも言っていない?」

「は、はい……そういえば、お教えしていなかったかと……」

「あらー。そんじゃ驚いちゃうわな」

「あらーじゃありませんよ。…それで、これは本当にお榊さんがお一人で……?」

新八が付近を見回しながら改めて尋ねる。

もし、榊が刀剣の類いを扱えたとして、だ。それでもこの数の抜刀した人間、加えて三人は拳銃を所持していたというのに、まるで時

代劇の殺陣のように速やかにそれらを片付けてしまふなど、果たして可能なのだろうか？銀時との共闘ならまだしも、彼女たった一人と木刀一本である。相当の技量と経験、加えて、場慣れしている必要があるだろう。さらに着目すべきは、彼女は彼らが再び動くことがないようにするのに、必要最低限の手数でピンポイントに打撃を与えている点だ。おまけに銃の類を全て使い物にならなくまでしている。ただ傍観している間、彼女の動きには、何一つ無駄がなかった。

「……………ええ、」

目線を下げて言い淀むような素振りを見せた榊だったが、それも一瞬のことで、問いには新八の目をみて答えた。

「お教えしていなかったので、驚かれましたよね^^；すみません」

「謝ることなんてないアルっ！それより、それならそうと早く言うてくれればよかったアルヨ！ならあの時私、あんな止めなかったネ」

「あの時はすごく焦っていたので……勝手なことを、とは思ったのですが、」

「いや、あんな状況で自分が代わりに人質になるだなんてなかなかいえませんよ！さすがお枷さんです」

とそこへ、どこからともなく、聞き覚えのあるサイレンが響いてきた。

この電子音。遅れ馳せながらとも言い難いご登場だ。

「「げっ！！」」

「（オイ、ぱつつあぁん！！コイツらのこと忘れちゃったよオ
イイイイツ！！！！！）」

「（そのまま話進んでたから僕もすっかり忘れちゃってましたよ！
どーすんですか銀さん！バツチシお枷さんの視界に入っちゃってま
すよ！もうはぐらかせませんよ、もう誤魔化せませんよ！ここで退
散したら明らかにおかしすぎですよ！！）」

「（おい、ヤベーよ、こりやまじでヤベ〜よ。銀さんがサラッサラ
のストリートヘアになっちまうくれーヤベー〜よ。どーすんだコ
レっ！？）」

乱雑に乗り付けられた車から紺地の分厚い上着を片手で肩に引っ掛け、白の袖を折り返して七分丈程度にした啞え煙草の土方が降りてきた。次いで後続から数人の隊士たちも続々姿を見せる。

「何だア？もう事は済んだみてーだな」

「何だとは何だアル！オメーら来るの遅すぎヨ！武装警察が聞いて呆れるネ」

「あ？万事屋んとこの娘じゃねーか。てこたア、ヤツもいんのか」

相変わらずの鋭い双眸で抗議するチャイナ服を見ると、既に横たわる浪士たちに落としていた視線を、この場にいるであろう男を探して辺りへ向けた。

「…オイ」

「…あ、アレー？土方くん、奇遇だねえ」

「やっぱりいやがったか。で？これあテメーがやったのか」

「違うネ。やったのはほとんど榊アル。人質のガキ助けたのも榊ネ」

「榊？誰だそりゃ」

「(ばっ、バカ!! 榊に話ふんな、バ神楽!!)」

神楽の言葉に冷や汗をたれておろおろと慌てる二人。

しかし、当の本人は全くの自然な様子で土方の前に進み出た。

「私です。ご紹介頂きました通り、榊と申します。真選組の方ですよね? お勤め、ご苦労様です」

「「……………アレ?」」

やきもきする二人を余所に、礼儀正しい所作で如才なく応対する榊隊士たちに命令を出した土方が感心したような口調で話す。

「ほお？随分と受け答えのしっかりした娘じゃねーか。初めて見る顔だな」

「はい、私、江戸の人間じゃないんです。普段はよそで商いをしてる者で」

「商い？見掛けのワリに小難しいことしてんな。てめえ、歳はいくつなんだ？」

「17になります」

「こりゃたまげたモンだな。まだそんな歳か」

「ええ。まだまだ至らぬ若輩者で……」

「至らぬ若輩者ねえ……こいつらは、テメーがやったのか？」

柳が手にした木刀を顎でさして言う。

「あ、ええ……まあ………」

「ほとんどテーマがやった、それに人質まで助けたって聞いたが、その手のモンが扱えんのか？」

「……す、少し、道場で教えをうけていた時期がありまして……お遊
び程度です」

あくまで一時期触れた道場剣術程度の力量と話す榊。

しかし、この有り様と榊の木刀の柄に視線を遣り、銀時の腰を一瞥するからに、ただ道場剣術に触れただけの力量ではないと、土方は即座に判断した。

「万事屋とはどういう関係なんだ？」

「えっと……銀さんとは、昔から懇意にさせて頂いてます。私が幼い頃、ある事情で銀さんが拾ってくださって、それからずっと面倒をみて頂きました。今日、久しぶりに銀さんのもとへお訪ねして、神楽ちゃんや新八さんとは、初めてお会いしたんです」

「拾われた？」

「ええ。私、幼い頃に両親を亡くして。身寄りもありませんでしたから」

「…すまねえ。きいちゃマズかったか？」

「いえそんな^^もうとっくに昔のことです」

気遣った土方に笑顔で応える柳。

雑談に興じる彼らを遠目に見ながら新八が銀時へ尋ねる。

「銀さん、どういふことですか？フツーに会話してますよ。勞いの
言葉までかけてましたけど」

「っかしーな……俺の思い過ごしか……？」

「事情はわかりませんが……無理してる感じは見受けられませんし、
僕らに対する態度と変わりありませんよ。何にも変に思いませんし」

首を傾げる銀時。

新しい煙草に火を灯ける土方に、今度は榊が問う。

「あの、土方さん…とおっしやいましたっけ？」

「ん？ああ。俺ア真選組副長、土方十四郎だ」

「真選組副長…？あ、あなたが『鬼の副長』の！？」

「ん、知ってんのか？」

「ええ…二枚目な方の上に、大変武芸に秀でておられる方だとか。お噂を耳にしたことがあります^^」

「う、噂って…んなモン、人の噂も七十五日っていうだろ」

「いえいえそんな 二枚目というのは、まったくお噂通りでした」
「」

「待てよ…俺アそういうのは苦手なんだ。それに、腕はともかく、ツラならいいのがうちにいんぜ」

「真選組に…ですか？」

「ああ。よけーなことばっかしやがるドSの横着モンだ。『沖田』
つてんだがな」

「腹黒でござさ腹立つヤツアル。『ムカつく』どころの騒ぎじゃないアルヨ（、皿、メ）」

「沖田…？あ、ちょっと待ってください…その方って、沖田総悟さんのことですか？」

「よくわかったな。江戸のモンでもねーのに、どうして知ってたんだ？」

「直接の面識はありませんよ^^お名前だけです」

そこへ、作業の終わった隊士が報告に来た。

「副長、攘夷浪士 計三十四名、捕縛完了しました」

「おう、ご苦労。各自連行してけ。俺アちと野暮用がある」

隊士達全員を先に返し、土方が離れていた銀時へ声をかける。

「おい、万事屋。話がある。ちと付き合え」

「…え、ちよつとなに？俺そついう趣味ないんだけど」

「何考えてんだテーマはアアア！！！！いーから来い！俺だつてテーマなんか、こつちから願ひ下げだつ」

土方に急かされ、いかにも気だるそつに歩を向ける銀時。

新八らからやや距離をとつたところで、土方が口を開く。

「なあ、万事屋。あの枷って娘だが……」

「あら、何ちよつと。もしかして、惚れちゃった？」

「だから何でそついう話に持ってきたがんだよッ」

「視聴者の声」

「やあつかましーわアアア！！！！テメー、素直に視聴者の声なんか届ける口じゃねえだろうが！！ごくごくたまに時間余ったときにダラダラ紹介してたくれーだろ！」

「人間きが悪イぜ土方くんよオ。俺だつてもつと紹介したいんだよ？もつとこつ、『お便り紹介コーナー』みたいなの大々的にやっちゃってさア。でもほら、一応尺に収めなきゃなんねえつてのが古今東西今も昔も変わらない決まり事でだな、」

「テメー、ただ単に本編の方やんのがめんどくせーだけなんじゃねえのか、ああ？てきとーにぐだぐだ便り読み上げてって、時間潰そうってのが本当の狙いなんだろ」

「なんだよお前、もしかして、一度も便りとか読み上げたことねーから、僻んでんのか？ぶツツ」

「…テメエのその物分かりの悪イかってー頭、今すぐかち割ってやらア！！覚悟しやがれっ！！！！」

「図星か？あ図星なのか？だからんなに熱くなっちゃってんのか？土方くんたら、かーわーういーういー（ハート）」

「上等だゴルアアア！！！！刀抜けエエエ！！！！！！」

「ヤダー、こわーい。誰かあー、この子ったらちよー“ヤル”気なんですけどおー」

「ってんめ、まあっ たんな言い方しやがってコノヤロ！！！！」

完全に頭に血ののぼった土方と、のらりくらりとそれを受け流してみせる銀時のやりとりを呆然と眺めながら、榊が半ば呟くように言った。

「…あの、みなさんは、真選組の土方さんとも、親交がおりなのですか…？」

「いや、何ていうか、土方さんだけに限らず、真選組のみなさんと親交がおりなんですけどね……腐れ縁ってヤツですよ」

「な、なるほど……みなさんは、お顔が広いのですね……」

「いや、僕らがっていうより、銀さんが広いんですよ……何か、僕らの全然知らないような人と知り合いだったりもしますし。ほら、お榊さんだってそうですよ」

「初め来たときはビックリしたアル。またアイツのたぶらかした女の一人かと思つたアル」

「ちよつ、それお榊さんは真に受けちゃうでしょー？それに、お榊さんみたいな美人な人、銀さんなんか相手にしないよ」

「それもそうネ。アイツにそんな色恋沙汰あつてたまるかアル」

「……………^^」

彼らが穏やかにトークをするなか、向こうでは相変わらず流血沙汰一歩手前の騒ぎが繰り広げられている。

「オラどうした！刀抜け万事屋アア！！」

「や、だから抜こうにも俺持ってねえっていつてんだろーが」

「侍を名乗るモンが刀も帯びてねえたア、ナメてんのかテメエ！！」

「ちげーよバカ。いいからちったあその開ききった瞳孔閉じろバカ」

榊が手にしていた木刀に視線を落とす。柄に『洞爺湖』の文字が入った木刀。

侍が帯びる佩刀としては、あまりにお粗末なものである。

「あの…この木刀って……」

「ああ、それですか？銀さんの佩刀ですよ。変わってますよね」

「通販で買ったモンネ。なまぐらのあいつにはうってつけヨ」

「つつ、通販!？」

「はい。税込み11,760円で電話一本で手に入りますよ。何ていうか……侍の魂ともいえる佩刀が通販物だなんて、もう何か言う気も失せますよ……銀さんらしいっていうのか、何ていうのか……」

もう一度手元の木刀に視線を落とし、まるで手触りを確かめるよう

に、刀身を軽く指先で撫ぜる。
真剣とは違い、鋭い刃も鏝も無い。あの独特の重厚感ある重みも無い。

こんな代物を佩刀にしている侍なんぞ、江戸中探してもちゃんばらをする子供か銀時くらいだろう。とはいえ、昨今の廢刀令のご時世ともなれば、ちゃんばらをする子供でさえ、持ち合わせていないかもしれない。

「……………」

路上でいい大人二人が繰り広げていた刃傷沙汰にんじょうは、ようやく幕引きとなったようだ。

「チツ、誰だア？タイミングのワリー」

響いた無機質な音に舌打ちをしながら、誰からかも見ずにどすの利いた声色で着信にでる土方。

ふう、と銀時が息をつく。

「まったく、血の気が多いヤローだ」

「あ、銀さん、」

「おー、たんきゅ

柳が両手を差し出し、木刀を受け取ってスツ、と腰に差す銀時。

まるで身支度をする武士の側に侍る妻のようなシチュエーション、
と思ったのは、新八だけではないだろう。

「さーてっと……なあ、あいつが電話終わってまた騒ぎ出しちまう
前に、一先ず退散といかねーか

第五部 理由（前書き）

「船が少々機嫌悪かったもんで。お待たせしてすいません」

第五部 理由

喫茶店を出てから空一面に広がっていた近い梅雨の時期を感じさせる暗い雨雲は、雨を降らせることもなくいつの間にかやら影を潜めて、かわりに昼間の爛々と輝いていた太陽が、西の寄りへと徐々に傾き始めていた。

空には薄く広い巻層雲が広がっていて、向こう数日、天气が優れないことを思わせる。

「ねえーちよつと新八くん。足がセメントなんですけどー。もう骨肉でできてる感じしないんですけどー。リーくんの重りつけてる気分なんですけどー」

「リーさんあんなの付けてても全然フツーにしてるじゃないですか。銀さんもそのうち慣れますよ、きつと」

「まじでか。裏蓮華できる？」

ぼつぼつと重い足を引きずってたどり着いたのは、川原沿いの傾斜のある原っぱ。

そこに身を投げ出して寝転ぶ銀時、その右に新八、左には神楽、神楽の左には寝転ばず腰を下ろしただけの榎が足の下で腕を組む様にして緩く体育座りの形になっていた。

空を見上げる榎。

何とも言い難い、表現のし難い複雑な瞳で何処かを見つめ、いや、何処かを見つめながらもその焦点は違ふところがあり、すっ…と柔らかかに吹き抜けた風が、彼女の頬を撫で髪を揺らして、まるでそれに身を任せるように瞳を閉じた。

そして、ハッと気付いたように声をあげた。

「あつ、あの、銀さんっ…お二人も、先程は私の身勝手な行動に巻き込んでしまって、本当にすみませんでしたっ」

「だからそりゃもういいって。あんま細けーこといちいち気にしてっとしワ増えんぞ」

「僕はお枷さんとても素敵だと思いますよ。男の子のために自分が身代わりになるうっなんて、拳銃を前に思えませんよ」

寝転んだままの銀時と、身体を起こして両腕を草原について言った新八。神楽も賛同する。

「ありがとうございます……後先考えず、つい身体が動いちゃって…」

「いやあ〜アレすごかったなあ、榊。さすがだわ」

「そうですねよお榊さん！まさかあんなに剣を扱えるなんて、ほんとビックリしましたよ」

「榊、どーしてあんなことできるアルカ？習いでもしてたネ？」

口々に感想を述べる三人。

淑やかな大和撫子の榊があの手のものを慣れた風で扱えるのを目で見初めて知った訳なのだから、二人の反応は頷けるものである。しかも、並の腕ではない。まだ確^{しか}と見れた訳ではないが、それでも彼女の腕の高さは、あのまるで造作も無いとでもいうような様子の立ち回りからするに相当のものだ。

実戦的な、銀時や真選組のそれと同じ類いのものである。

「…わかりました^^少し、話にお付き合いください」

どうして剣が達人なのか。必然に話は榊の過去についてのことになる。

膝を抱えたまま、ゆっくりと口を開き始めた。

「私、幼い頃に銀さんに拾って頂いた、と言いましたよね」

「はい」

「…私の両親は、天人に殺されたんです」

「えっ …！？」

「……………！」

カミングアウト。まさかの事実には、驚愕する二人。仰向けになっていた神楽は一気に身体を起こし、複雑な眼差しをしてやや顔を俯かせる枷をもの言えず見つめる。

まだ身の上話はしておらず、互いの過去を知っていなかったとはい

え、まさかこの枷が

礼儀正しくて、知的で、清廉で、人当たりがよくて、もの柔らかくて……
何より、同じ天人である、しかもあの夜兔族の神楽に対し、実に友好的に接していた彼女にそんな過去があつたなんて、と、新八はもちろん、殊に神楽はその衝撃が大きかつた。

夜兔族が如何なるものかを知っている素振りをみせた枷ならば、神楽が夜兔であるとわかつた瞬間から敵意や嫌悪を示しても無理はないだろうに、そんな素振りは微塵もみせなかつたところを見ると、平然を装っていたという訳ではないのだろう。

「、そんな顔なさらないでください^^もう随分昔のことです」

「…でも、」

「神楽ちゃんが夜兔族だつたのは、正直驚きました。夜兔族がどんな種族なのかも知っています。けど……神楽ちゃんが、他の夜兔と同じならば、私は神楽ちゃんに会つたとき、一目ですぐにわかつたでしょう。なのに、言われるまで気付かなかつた。…それに、私は

神楽ちゃんのこと、好きですよ^^ もちろん、新八さんも」

「…栴…」

神楽が安堵したように顔付きをゆるませる。天人としてでなく、彼女にとって神楽はもう立派な一人の友なのだろう。栴の言葉に嘘偽りはなかった。

「…ありがとアル」

「そんな^^お二人とも、気になさらないでくださいね」

『私ももう気にしていないことですから』

と柔和に彼女は微笑み、話を続ける。

「それで、あてもなく着の身着のままだった私を、偶然見かけた銀さんが拾ってくださいましたんです。それからしばらく、銀さんのもとに身を寄せている間に剣を扱えるようになったんですよ^^」

「そうだったんですか……」

銀時に拾われた、とはこういうことだったのかと、初めて聞いた榊の過去を内心不憫に思わずにはいられない二人。それと同時に、彼女の銀時に対する心服ぶりに合点のいった二人であった。

「……さて、お榊さん。そろそろ教えてくれないかしら」

終始寝そべっていた銀時がふざけ半分の口調で言いながら

『っしゅっしゅ』

と反動をつけて起き上がり、右手で頭をかきつつ言う。

「どーして今日わざわざ来てくれたの。なに、観光？それとも久しぶりに銀さんの顔みたくなった？」

何故か語ろうとしなかった彼女が訪ねてきた理由。ただ遊びにきただけなら別にいい。大歓迎だ。

だが銀時は、何か他のワケがあるのではと推測していた。もしそれを今までずっと切り出せずにいたのだとしたら、きつと手短な話ではないだろう。

「えっと……」

神楽、新八も見守るなか、どこか言いづらそうに、口ごもった様子
の榊。
やはり何か事情があるようだ。

「……実は、ご相談したいことがあって来たんです」

暫しの間を置いて、やっと話を切り出した。
その顔は晴れたものではなく、困却の色がありありと感じられる。
口調は未だ迷いとためらいを帯びたものだ。

「相談？」

「はい。…銀さんにご相談してもよいものか、とても悩んだんです
けど……他に方途もなくて……」

「何か、お悩みなんですか？」

「…それが……」

一呼吸置いて、彼女は話した。

「んー……少しややこしいところもあるんですけど、端的に言っちゃ、ガラの悪い連中に絡まれてる……というか……」

「……と、いいますと?」

「喧嘩アルカ?小競り合いアルカ?」

「殴り合いの喧嘩ではもちろんないんですけどね^^； えっと、私、潤の貿易船で彼の補佐をしてるって話しましたよね」

「はい。確か、潤さんが社長で、お柳さんは副官だつてききました」

「私たちは、主に宇宙各地の星々を相手にした大きな商売をしています。ほとんど辰馬さんの快援隊と様式は変わりません。ただ、一つ違いをいうと、辰馬さんたちは地球に来ることは稀ですが、私たちは月に一度大阪へ来て、契約商社と寄り合いをしているんです」

「寄り合い？てことは、頻繁に地球へいらしてるんですか？」

「はい。私たちが主に異星のものを、彼らは主に地球のもので取引をするんです。商人同士の社交場にもなっていて、大事な情報源でもありますね」

「…あ、もしかして今回いらしたのって…」

「当たりです^^その時期なんですよ。

で、問題はここからなんです…つまり、私たちは大阪と結びつきが強いワケです。大阪の市場とも無関係ではありませんし、当然商売ですから、商人同士で何かにつけて顧客の争奪やら名折れ工作やらとごたごたがあるのは珍しいことではないんですが、それも知らん顔はできません」

「月一で定期的にきてるんですから、まあ当然ですよ……」

「てーことは、ガラの悪い連中つてのあ……」

「……はい。大阪を拠点にしている者たちです。『龍神会』という組織で、昔から違法薬物や裏ルートなど黒い噂は絶えない組織だったんですが、それがまた近頃、徐々に動きをみせはじめています。多数の艦隊を保有する大商社で、表向きは普通のカンパニーと変わらないのですが、裏の世界では巨額の金にもいわせ、幅を利かせているといわれている奴らで」

「……え、ちょ……その人たちって本職が商人なの？ちがくない？どつちかってーと商人で副業じゃない？」

「白い粉売り付けられそうになったらどうするよ銀ちゃん。今度は運ぶ方の粉だけじゃなさそうアル」

「バ、バカいうんじゃないよ。冗談にきこえねエだろーが。つか、大阪って立地条件パーフェクトじゃね？その筋の人たちがたくさ……」

「ええエ縁起でもないこといいいわないてくださいよ。ちょっとズルなだけの商人に決まってるじゃないすか。利益追求しすぎてちょ

つと前が見えなくなっちゃったんですよ、きつと」

「サツ共は手出さないアルカ？」

「一応、いくら噂があれど表面上は普通の貿易稼業しかしていませんから、警察も手を出さに出せない状況なんです。なかなか尻尾を出さなくて、手をこまねいているらしくて……」

「なるほど……」

『龍神会』とは、彼女のいう通り、表向きは普通の貿易稼業を営み合法的な商売を展開しているが、裏では他の犯罪組織や異星と違法薬物、武器等を扱って巨額の利益を得ている、と噂の組織である。

警察機関が動かない訳はないのだが、話が“噂”に留まっております、まるで謀ったように決定的な証拠が出てこず、物的証拠や係者の証言でも得られぬ限り行動を起こすのは難しいのが実情。

取引現場の写真一枚でも撮れば話は別なのだが、大変ガードがかく、奴らに関する情報さえ乏しい状況で、警察も半ば欺かかれている有様だ。

しかし、いくら明確な証拠がつかめていないとはいえ、恐らく事実

関係は噂とさほどかわらないだろう、と常に睨みを利かせている。

「で、そのバカ共とお前ら善良な商人が、いつてエ何の関係があるワケ？」

「絡まれてる…といっても、対象は私たちだけじゃないんです。ヤツらは、違法取引などで不正に得た金を使い、大阪の市場まで牛耳ろうと企てているんです。ヤツらからすれば、市場に根を張る巨商、豪商、貿易商の類いは邪魔で仕方がないでしょう」

「…脅し、か…武力と権利を背景に、有力な商人は蹴落とそうって魂胆だな」

「でも、どうしてわざわざ表の市場にまで？そんなことしなくても、違法取引の利益に比べれば…」

「新八くお前もなつてねえなア。人間つてのはな、欲深い生き物なんだよ。稼いでも稼いでも満足しねーの。人間の9割は欲ででき

「てるからね」

「まったく、だからお前はいつまでたっても新八アル。ホント進歩しねーな、お前は。何年新八やってんだ。なんで八なんだ」

「いや、生まれてこのかた新八以外やったことありませんけど」

「人間なんて所詮強欲なんだよ。一時ブームした《ピー》だったよ？アイツ売れたのに調子こいてガンガン売り出したけども、今じや近所のスーパーで山積みで売ってるらしいからね」

「アイツも欲がでたネ。極貧からはい上がって成功した中年の星でいりゃよかったのに、ラインは増やすわ新店舗までだすわで、稼げるとき稼げごうて魂胆丸出しだったアル」

「借金返したただけで満足しときゃよかったんだよ。まったく……昔プロデュースした《ピー》の《ピー》なんてイイ娘だよホント」

「私《ピー》《キライヨ。なんかいけ好かねーアル」

「ただのひがみじゃねエか。オメ、自分が寸胴だからってそういうのはよくないと思うよ〜？」

「黙れ糖尿が。ああいうオンナに限って中身は腐ってるアル。見かけ騙しヨ。ああいうのにホイホイ騙される男が減らねーからいつまで経っても世の中は腐ってるアル」

「バカヤロ、オメ、そういうところがオメーと《ピーー》の違いなんだよ。あの子はお前みてエな暴言吐かないからね」

『んだとゴルア！！？』

と銀時の言葉に神楽が武力行使に出てしまったため、斜面をかけずり落ちていく二人を眺めながら呆れ溜め息をつく新八。

またしても壮絶な戦いの幕が切つて落とされたわけだが、そろそろ慣れてきてしまったのか、榎もさして戸惑うことなく微笑を浮かべている。

「フツーならココ僕ツツ」むんですけどね。いいですよ、今日は
お枷さんいるし」

「お会いしてはじめのうちには少し戸惑いましたけど^^；でも、
…」じいづのって、いいですよね」

呆れ顔で取っ組み合う二人を眺めていたのを、彼女がそう言った瞬間、思わず伺うようにその横顔を見つめてしまった。彼女の言葉の最後が、何だか、聞き流せないような言い方だったから。

銀時と神楽がいた分だけ二人の間が空いていたからまじまじと見つめられたのかもしれない。もし並んで座っていたなら、横目でちらっと、膝下丈のセーラー服で髪をお下げにしたAちゃんを見る学ラン姿の鼻を垂らしたBくんの具合に伺うしかなかっただろう。

ここで声をかけるほど新八も不粹ではない。同じ十代、自分よりいっしょなだけが、一体どんな経験をすればできるのだ、というような、蕭然たる表情を浮かべていたから。しかも、不自然な空気ではない。きつと彼女は、そんな表情をしようとしてしているわけではないのだろう。

何を思っているかは知れぬが、けれど齡十六の新八の目には、寂しいように見えたのである。

「…新八さんたちは、銀さんと知り合ってどれくらいになるんですか？」

新八がそんな思いにいたってはつゆ知らない榊の表情は、すでにいつもの彼女のそれに戻っていた。

寂しい様子なんて微塵も感じさせない、温和で、柔らかで、それでいて澄やかな、整った表情に。

しかしそれは、裏を返せばなかなか腹が読めない、ということにもなる。何かしら所思を抱いていても、心の内に押し込めていつもの表情で隠してしまうこともできる訳だ。

さっきの表情。

何だか彼女は、初めて会ったときから、ありのままの姿で振る舞ってはいるような気がする。ただの予感だけけれど。

「ええっと……どれくらいですかね……考えたことないですけど、でももう随分経ちますよ」

「ですよね^^随分親しいご様子で」

「ま、何だかんだいって今の状態が落ち着いてるっていうか；お榊さんは幼い頃からっておっしゃいましたけど、それならもうかなりの付き合いですよね？」

「はい。もう、感謝してもしきれなくて……私にとってだけじゃないでしょうけど、とても大切なお人です」

「…銀さんと知り合ってそこそこにはなりますけど、お榊さんみたいな、銀さんをここまで慕っている人に会うのは初めてですよ」

「そうなんですか？^^；でも、銀さんはいろんな人からお慕いされているでしょう？」

「まあ、確かに……種類豊富な人と付き合いありますね」

「新八さん方も、その一人なのでは？もちろん、私もですけど」

にこっ、と微笑む榊。その目はまた川縁かわべりで騒ぐ二人に向けられている。

もつとも、正確には騒いでいるといってもほぼ一方的な試合展開であるが。

「そろそろ、日暮れが近付いてきましたね」

草原に腰をおろして早一刻ほど。

東の空はまだまだ色よい青を呈していたが、傾き始めた太陽は新八たちの影を徐々に長くしていた。あと数十分もすれば、東西の空に鮮やかなグラデーションが広がりはじめるだろう。

「そうですね。でも、かなり日長くなってきましたよね」

「これから夏の季節…日本はいよいよ本格的な梅雨の時期ですか」

「あ、お枷さんはあまり地球にいらっしやいませんでしたよね…」

「ええ^^^でも、先月と比べてかなり暖かくなっているって感じますよ」

二人が座る向こうには相変わらず討議をする二人の姿。

「違うヨ銀ちゃん。《ピー》は《ポー》と《パー》で《XX
X》なったネ」

「マジか？でも俺は《ピー》派だね絶対。歌うめーし」

しかし、何やら今度は真剣なムードである。
某番組の出演者について深いトークの最中のようにだ。

「お枷さん。そろそろ晩ご飯の時間帯ですけど、どうします？よかつたら、うちで食べませんか？」

「いえそんな！申し訳ないですっ……今日はお暇いひやすさせていただきま
すよ」

「でも、食事は大勢のほうが楽しいし……せつかくいらしたんだから、都合がいいなら遠慮せずに来てくださいよ」

何の連絡もせずいきなり押し掛けて、その上食事までご馳走にはなれない、と遠慮する枷。

用件も伝えたことだし、この川原で休憩を終えたあとは、今日のところはひとまず切り上げて後日出直そうと思っていた。

榊がそろそろ失礼しようとして新八に口を開きかけたとき、

『榊いー！』

と、突然下から声がとんできた。

「榊！お願いがあるアル！」

『え？』と見ると、いつ話を終えたのか、下からやたら目を輝かせた神楽が斜面を駆け上がってきた。一足遅れてゆったりと銀時も歩

いてくる。

「お願い？」

「私、大阪に連れてってほしいアル！」

「え！？」

「はっ！？」

いきなり何かと思えば、すごぶる突拍子もないお願い。
先ほどのトークから一体どのようにしてそんな話になったのかは見
当もつかないが、何とも急な話だ。いくら何でも、無理が過ぎると
いうものである。

「お、大阪に、ですか??」

「な、何言ってるんの神楽ちゃん。そんな話急に通るわけないでしょ」

もちろん予想を裏切らず否定した新八。

…しかし、どうもいつもの彼とは違い、心なしかどこか期待しているように見えなくもない。否定しつつも口調がきっぱりとしているのだ。

「榊、やっぱり急には無理か？いや、なんか、流れでそういう話になつてよオ…」
『タイミングよく榊きてんじゃん、頼めばもしかしたらいけんじゃね？』
『てなノリで……』

某番組の出演者について語るうち、関西のことに話題が及び、

『そーいえば今上方見物とか流行ってたな』

と銀時が気まぐれに発言したことによってこうなった模様。

普段なら万年金欠の彼らからこんな話題がでることは皆無だろうが、今はタイミングよく榊が出向いてきている。もしかしたら、と好奇心旺盛な神楽が榊に頼んでいるわけだ。

「…みなさんのご都合がいいなら、私は全然構いませんけど…」

なんと予想外の回答。さすがにいくら彼女でもこんな無理は通らな
いだろうと思いきや、あっさりと快諾し、拍子抜けだ。新八も神楽
と一緒に拳をにかけて小踊りしている。

「ま、マジでか！？さっすが榊ヨ！！イヤツホオオオイ！！！！！！！！」

「オイ、ほんとにいいのか榊？」

「ええ^^大歓迎です。今日お相手していただいたお礼に、何かしてさしあげたいとは思っていたんですが、こんなに喜んでもらえるなんて私も嬉しい限りです」

「お礼なんて、特別何もしてねーのに。ほんとお前昔から気前いいよな」

「とんでもないです。銀さんにはとても及びませんよ」

確かに彼女の表情からは無理をしている感じは見受けられない。こんな無茶苦茶な要望もすんなりと受け入れてくれるとは。もはや脱帽である。

すると彼女は、一言断り懐から携帯を取り出して誰かに連絡を取りはじめた。鮮やかな牡丹色でスライド式の、いかにも若者らしいデザインのもの。

右耳に添えながら話すその姿は、巷でよく見かけるツンツン丈の裾から足を晒し化粧を顔にのせた若者たちとかわらなくて、なんだか銀時は、少し複雑な心持ちになった。

無論、巷の彼らのようだとはいつても、それは見かけのことであり、彼らのような下品さもはしたなさもないのは言うまでもない。

「うん、そう。できるだけ早くお願いね」

通話を終えて携帯をまたサツとスライドさせ懐にしまう榊。

一連の動作を慣れた様子で片手で行うところを見ると、そういうえば彼女は組織のナンバー2だったと思い出させられる。

「いま船をこっちによこしてもらおうように連絡しました。すぐ来るでしょうから、少し待ってください^^」

「え？てことは、お榊さんお一人でいらしたんじゃないんですか？」

「はい。大抵は私一人のときが多いんですけど、今日はもう一人ついてきて。どうしようもないヤツなんですけど。」

「どうしようもない人、ですか……。」

この温厚な彼女に『どうしようもない』と言わしめるなんて一体どんな人なんだろうと新八は思った。

が、自分のまわりにいる人間はそれこそ手がつけられないほどどうしようもないヤツらだったと思い返し、どうしようもないといったって、コイツらに並ぶほどめちゃくちゃな人ではないだろう、と結論を出した。

「もうすぐ来ると思いますが、何か持っていくものはありますか？どこかお寄りしましょうか」

「いや、俺はなんも」

「僕も特にありません」

「あ！！定春！！定春連れてきたいヨ！！！！」

「定春？あの白いわんちゃんのことですか？」

「枷、無理なら無理っていいぞ。アレ規格外だから」

「えっと、確か…今日きた船は貨物室があったと思います。そこでよかったら、たぶん乗れると思いますけど…」

「「え、マジで？」」

「うおっしゃあああ！！！さすが枷ネ！！私連れてくるアルっ
！！！！」

いい終わるよりも早く駆け出していった神楽。万事屋までの距離はそう近くないが、彼女の運動能力をもってすれば屁でもないだろう。まして帰りは原付と同等の速さで走る“わんちゃん”と一緒にである。

「貨物室があるなんて、相当大きい船なんですか？」

「私たちがでるとき、二、三人乗りの小型の船はほとんどが出払っているか残りは整備中だったので、一人乗りか中型の船しかありません。なので今日は、複数人が乗れる中型の船で偶然きてて、貨物室は大抵中型の船からついていますから」

「なるほど。だから僕たちも急に乗れたんですね」

「…そういや、新八。お前さっきからやけに嬉しそーだな。そんなに大阪いけんのが嬉しいか？」

神楽が榊に頼んだときも、大阪行きが決まったときもえらく喜んで
いるようだった新八。

それは大阪に行けるといふことよりも、何か別なことを楽しみにしているように見える。

「…いや、…実はですね……」

ニヤリ、と口角をつりあげ、眼鏡をキラリと光らせながら何故かやや自慢気に彼は叫んだ。

「…お通ちゃんの大阪限定グッズ『ついに関西圏進出！？手始めに大阪からいきます初めましての方もご存知の方も買ってくださいなきややくヨーゼフよりパトラッシュ派』シリーズが売ってるんですよ……！！！！大阪だけでいまっ！！！！！！！！」

鼻息を荒くして吠えた彼は、グッズが買える嬉しさから興奮して頬が紅潮気味である。いつものこと、慣れた銀時はなんだそんなことが、とため息をついた。

「まさかこんな機会がめぐってくるなんて思いもしませんでしたよ！ ネットで買おうと思ってもとても手届かなくて諦めてたんですけど、ほんつとよかった！！ お通ちゃんファンとして冥利に尽きますよ」

「でたよアイドルオタク…… オタクなら自腹きって大阪までいってこいっつもの」

「収入源が給料払ってこないんだから仕方ないじゃないか」

「経済力の無さを俺のせいにするなよ。その気になりやあ、いくらかまとまった力ネくらい用意できんだろ。お前がまだまだ未熟なんだよ」

「あの…新八さんはお通ちゃんファンなんですか？」

「そーだよー。一ファン通り越してドルオタの領域だけど」

「インディーズ時代からの大ファンなんです。お通ちゃんのことなら誰にも負けない自信ありますよ」

「まあ、そうなんですか？私もお通ちゃん知ってますよ^^かわいいですよね」

「ですよね！？お榊さん、わかってくれますか！？いや〜さすがお榊さんです」

「無理しなくていいんだぜ。テキストに流しといて」

「いえ^^；十分かわいいと思いますよ。実は……」

と、話す榊の言葉を遮って彼女の懐でメロディが流れだした。

『あ、すいませんっ』

と言いつつ携帯を取り出しながら彼らと距離をとる。

「さすが、やっぱり副官ともなると忙しいもんなんですかね」

「すっかり振る舞いはそれっぽくなっちゃまってるけどな」

「…銀さん、なんか歳とった親みたいな言い方ですよ」

「あん頃はこんなちんちくりんだったのによォー。でかくなりやがってチキシヨー」

自分の腰の辺りに手をあてる銀時。

その高さをみると、いかに小さい頃からの彼女を知っているのかわかええる。

「あ、銀さん。今度はちゃんと連絡とれるように、電話終わったら連絡先きいときましようよ」

「でもよオ、連絡先きいたところで俺ら誰も携帯なんてもってねーよ」

「一応ですよ、一応。ないよりいいですって」

確かに新八のいう通りである。たとえ携帯はなくとも、連絡先は知っておくべきだろう。

一方の彼女は、未だ右手に携帯を握ったままだ。

「…ですから、いくらお誘い頂いてもお返事は同じです。気持ちは変わりません」

距離をとってはいるものの、車通りもないせせらぎ響く川原添い。否が応にも彼女の話し声がきこえる。

その口調と内容、表情からしても気分のよい電話でないのは明らかだ。

「いい加減にしてください。いくら連絡して頂いても無駄です。他をあたってください。失礼します」

今までの彼女とは思えないきっぱりとした、切り捨てるような槍声で一方的に電話を切った様子。その顔には苛立ちと不愉快が色濃くあらわれていた。

気を取り直すように短く息をはいて、またさつとスライドさせた携帯を懐にしまいながら戻ってくる。

「すみませんでした 取引先からの電話で」

「……………」

苦笑しながらそう言う榊。

取引先？商圏が全宇宙に広がる商売をしていれば、確かにねちっこい取引先や嫌な相手もごまんといえるだろう。

しかし、と銀時は思う。さっきの電話の相手は、そんな類いじゃないだろうと。

だが、彼女が『取引先』というのだから、きっと自分たちに知られたくない、もしくは隠しておきたいのかもしれない。

いつだってコイツはそうだ。初めて会ったあのときから。

「お前も大変なのねー。ストレス溜まんない？」

「ええ……正直、少しキツいところはあります。でも、それだけじゃありませんから。この職業は。だから平気ですよ^^潤にもどれだけ好きにさせてもらっていることか」

『もしかしたら、私の天職かもしれない』

そういつて微笑んだ彼女の顔は、今しがたの不快極まりないといった表情とは全く正反対だ。

「あ、お柳さん。さつき銀さんと話してたんですけど、もしよかつたら連絡先教えて頂けませんか？」

「あ、はい、もちろんいいですよ^^携帯お持ちなんですね」

「いや、すみません…そんな高価のものは持ってないんですけど…一応、番号だけでもと思って」

「そうなんですか??あ、じゃあちょっと待ってください…いまメモに書きますから」

またしても慣れた様子で懐部分から取り出したメモ帳にさらさらっとペンを走らせ、一枚破いて新八に手渡す柳。A7の大きさを罫線のみシンプルな紙には、彼女の性格があらわれているのか、丁寧な筆跡で番号が並べられていた。

この十一桁だけでも、彼女が普段から麗筆であることを感じさせる。

「ありがとうございます」

「大体はつながると思います。仕事の都合によっては、たまにでられないこともありますけど」

とそこへ、案の定驚異的な速さで定春に乗った神楽が悠々と現われた。

しかも手には、何故か大量のチョコレート。某有名企業のものばかりである。

「みんな待たせたアル」

「いや、ちょ、お前、そのチョコどーしたんだよ。なに？銀さんにプレゼント？気が利くじゃないの〜」

「誰がお前なんかやるアル。指くわえて黙って見てるヨロシ」

「どうしたんだよそんなにたくさん。まさか黙って持ってきたんじゃないだろーな」

「違うネ。もらったアル」

「もらったア？」

バリボリと音をたてて惜しげもなくチョコを頬張りながら、神樂は
事の経緯いきさつを説明しはじめた。

彼女がいうには、定春を迎えに猛ダツシュで万事屋にたどり着いた
ときのこと。

「定春ッ！！喜ぶアルヨ！榎が大阪に連れてってくれるらしいネ
さ、早く行くアル！！！」

無事再会した定春と共に階段を降り、さて急ごうかと定春に乗ろう
とした、その時である。

『ねえ』

と、突然声をかけられた。

「ん？」

大抵の人物なら声で大方わかる。だがこんな声は、記憶が確かなら一度だつて聞いたこともないものだ。

声のした方を振り向くと、そこには案の定見知らぬ男が立っていた。鮮やかな撫子の髪をした、柔らかな顔付きの青年。年若い顔立ちで、神楽より少し上くらいだろうか。出で立ちはシンプルなもので、やや暗い青丹の着流し一枚。生地は若干痛んでいるように見える。本人より少しサイズが大きいらしく、袖からは指先しか出ていない。左肩には麻織りの簡素な頭陀袋がかけられている。

「何アル。私急いでるネ」

「ごめんごめん。ちょっとだけ待ってよ。これあげただけだから」

と、いって彼が示したのは、腕一杯に抱えた大量のチョコレート。板チョコをはじめ、キャンディ型の小さなものやクランチ、ポッキー等、種類は様々である。

それを見た神楽は、怪訝な眼差しを一層強めた。

「いきなり何アル。見ず知らずの他人にタダでこんなチョコあげるヤツなんて見たことないネ。あとでカネむしりとろって魂胆アル」

か

「ちよつとちよつと・僕そんな人に見える？これね、仲良くなったお店の人にもらったんだけど、僕一人じゃ食べきれなくてさあ。少しもらつてくれない？あ、何もヘンなものじゃないよ。ちゃんと本物だからね」

そついうと彼はキャンディ型のチョコを一つ手にとり、包みをはがしてぽんと口に放り込んだ。

『ほひ』

と神楽にも一つ投げてよこす。

「ん〜 やっぱ甘いもんはいーね どうっ…おいしいいでしょ？」

嬉しそうに笑顔で訊ねる彼。確かに彼の言うとおり、口に含んだ瞬間広がる甘さ。新手の犯罪や悪意の匂いはこれといって感じられない。おまけに甘さに頬をゆるめている彼が金銭を要求する気配はゼロだ。

「コレ全部くれるアルか？」

「そっ！もらってくれる？」

「そこまでいうなら仕方ないから全部もらってやるアル」

「ありがとう！助かるよ。よかったあ^^」

腕一杯にごぼれんばかりのチョコレートを神楽に手渡しながら言葉を続ける。

「僕食べること大好きなんだけどさ。あんまり刺激物一度に食べるとお腹こわしちゃうでしょ？チョコとかナッツとかは弱くてさあ；こんな天気じゃ、チョコも溶けてきちゃうし」

「かわいそうアルナ。私チョコとかナッツ好きアル」

「そっかー。でも食べ過ぎには気を付けてね。あたるとワリとキツイからねえ」

「お前もな」

早速板チョコを一枚まるまる頬張る神楽に苦笑しながら、彼は頭陀袋を肩に掛け直していった。

「じゃあ、急いでたみたいなのに足止めてごめんね。助かったよお」

「まったくアル。けどコレでチャラヨ」

定春に乗ってチョコを示しながらニツと神楽は笑った。

「それじゃアル。食べ過ぎには注意しろヨ」

「うん、ありがとうお。そっちなね」

「…とまあ、こんなカンジアル」

「ほお。随時とまあ、変わったヤツに会ったのな」

「よかったね、神楽ちゃん」

「食べるのが好きなんて、神楽ちゃんと一緒ですね^^」

とコメントする彼らの手にはそれぞれ板チョコ、クランチ、ポキ
ー等のチョコレート。

彼ら三人に分け与えてもまだ神楽の腕にはたくさんチョコレートの山が抱えられており、並の量ではない。

神楽に渡した人物は一体どれだけの量を食べるつもりだったのだろうか。

「、すいません、またちょっと失礼しますっ」

またしてもに着信に手をぱっぱと払って距離をとりつつ携帯をスライドさせる榊。

『おお！！榊なんかカッケェアル！！！！』

とその姿をみた神楽がやや興奮したように騒いでいる。

「えっづん、そづ。川沿いの。そこから二時の方向に橋があるでしよ。」

チョコレートをかじりながら静かに彼女を見つめる三人。

今度の相手は親しい間柄らしく、砕けた口調で表情もいたって自然だ。

「レーダーはどうしたの？私電源切ってないけど。」

うそ、それどういふこと？

ん、取り敢えず来てから詳しく聞かせて。もうすぐその距離だから」

『？』

の浮かぶ三人。

スライドを閉じた彼女がこちらへ戻ってくる。

「すみませんでした。船からの連絡だったんですが、どうも場所が正確にはわからなかったようで」

「レーダー、て何アルか」

「私の携帯に内蔵してある電波信号です。私たちの船のレーダーに位置が表示される仕組みになってるんですよ。私たちが独自に使用しているもので、例えば惑星が違えど一定の距離までは居場所を特定することができます。私は個人的に行動したり、船に拾ってもらうことが多いので、常に信号を切っていないんですよ」

「ほおー。俺たちになついていけねーな」

「言葉にするとややこしいかもしれませんが、そう難しい話ではありませんよ^^私でもついていける世界ですから」

「で、そんなすごいものがあるのに、どうして場所が？」

「それが、船のレーダーの方に不具合がでたみたいで、うまく信号をキャッチできていないみたいです。こんなことは初めてなんですが…」

そっついながら携帯を操作して一応信号の電波状況を確認する榊。

「やっぱりこっちは問題ないし……今日の船はこの前メンテナンスを済ませたはずなのに……」

納得がいかない様子 of 榎。
すると、静かに大人しく座っていた定春が、いきなり空を見上げて
吠えだした。

「ん？どうしたネ、定春」

定春が見つめる方向には、こちらへ針路を向けた一隻の船。

「あ、ようやく来ましたね」

柳も空を見上げ、一息を吐いて顔を緩める。徐々に高度をさげて、ゆっくりと草原を揺らしながら船が川岸に着陸した。

「「「おおーっ」「」」

間の抜けた感嘆の声をもらす三人。

どんなものかあれこれ勝手に想像していたが、それはほぼ、期待を裏切らないものであった。

「カッケエエエエ!!!」

この彼女の組織が保有する貨物室付きの中型船舶。粗末なものでないとは確信していたが、それは機能面だけでなく、デザインにまで趣向が凝らされていた。

全長はおよそ10m弱ほど。高麗納戸のような深い紺を基調としており、全体的に丸みのあるラインで、曲線美が見るものに洗練されたイメージを与える。さすが中型船舶なだけあって、その姿は小さい訳ではなく、かといって大きすぎる訳でもない程よいサイズだ。

操縦席側の他に小窓が左右対称三つずつあるところを見ると、操縦

者を含め、恐らく八人乗り程度なのだろう。定春搭乗予定の貨物室は船の後方にあるスペース部分だろうか。

「スゲーな、こりゃ。コレ、お前んとこのなんだよな」

「はい。中型クラスのものになります」

「た、高そうな船ですね……てゆーか、なんか江戸で見るとつな船と雰囲気違いますね」

彼らが見惚れていると、機械的な音と共に出入口の扉が横にスライ
ドするようじにして開き、タラップがかかった。

「ふっふっふ」

ゆっくりと、操縦者がおりてくる。

「どうも、お待たせいたしました」

ふわつと白橡はくろうの髪みが風に揺れる。目に入る女郎花色にようがしきの生地に、艶やかな牡丹の柄。

船の外見に似合わず、出てきた彼の装いは実に“ラフ”といった着流し一枚。胸元はわざとか否かややはだけており、腹周りはゆとりをもたせ、裾は程よい丈で、何とも粋な着こなした。足元は裸足に下駄で、柄の着方も慣れているのがわかり、ぱっと見、全体的にセンスの良い印象を覚える。

「船が少々機嫌悪かったもんで。お待たせしてすいません」

言いながらこちらへ悠揚たる足取りで歩いてくる。その様子たるや、実に落ち着き払った、堂々とした印象さえ覚える。

髪はパーマがかかっているのか綺麗なウェーブをなし、それを右耳の下で軽く一つに束ね、前へ流している。サイドに少し流された髪が、いやに色っぽい。耳にはシンプルなシルバーのピアス。

男にしては潤みをたたえた葡萄茶えびぢやの瞳が特にそう感じさせるのかどうかはわからないが、何だか、実に艶美な風情を感じさせる人物だ。

「いえいえ、全然待つてなんかいませんよ。僕らこそ、急にお邪魔してわざわざ来てもらってすみません。」

「いんや、とんでもない。そちらこそ、連絡もナシに榊が世話なつたみたいで。何か粗相やらかしてませんか？」

「粗相だなんて全然。むしろこつちがやらかしてばっかですよ。ほんと申し訳ないです……」

思わず顔を背ける新八。彼女に対する数々の刺激的な待遇は、申し訳ないと言っしかない。

「冗談を。」

おや、なんと素敵なレディと…かわいいワンちゃんだ。どうぞ、お近づきのしるしに」

神楽へ視線を移した彼は、一体どこから出したのか、左手を胸の前に添えて軽く頭を下げながら、一輪の赤いバラを神楽に差し出している。

“ 素敵なレディ ”

などという言葉が神楽に対してつかかりなくできたことなど、今まで一度でもあっただろうか。

普段の彼女ならバラをはたき落としてツバを吐いてもよさそうだが、今の彼女は目がハート。頬を染めしおらしくして、黙ってバラを受け取っている。

そんな様子を横目に見ながら、銀時、新八はあんぐりと開いた口が塞がらないようだ。

「……すみません……コイツ、いつもこういう調子なんですよ……プ
レイボーイというか、好色家というか、色狂いというか……いつも
言い寄ってくる女性が尽きない奴なんです……」

柳があきれ果てた様子で溜め息混じりに言う。

なるほど、確かにかなり端正な顔立ちだ。銀時よりやや背が高く、
色白で、鼻筋が通っており、眉目秀麗という言葉がぴったりだろう。
首筋、チラリと見え隠れする鎖骨のあたりなどは、前述の通り遊女
にも勝るとも劣らない色気に溢れている。

先ほどからのふざけたような掴み所のない口調と物腰は、彼の魅力
が『見かけ騙し』でないことを体現しているようだ。

江戸とは別の関西の優男「せうめい」というのはこういうものなのだろうかという人は思う。

それにしてもあの神楽が暴言を吐いていないところからも、彼がどれほど魅力的なのかお分かり頂けるだろうか。

「…とんでもねーのがきちまったよ、新ぱっつあん」

「色男で有名な土方さんとはまた別のタイプですよ……なんていうか、モテないワケがないですよ、この人」

「近寄りがたいけどお近づきになりたい、みたいなー……見る、神楽なんか骨抜きにされてんぞ」

「あの神楽ちゃんを一発で……しかも今どきバラなんてクサすぎる

なのに、なんであの人がやるとしつくりくんですか。素敵すぎてキザ野郎って罵声も言えないんですけど」

「俺が知りてーよ。バラ一本で女口説き落とせんならいくらでも買っつてやるよ。なんだ？誕生日に歳の数だけ花束にして持ってってやるーか」

神楽を“レディ”として扱い、紳士的な振る舞いをしている彼を見ながら、一応彼と同じ男の二人が言う。

しかし、彼に不快感や嫉妬を感じる訳ではない。正直、男から見ても彼は魅力的だった。

語弊があるかもしれないが、ホモセクシユアル的な意味合いではなく、同姓として素敵に思う、ということである。輝いている女性が女性に支持されるのと同じそれである。

女性の扱いに慣れているようだが、そのルックスからしても、ホストクラブにでも勤めているのだろうか？だとしたらNo.1の座は万年彼の指定席になっているだろう。

はいはい、と榊が気を取り直すように声をかけた。

「…ハア、こら、和葉。こちらは私が今日お訪ねした坂田銀時さん、志村新八くん、神楽ちゃんよ」

「おおっと、失礼……申し遅れました。俺は八雲和葉ヤクモカスハっていいいます。まあ、睦援隊の副官代行的な位置取りですかね。榊ちゃんが席外したとき、俺が代わりなんで。今日は榊ちゃんが江戸に出掛けるってーのにくっ付いてきました。どーぞヨロシク」

簡単な挨拶を述べて軽く頭を下げる。

このしつかり者のお榊さんの代行がこの人か……と、正直新八は内
心思った。と同時に、彼が来る前にいった榊の『どうしようもない
ヤツ』という言葉を思い出した。

あー、なるほど、こつこつこつとか。

「んで、えーと、皆さん大阪にいらっしやるんですよね。今から出
発していいんですか？用意とか」

「大丈夫です。和葉さんがいらっしやる前に済ませたんで」

「なら早速出発しましょうか。せっかく船があんですから、こんな
とこで立ち話もなんでしよう」

第六部 いざ、大阪へ（前書き）

「なかなか鋭いじゃねーか、兄ちゃん。女好きのワリにゃ、いいも
んもってんな」

第六部 いざ、大阪へ

「「「おおおおーっ！」「」」

定春を貨物室へ入れたあと、いざ船の内部へ足を踏み入れた第一声。そこは想像どおり、船の外見と同じく近代的で、上品な空間が広がっていた。

出入口から入って左手の操縦席はさすがにこまごまとした機械類が並んでいるが、壁、床、座席…全体的に柔らかな色調で統一された船内は無機質な感じを受けず、居心地の良い雰囲気をつくりだしている。特に設置された数個の照明がそうさせているのか、それは蛍光灯のような白い電光ではなく、温かみのある包み込まれるような明かりで、それがこの柔らかい印象を助長しているようにも感じた。

座席数は操縦席とその隣を合わせ計八席。間に出入口を挟んで後ろ六つの席にはそれぞれ壁側に小窓が設けられている。

座席はすべてクッションのきいたソファ状。これなら何時間座って

いても疲れはしないだろう。

座席と座席の前後の間、及び通路の幅は、特別不便を感じないほどの余裕がもたれている。

「おおー、なんかスゲーよ、コレ。辰馬もこんなの持ってんのか？」

「キヤツホオオイ！！！！こんなの初めてヨ！！」

「こないいいカンジの船に乗るなんて初めてじゃないですかっ？エ
コノミーとは話が違いますよ！！」

座席にどかっとな腰掛け跳ねたり、ウロウロと中を見回してはしゃぐ三人。

「うおっ、銀ちゃん！これ背もたれ動くアル！」

「後ろの方トイレまでありますよー！」

「マジでかー!？」

定春を入れた貨物室のロックを確認し、後から入ってきた二人。

三人の様子を見て、榊が小さく微笑んでいる。

「なーぎちゃん。な、どーゆー関係？『昔から世話になってる恩人』っていったの、あの天パの男だよな？」

「私、小さい頃に両親亡くしたあと、ある人が拾ってくださいって、その人に面倒みて頂いた……って言ったでしょ？あの方が、その人」

「え、マジ！？んじゃー、榊の命の恩人、てこと？」

「その通り」

「ひゅー、あの人が……。アレ、確か……。榊ちゃんに剣術教えてくれたのも、その拾ってくれた人……だったよな。てことは、それも

あの人か？」

「そう。銀さん以外の方にも教えて頂いたけど。でも銀さんは、今までも、これからもずっと、絶対に私なんか敵わないくらい強い方……だから今日、失礼を承知で龍神会のご相談したの」

「すごいねえ……。俺たちが頭あがないウチ自慢の榊を育てた人か。そんなスゲー人なら、俺もいつぺん手合ってみてえや」

「ふふつ、やめときなよ（笑）和葉なんか軽くたしなめられて終わりだつて」

「な、そんなことねーよ？俺だつて陸援隊の用心棒的なことしてんだから一応。身護るくらいはできると思うよん」

「つつかかってくるのはそんなにヤバい相手でもないでしょー。剣と女だつたら真つ先に女とるくせに」

「榊ちゃん。それヒドいんでねーの？当たってるけどそこまでざっくり言わんでもいいんでねーの？少なくとも棒振り剣術じゃないからね僕う」

「はいはい、話はこれくらいにして。そろそろ船だしてくれる？」

「…へいへい」

それぞれ操縦席と副操縦席に座る二人。

カチツとシートベルトを締め、大小いろいろとあるたくさんのボタンやらレバーを手慣れた様子で操作すると、船がささやかなモーター音をあげだした。

「お好きな席に着いて、シートベルトをお締めください。離陸するとき、ほんの少し船体が揺れるかもしれませんが」

映画が何かで見たことのあるように、船が動力を持ち始める。

副操縦席に座る榎の後ろに銀時、その右側、操縦席の後ろへ新八、新八の後ろへ神楽が大人しく座席についてシートベルトを閉め、小窓から外の様子を窺う三人をちらつと榎が振り返る。

「みなさん、準備はいいですか？お忘れ物や用事なども遠慮せずいってください」

「大丈夫ヨ」

「オーケーです」

「では離陸します。念のため、少しの間座席から立たないでください
い^^」

彼女の言葉を合図に、ふわっと僅かな浮遊感を伴いながら、船体が垂直に浮かび上がった。

『おおオ！』

と残り僅かなチヨコの二つをかじりながら神楽が歓声をあげる。

「…しっかしまあ、まさかこんな形で大阪に行けるなんてな」

「今ホットな上方見物ネ！たこ焼きもいいけど、お好み焼きとご飯合わせて食べるアル！！」

「僕は真っ先に限定グッズを…！！」

つい数時間前、この梅雨入り直前の時期にしては湿気の多いまとわりつくような蒸し暑さにうだり身体を横たえているときには、まさかテレビで特集していた上方見物に自分たちが出掛けることになるなど、思いもしなかった。更にいえば、特にこれといった予定もなく平々凡々に過ぎていくと思われた平日に、別れて久しい人物と突然再会を果たすなど、驚きとしか言いようがない。

しかもそれは彼女にとどまらず、これからもう一人、久しぶりの再会を果たすのである。

予想でいくと彼はきつと、頭という職位にあり、たとえ仕事が山積

みでも、酒の席には自分が酔い潰れるまで付き合ってくれらるだろう。そんなことを考えたら自然と少し笑えきて、銀時は窓の外の色付いた空模様を眺めながら小さな笑みをこぼした。

「何一人でニヤついてるアル。気持ちワリい」

「どうせ卑猥なことでも考えてたんでしょ」

「ちょっと微笑んだくらいで何だよこのバツシング。オメ、榊が一人でニヤついてても全然反応ちげーだろコラ」

「当たり前じゃないですか。お榊さんの微笑みとアンタのニヤつき一緒のラインに並べんなよ」

「しばらく私に近づかないで」

「近づかねエーよ……もう頼まれても近づいてやんねーからな
っ……！」

「……で、和葉。レーダーにポイントがなかったって、どういづ」と？
と？」

ある程度の高さにまで船は上昇し、気流も安定して、

『もうお席を立つても大丈夫ですよ^^』

と言ったあと、続けて彼女は隣の和葉に問うた。

「ん？ああ。それがな、いつものとーり俺は船乗ってエンジンかけて、レーダーで榎ちゃんの信号サーチかけたのよ。したら、ちつともレーダーにポイントがでねーの。榎ちゃんも潤もユウもぜーんぶ。それどころか、地図も表示が悪くてな、何だかオカシイのよ。ここいらはまだ何とかなるが、もし他の星でこんななられたら、もう俺困っちゃうよホント。もう生きてけない」

「レーダー自体がおかしいのか……メンテナンスでこんなの見逃すはずはないし、つい最近調子が悪くなったってことだよね……」

真剣な面持ちで言いながらレーダーを操作する榎。

操縦をマニュアルからオートに切り替えた和葉がキーホルダーの揺れる携帯を開く。

「んまあ、本船戻ったらもっぺんメンテナンスかけてみよ。バラしたら直るかもしないし」

「仕方ないかあ……じゃあ、和葉お願いね」

「え、俺？やあダあよお〜全体半日はつぶれんじゃん」

「和葉じゃなかったら丸一日はかかるし、确实じゃないでしょ。ア
ンタ機械だけはすごいんだから、お願い」

「機械だけ、ねえ……機械オタクみたいな扱い、和葉ちゃん拗ねちやうよ〜。おはぎ頼むね、モチ春権屋しゅんごんやの」

「はいはい、明日にでも用意するから、地球でるまでにお願いできるっ。」

「あれ、そっくくるっ。」

春権屋といえば、本店のある京都ばかりか関西一帯で評判の老舗高級和菓子店。

品物はどれも老舗の名に相応しい特上物だが、特におはぎは全国からそれを目当てに人が集うほどの逸品、と春権屋の看板商品である。

「和葉さん、おはぎお好きなんですか？」

「んもー好きも好き大好き大好物よ。俺の80%はおはぎでできてるね」

「ココの糖尿と同じよーなこと言ってるアル」

「特に春権屋という、京都の老舗和菓子店のがお気に入りで^^；地球に来るといつも食べてるんです。地球をでるときは必ずまとめ買いしていくんですよ…」

「機械だけは、って、もしかして機械に強かったりするんですか？」

「もしかしなくともそーですよーん」

「こつみえてもかなり腕利きのエンジニアなんです。無類のおはぎと女好きですが、腕は確かで」

「“エンジニア”てめっさかつちよいーアル！！さすが和葉あ」

「おはぎが好きって…何か意外ですよね、見た目がそんな感じ全然ないし」

「よく言われんす。女の子にいつもシッコまれるんすわ」

会話を半分、銀時は聞き流していた。榊のいった“京都”という地名。

いつもはそんなことないくせに、何故だか引っ掛かったのだ。

京都といえば、あの高杉の潜伏先。喫茶店での桂の話が思い出される。

そして今赴いているのは、その京都と隣接する大阪。

「……………」

最悪な事態が脳裏に浮かんだが、しかしそれはすぐに掻き消える。
いくら何でも、考えすぎか。

「どーしました、銀さん？船酔いでもしましたか？」

ふいに、右斜め前の位置にあたる座席から声がかけられる。

こちらを振り返った和葉の顔。

「いや、ドラマの再放送予約すんの忘れたなーと思ってよ」

「なっ、しまったアル!!! 今日何曜日アルカ!!!?」

「月曜日ですよ」

「うがぁあゝゝ!!! せっかくトモコの誤解がとけてサチエとカズヒコさんが付き合いたしたのにキクヨがちょっかいだしてきてこれからってとこだったのにアル!!! オイコラ、ちゃんと録画しと

「けよドルヲタあ！……！」

「るっさいよっ！録画すんならいつペン家帰ったオメーがやるべきだろーが！！泣きたいのはこっちだよっ！！僕も続き気になつてたんだからっ！！……！」

新八と神楽が上下でぎゃあぎゃああと騒ぎ始める。

あー、カズヒコさんお母さんに嫌味言われてねーかな。サチエさんあの後ちゃんとハルカさんごまかしたのかな。

なんて前回の続きが銀時も気になりはしたが、しかし正直なところ、それよりも気になることがいくつか頭の中でモヤモヤしている。

「何か気がかりでもおありで？その顔は、ただドラマの再放送の録画を忘れただけのもんじゃないやありませんぜ？」

ふざけたような口調で調子のいい振る舞いばかりしていて色狂いの“とんま”な奴かと思ったが、こんな嘘でお茶を濁せるほど安直な人物ではなかったようだ。

「なかなか鋭いじゃねーか、兄ちゃん。女好きのワリにゃ、いいもんもってんな」

「なあに、さっきのアンタの表情見りゃ、誰だっカオて思うでしょーよ。少なくともドラマの再放送見逃した顔じゃなかった」

銀時自身、確かに眉をひそめてはいたかもしれないが、しかしそれはほんの一時、一瞬程度だ。

それほど銀時が深刻な顔をしていたのなら話は別だが、彼は操作をオートに切りかえているとはいえ、携帯に視線を落としながら時折目の前の機械類と窓の外に目を配っている。そんな中で自分の後方に位置する銀時の、ほんの僅かな表情の変化にも気が付いたというのか。

まだ会って十分と経っていない。会話も満足に交していない。

ただのすつとこどつこい野郎などではなく、もしかすると彼は榊と同等、もしくは上回るほどの洞察力の持ち主なのではなかるうか。

「いやいや、そんな大事だいじなんかじゃねーよ、マジで。ちょっと気になることあったただけだから」

「関西の女はどないなもんかって?」

「そうそう、それよ。江戸の女とどう違うのか、身をもって知りたいの銀さん」

「ハハツ、任してくださいよ。夜の大阪探索は是非俺に案内させていただきます」

きつと和葉は場の流れにのったのだろう。砕けた表現でいえば“ノリがいい”のか。

和葉の左隣、銀時の前方に座る榊は、またコイツはこういう話ばかりして…とでも言いたげな呆れた表情で和葉を見遣っている。

「頼むぜ、和葉ちゃん。あとできればリーズナブルなお値段で飲める店もお願い」

「何おっしゃんすか。睦援隊とよしみの店で破格の値段で厚くもてなさして頂きますよん。頭からのお達しもでてまして」

「え、どゆこと？」

丁度争いに区切りがついたのか、ん？と新八、神楽も前方のやりとりに目を向ける。

「頭って、潤のことだよな」

「へい。さっきあなた方を大阪へお連れしてるところだって頭に連絡いれたんす。したら、銀さん、お連れの方二人も大事なお客様つつて、大阪では厚くもてなすつて頭が言つてつした」

なるほど、さっきから彼が携帯を開いていたのはこれだったのか。

「マジでか！VIP待遇でヤツアルか！？」

「拡大解釈しないの。でも、潤さんて人に感謝ですね。銀さんの連れっただけで僕らにもよくしてくれるみたいで」

「俺は詳しい事情は知らないんで何とも言えませんが、頭も榊も、アンタのことが随分とお好きみたいですね」

「こんなヤツのどこがイーアル。足臭いヨ」

「足が臭いのをカバーするほど俺は魅力的なんだよ」

得意げな顔をして腕を組む銀時。

『さーてと』

と、携帯を閉じた和葉が座席に座りなおす。

「このままのんびり遊覧しつつ行きたい気もするが、向こうに着くのが遅くてバタバタするのもイヤでしょう。ちいとだけ飛ばして行きましょつかね」

「そうだね。ご飯もまだだし」

またいくらか手前の機械類をさわり、操作をオートからマニュアルに切り替える。

もうそんな時間帯かと窓の外を覗くと、さっきまで茜色に染まっていた一面の夕焼け空はいつの間にもやらの間にやら西の端に追いやられ、澄んだ藍色が徐々に東側から広がってきていた。

「ワリ、俺ちとトイル」

「どうぞ、後ろの左側の戸です^^」

「榎、これゴミ箱でしたらいいアルか」

「あ、はいゴミ箱」

「さんきゅアル」

ようやく食べ終えたのか、神楽の持っていた大量のチョコは全てゴミくずに変わっていた。
榎の手渡したゴミ箱はそれほど小さい訳でもないのにもう中身が一杯である。

「…にしても、ほんとなんか、スイマセン；；いきなりこんな船に乗せてもらって、大阪まで連れてってもらって……」

「えらい遠慮ってーか、謙虚なこと言うな。誘ったんは榊だろ？」

「いや、神楽ちゃんがなんかダメもとでお榊さんにきいたら、オーケーしてくれたって感じで……」

「そんなへこへこせんでもいいーって。たぶん榊、どの道銀さんに大阪来てもらいたかったんやろ。龍神会の話」

「…うん。ほんと、今日はもうお話だけして失礼しようと思ってただけど……」

「ま、丁度よかったとこだね。運良くこの子（船）で来てたし」

「ほんと、ありがとうございますっ」

改めて礼をいう新八。
どちらかといえば、限定グッズが買える喜びの色が強い。

「あ、和葉、新八さんもお通ちゃん好きなんだって^^」

クスツと笑いながら
榊が和葉にいった。

え？も？

「え、まマジで！！？新ちゃんもお通ちゃん好きなのっ！？」

「えええええ、ちよつちよつと！！！！和葉さんもお通ちゃんのファン
なんですかつ！！！！？？」

なんと、意外な接点判明。まさかのお通ファンがこんなところにもいたとは。

「オイオイオイ、マジかあ〜！いつからなの？」

「インディーズ時代からずっと大ファンなんです！僕、お通ちゃん
の歌で救われたんですよ！！」

「俺よりかなりセンパイやな。俺は先々月の寄り合いで地球にきた
とき偶然知ってな、のめり込んだワケよ〜」

話は弾んでいるが、運転する和葉に気が散っている様子はない。

さすがエンジニア、安心してハンドルを任せられるというものだ。

「見て、新八さん。携帯にキーホルダーまで付けてるんですよ」

和葉から携帯を抜き取り、キーホルダーが見えるように斜め後ろに腕をのばして見せる。

「あ、コレもしかして……昨日から発売の大阪限定グッズですよ
……!?」

「そーなのよ、買った買ったのよついで。俺こつうのにはキョーミ
ないんだけど買ったのよ。どんだけハマツてんだろね、俺
笑」

「自室に壁紙まで貼ってあるんですよ……」

「僕も一面に貼ってありますよ！あ、じゃもしかして、水着ver.
アンド浴衣ver.裏表等身大ポスターも……!」

「買ったちゃいましたあ」

「うらやましーッ……和葉さん、よかつたら大阪で少し付き合っ
てもらえませんか？僕もグッズ揃えたいんですよ！」

「いくらでもお付き合いいたしますとも。あ、でも銀さんとも予定あつから、ちいと短いかもしれないな」

「出来る限りでお願いします！アイツの時間はどんどん削っちゃってオーケーなんで！！！」

「ぶっ……りょーかい（笑）」

笑いながらも一つ約束を結んだ和葉。

前々から、内心、榊に剣術を仕込んだ人物が気になっていた。榊はあまり昔の話をしたがらない。

『幼い頃に両親を亡くし、死んだも同然だった自分がある人が助けてくれた』

いつの日だったか、知り合っただいぶと経った夜にそんな話をしてくれた。

その時の榊の目は、今でもはつきりと覚えている。思わず心臓が跳ねたほど、含蓄がんちくのある複雑な瞳をしていた。

幾多の女を知っている、女に慣れた和葉が息を呑んだのである。

今回の榊の江戸行きにくつついてきたのは、ただ江戸の女と触れ合いたかったからだけだった。

榊が銀時らに会ったためだったとは露知らず、榊の命の恩人に会えるとは思ってもみなかったのである。

榊に剣を教えた人物。

榊の命を助けた人物。

正直、その人は全くイメージと違っていた。だが、彼女にあれば信頼され、敬意を寄せられ、心から大切に想われているのだから、きつと見た目のままのような人物ではない。

死んだ魚のような目に、少々変わった身なり。だけど尊敬に値する人物。

和葉は銀時らと知り合えたことを、心から嬉しく思っていた。

休憩…という名のサボタージュ（前書き）

「オイ何だよ、休章って。うまいこと言ってたって、手抜きにゃ変わりねーぞ」

休憩…という名のサボタージ

「オイ何だよ、休章って。うまいこと言ったって、手抜きにや変わりねーぞ」(銀時)

「少し休憩ですって。話の整理とか、いろいろ座談会って作者の方言っていましたよ」(新八)

「休憩って、半年もほったらかしといてやっとちょっと進んだと思ったら、やる気あんのかヨ。ナイだろ」(神楽)

「いや、地味にいろいろ手直し加えたりしてたみたいですよ。『活動報告』ってところ細々と更新してるみたいですし」(新八)

「ああ、ワリとちょこまかやってるよな。いろんなとこいじってんぞ。榊の歳の話んとか。沖田くん来たところなんかごっそり変わってやがるからな」(銀時)

「まったく、始めたんならちゃんとしてほしいですよ。もっと責任感持つてほしいですよ」(新八)

「新八、そりゃ無理ヨ。あいつにはそんなもん鼻クソほどもナイアル」(神楽)

「いや目クソ以下だろ。ミジンコ並だな」(銀時)

「んな汚ねーモンと並べんなよ、ミジンコに失礼だろーが」(新八)

「てゆーか新八、つまるところこの章はどーゆー時間だ？15文字以内で簡潔に説明しろ」（銀時）

「そんなの無理ですって。僕も全然……」（新八）

「ハイ終了おー」（銀時）

「終了じゃねーよ。なんかめちゃくちやハラ立つんですけど」（新八）

「作者がいろいろ言い訳とか弁明とか言い逃れとか誤魔化したりとかする卑怯な時間アルか」（神楽）

「あー、なるほど。ナイスな説明だ神楽。銀さんでもよおく理解できた」（銀時）

「いや、それだけじゃねエ」（？）

「あ、あん？この声は……どっからわいて出やがった、税金ドロボー」（銀時）

「初めんときに引き続きまた余計なのが来たアル」（神楽）

「余計なのはお前だクソチャイナ。今すぐ失せろイ」（税金ドロボ
ーB）

「余計なのは貴様の方ネツ！！なに当たり前みてーなツラして（
以下略）」（神楽）

「オイ万事屋、話がここまで進んでるってーのに、真選組の順番が

「やけに少なくねーか？」（税金ドロボーA）

「は？なーに言ってるんだよオメエ。ちゃんとあつたじゃ……」（銀時）

「待たんかイイイイ！！！！オイ、〇（税金ドロボーA）〇てなんだよ！！誰だつ、ふざけてるヤツ！！！！」（税金ドロボーA）

「作者以外ねーでしょう。休章だからってハメ外してんじゃないですかイ」（沖田）

「何でオメーだけ直ってるだ！！！！」（土方）

「あ、直った」（銀時）

「チツ、面白くねーな」（沖田）

「面白くてたまるか！！ここはこんなことくっちゃべる時間じゃねーだろ！！！！俺が言いてえのは、どうしてあんなだけ話が進んでてあからさまに真選組の出番が少ねエのかって聞いてんだつ！！！！！！」（土方）

「だアから、オメーらもちゃんと出てたじゃねーかつつてんだろーが！お前なんか五部の終わりに事が終わった後ぞろぞろと引き連れて出てんだろ。あとゴリに電話もしてんじゃないか」（銀時）

「俺に至っては一部で旦那のところへ行つたきりですぜ。どうして土方より出番が少ないんでイ。吐き気がするぜ」（沖田）

「そりゃ、俺とお前の覆しがたい差だろ？そーごくん」（土方）

「…土方、本家じゃねーからって調子こいてんじゃ」（沖田）

「はいはい、醜い不毛な争いはやめにして、作者さんからの書き置き見つけましたよ」（新八）

「書き置きイ？俺らに喋らそーってのか？」（銀時）

「んなこざかしいマネせんとテメーで出てきて喋った方がいいじゃねエか」（土方）

「作者が出てくるより僕ら銀魂メンバーが喋った方が面白そうだから、ですって」（新八）

「オイ、『面白そう』って何だよ、『そう』って。おちよくってんのか」（銀時）

「ナメてるアル。絶対ナメたおしてるアル！そんなんで私たちを手なづけられるとでも思ったか愚か者がああ！！」（神楽）

「ま、まあまあ。確かに、作者さんが出てきてくどくど喋るよりはいいんじゃないですか？」（新八）

「チツ…しゃーねえ」（土方）

「書き置きには何て書いてあるんですかイ」（沖田）

「えーっと、まずはお詫びから入ってます。『更新がクソ遅いのはほんとすいません』だって」（新八）

「ほお、自覚はあんのか。あんまりにも遅エから、確信犯だと思っ

てたぜ」(土方)

「そーカリカリすんなよ土方くん。これは連載三日目から言われてたしな」(銀時)

「自分の出番が少ない時点でご機嫌ナナメでさア。ナルシスト野郎が」(沖田)

「ってんめ、いまなんつた!!!? もーいっぺん言ってみろ総悟ツ
!!--!!」(土方)

「あれ、年寄りの耳にや聴こえませんでしたかイ。ナルシスト土方」
(沖田)

「上等だ……。テメエ、そんなに死に急ぎてエならもつと早く言ってくれりゃあよかったのによオ、総悟……」(ナルシスト土方)

「おーおー、また物騒なことおっばじめようとしてんぞ」(銀時)

「ったく、二人とも刀しまってください……ヒツ!!」(新八)

「チツ、ちょこまかすんじゃねエ総悟オオオ!!!」(ナルシスト土方)

「相変わらずなつてねーな土方。そんなんで俺に勝てると思ってんのかトシ」(沖田)

「トシゆーな!!!」(トシ)

「じゃトシぞー」(沖田)

「それもいろんな意味でアウトだろーが!!!!!!」(トシぞー)

「あれ、新八おま、いつの間にナイスな髪型になったじゃねーか。いま流行りの80年代ファッションでヤツか?」(銀時)

「新八のクセに生意気アル。何洒落気付いてんだよ気色ワリーな」
(神楽)

「好きでこうなったんじゃねえわアアアア!!!!!!こんなぱっつん頭じゃ外歩けねエよ、鏡も見れねーよッ!!!!!!」(新ぱっつん)

「てオイ!!!」(新ぱっつん)『てなんだ、コラッッ!!!!!!』
「めー調子こいてつと全身80年代色にしてやんぞクソヤロー!!!!!!」
(新ぱっつん)

「まあまあまあ……落ち着け。ここでお前が暴走したら貴重なツッコミともっと貴重な進行役が空席になっちまうだろーが。取り敢えず黙れ」(銀時)

「アンタ慰めてんですかソレ!!!?さらに傷が深くなったんですけど!!!!!!」(新ぱっつん)

「いーから落ち着けて。とにかく、この場においてお前は必要とされてんだよ、新ぱっつん」(銀時)

「されてんだヨ、ぱっつん」(神楽)

「だからぱっつんてなんだよ!うまいこと言いくるめられた感満点なんですけど!!!!!!ていうか名前そのまま新ぱっつんにすんなっ!

癩だ。^{しやく}とつとと先進める新ぱつつん」(銀時)

「銀ちゃん、それシャレアルか」(神楽)

「ばつ、オメ、あのなあ、シャレとかそーいうことは聞き返すもんじゃねエんだよ神楽！！！なんか銀さんめちやくちや恥ずかしいじやねーかアアアア！！！！！」(銀時)

「あゝも、はいはい、わかったから落ち着いてください二人とも。土方さんと沖田さんも、そろそろ刀しまってくださいって。先進みますよ」(新ぱつつん)

「完全に聞く気ねえーな、あいつら」(銀時)

「喧嘩のレベルだけは一等もんなんですけどね」(新ぱつつん)

「銀ちゃん、ここは手分けして仲裁に入るアルか」(神楽)

「ダメダメダメ、余計乱闘になるから！あんたらやらかしたら僕じやとても止めらんねーから！！！！」

土方さん、沖田さんっ、早く切り上げてこっち来ててくださいってば！書き置きの際、真選組のことみたいですよ！」(新ぱつつん)

「あ？そりゃ本当かメ…ほああわおっ！！？」(土方)

「チツ……しくったか」(沖田)

「総悟つ、てめツ、アウトとオーケーの空気の分別もつかねエのか
！！！！！！」(土方)

「俺的にはオーケーでしたぜ、トシ蔵」(沖田)

「オイ、頼むからそれはやめろよ…」(トシ蔵)

「だから名前まで変えんなっつーのっ！！！」(トシ蔵)

「…えーっと、次は、『真選組さんの出番が少なめなのはワケがあるんです』だそうですね」(新ぱっつん)

「ワケえ？是非ともお聞かせ願おうか、そのワケってもんを」(土方)

「俺が第一部に出たっきりなのもちゃんとワケがあるってんですか
イ」(沖田)

「そつみたいですよ。何でも、次からの章で今までの話の真選組側もやっていくみたいです」(新ぱっつん)

「どうしようもねえ能無しヤローだと思ってたが、考えるとこは考えてんのか」(土方)

「にしたって手際も要領もワリーがな」(銀時)

「ま、ああいうのは調教のし甲斐があるってもんですがね」(沖田)

「…えー、お次に…」
『榊さんの髪の毛の“浅葱色”って何？想像しづらい。て方います？』…ですって「(新ぱっつん)

「聞くなよ」(銀時&土方)

「『分かりやすいように説明お願いします、銀さん』…銀さんに振られてますよ」(新ぱつつん)

「俺かよオオオ!!!…まー、確かに作中にゃ訳のわかりにくい色の名前がちらほら出てきてんがな」(銀時)

「『いちいち説明してられっかよ。テメーらでググレ』だってよ土方」(沖田)

「いや、ねーからそんな暴言!!」(土方)

「…まあぶっちゃけ、柳の髪はブーチのあの子みてーな感じだな、うん。ほら、あのナイスバディな」(銀時)

「ああ、あの名前の長い人ですか?」(新八)

「私あの子なんか好きアル!ちっさいときはカワイイし!」(神楽)

「要約するとググレってことですか」(沖田)

「オメーさっきから丸投げしすぎだろーがよ!!!ちっくと黙れ総悟!!!」(土方)

「実際そうじゃねーですかイ。ただでさえ利口な口じゃねえ俺らが言えることなんて限られてる。ここア機械化の波に乗って現代技術の脳に頼るのが一番ですぜ」(沖田)

「学のねえ野郎共がへたに騒ぐより、機械に全てお任せってか。虚しいご時世だぜ」(銀時)

「だがまあ、あなたが間違ってもいねーっちゃいねーか。テメーらで調べてもらうのが一番だな」(土方)

「正確さもテメーらで保障しろイ」(沖田)

「やっちゃったよ。ガチでやっちゃったよ。どさくさ紛れに面倒なこと全部丸投げだよ」(銀時)

「んで、次は…『投稿してから手直し加えることはよくあります。逐一活動報告つてとこでお知らせしてるんで、時々見てね』……」(新ぼっつん)

「…ねえ、コレ殴つていい？ぶっ飛ばしてーい？」(神楽)

「ナメてんな」(土方)

「ナメてまさア」(沖田)

「『よくある』つてのがまた最低だな。いつぺんのつけたモンはそうそう変えるもんじゃねーぜ。そういうのこの世界じゃ“ご法度”つてーの知らないのかね」(銀時)

「…やっぱ、作者が直接出てこなくてよかったですね、うん」(新ぼっつん)

「だな。最後まで言いたいこと喋らしてやれるほど心広くなーからな、俺たち」(銀時)

「いや、生きて返してやれねエかもな」(土方)

「なんか面白そうだから私も参戦するアル！ほあたあああああ！
！」（神楽）

「ああー、ったくも…ほんつとにコイツらは……」（新ぱっつん）

「…なんか、えれーことになっちまってんな」（和葉）

「ほ、ほんと^^；この章、こんなに長くなる予定じゃなかったと思っけど…」（榊）

「最初はガタつきながらもまあうまいこといくかと思っただけだなあ。とどのつまりレッツ乱闘で、收拾つかず俺らがでる運びになったと」（和葉）

「最初は私たちでる予定なかったもんね…完全に休憩してた…」（榊）

「俺なんか耳にお通ちゃんの新曲、右手におはぎ、左手にCDでパ―フェクトタイムだったつーのに、いきなり呼び出しかかんだからよ…んもー、和葉ちゃん悲しすい〜うい〜」（和葉）

「まあ、私もほとんど寝起きなんだよね……」(栴)

「お、栴ちゃんもつかい寝る？俺の腕枕で」(和葉)

「…あの世でならね」(栴)

「いやん、栴ちゃんこーわあーい。和葉ちゃんに誘われる女なんて全宇宙さがしたって栴ちゃんだけなのにい」(和葉)

「大ウソつきが…」(栴)

「マジマジ、大マジよオ。俺ア山のごとく女に誘われても、自分から誘うことはナイんだからねん」(和葉)

「あー、はいはい。あんたとこれ以上話してるヒマはないんだってば。何のために私たちが駆り出されたのかわかんないでしょ」(栴)

「ま、これ以上ぐだぐだのばしても読者のレディ方に申し訳がたたねえしな。先進めるとすつか。お、こんなとこにさっきの書き置きが落ちてるよ」(和葉)

「ゴタゴタの中で新八さんが落としたのかな…」(栴)

「さてと……えーと、ここまで進んだんだよな。お次は……この話の粗方と若干のまとめみたいなき感じだな」(和葉)

「話の整理、って最初に新八さん言ってたもんね」(栴)

「んーと、まずこの話は、何故だか最初は明らかになんないけど、

榎ちゃんが大阪の商人たちに対する“龍神会”の被害に耐え兼ね、昔のツテを頼って万事屋をやっているという恩人の銀さんに相談に来たところから始まるワケね」（和葉）

「うん」（榎）

「突然久しぶりに再開した榎ちゃんの成長ぶりに銀さんは驚いて、あんまりにも榎ちゃんがプリティー&セクスイーに育っちゃったもんだから始めは誰だかわからないほどだった。榎ちゃんは万事屋さんの面々のハチャメチャなノリにやや戸惑いつつも、次第に親しくなっていくと」（和葉）

「神楽ちゃんとはもうすっかり打ち解けられました^^」（榎）

「初めは何かと遠慮する榎ちゃんだったが、銀さんの言葉に甘え、大都市江戸表を見物。偶然巻き込まれた騒動ではテロを企てた攘夷浪士たちを武装警察真選組が到着する前にあつという間に片付けてしまう。銀さんは涼しい顔をしてるけど、何も知らなかった神楽ちゃん、新八くんは榎の手前に瞠目。ここら辺、あとあと話の中で重要になってきそうですね、榎さん?」（和葉）

「私からは何も言えません」（榎）

「榎さんノーコメントです。」

そんで、やれやれちと疲れたなと手近な川原で一休み。夕暮れも迫り、さて榎ちゃんが帰ろうとすると、神楽ちゃんが一緒に大阪に行きたいと言いなさる。偶然何人が乗れる中型船で来てた榎ちゃんには二つ返事で快くオーケーし、わたくし和葉を電話でお呼び付けに
なられたと」（和葉）

「…そういえば、和葉電話したときどこにいたの？結構電話越しに騒がしかったけど…」（栲）

「…栲ちゃん。やっぱり都会まちはイーネ」（和葉）

「……………」（栲）

「で、夕飯時も近いし川原でいつまでもくっちゃべるのもナンセン
スってことで、和葉ちゃんの運転で一行は日本第二の都市、大阪へ
向かうのであった。めでたしめでたし」（和葉）

「こら、勝手に終わらせないの…」（栲）

「いや、なんかリズムで言いたくなっちゃった（笑）」（和葉）

「次の章からはちょっと時間をさかのぼって、また別視点からも描
いてくんだよな」（栲）

「そーそー。さて、作者さんはいろんなところにある伏線をこれから
全て回収できるんでしょうかねえ」（和葉）

「そこら辺は腕の見せ所、てやつだね」（栲）

「だな。んま、何とかなるっしょ、たぶん」（和葉）

「うん、たぶんね……………決して確実に、とは、言えない……………」（栲）

「いろいろと気になるところがある話ですなあ。明らかになってな
い部分もまだまだたくさんあるね」（和葉）

「真選組に訪ねてきたっていう人とか、まだ回想のワンシーンにチラッとしか登場してない潤のこととか……話はこれから、ですね」
(榎)

「相変わらず更新は意図的とも思えるほど遅いですけど、まあ、時間のあるレディ方は付き合ってやってちょうだいな。この和葉ちゃんに免じて」 (和葉)

「さてと……これで書き置きの内容は全部終わったね」 (榎)

「ふー、新ぱっちゃんの代役しゅーりょー。楽しかったあ〜。なかなかサマになってたっしょ？ね、ネ？」 (和葉)

「やけに嬉しそうにやってたもんね……」 (榎)

「進行役ってなかなか楽しいのな。俺ってばナレーションとかいけんじゃね？ネ？」 (和葉)

「調子に乗らないの ……あれ？ねえ、書き置きまだ続きあるよ？」
(榎)

「ん？あ、ほんと。なにになに……」 『告知』？ (和葉)

「告知って……お知らせみたいなの？」 (榎)

「んん〜と……」 『告知』この話は主に銀さんたちや攘夷の方に重きを置いたモンです。なんでまあ、真選組の方々の出番は若干なくなっちゃってるかもです。これじゃあ真選組がだーいすき！というアナタにゃ物足りない。てことで、この話が終わったら次は真選組中心のお話なんて頑張っちゃおーかなーなんて画策しておりま

す』…」（和葉）

「えええっ!?!」」（和葉&榊）

「あらあゝ…んなこと企ててたの」（和葉）

「何も考えてないのか、ちゃんと考えてるのか……」（榊）

「『この話更新しながら同時進行なんて芸当はできませんので、こつちが一段落したらと思ってます。まあ、もうぼちぼち製作進めたりはしちゃってるんですけどね（笑）』」（和葉）

「いつの間に…」（榊）

「もしかして、やたら更新疎かになってたのって、コレか?」（和葉）

「…なのかな……」（榊）

「やってくれるね、あの人も」（和葉）

「…ま、まあ、連載するのはこの話終わった後みたいだし…どんな話か、期待しとこつよ」（榊）

「期待が裏切られなきゃいいけどな」（和葉）

「真選組好きの方に」ご満足いただけたら、ね」（榊）

「『詳細はまた後日。それではまた』だつてよ。言うだけ言うってイイとこでトンスラかよ!。堪えないね」（和葉）

「…さ、さてと。これで一応、私たちの仕事は終わり、なのかな」
(栴)

「ていうか、ほんとはコレも銀さん方の仕事だったんだろ？俺ら二人が代役やって、読者のレディ方ご満足いただけたのかね」(和葉)

「いきなりの呼び出しだったからね……とりあえず、やらなきゃいけないことは全部したつもりだけど……」(栴)

「ま、この章に何かご不満がありや、俺のところに来てよ。サービスするから」(和葉)

「みなさん、来ちゃダメですからね」(栴)

「ん？栴ちゃんヤキモチ？他の女に優しくしてほしくないの？」
(和葉)

「違うよバカ」(栴)

「クスっ…素直じゃないところもかわいいよ。安心して、俺の身体はみんなのものでも、心は栴だけのものだから」(和葉)

「ありがとー、ありがとー。じゃあさ、この前ね、メンテナンスしてたら船の動力室の」(栴)

「ああ……、それはまた別」(和葉)

「心は私のなんでしょう。お願い、“和葉はん”」(栴)

「くっもおー、栴ちゃんったら……かわりに俺の身体で払……」(和葉)

「結構です^^」(栴)

第七部 始動？（前書き）

「…僕とどっちが強いのかなあ……ふふ、楽しみだね、小次郎」

第七部 始動？

「チツ……撒かれたか」

バズーカを片手に、これから戦地にでも赴くのか、といった重装備に険しい面々の真選組隊員。

彼らを引きつれる弱冠十八歳の真選組一番隊隊長は、長年追い続けている攘夷浪士をまたしても取り逃がし、舌打ちと共に毒を吐いた。剣の腕は隊内随一、にも関わらず、今日は今のところ一度も刀を抜いていない。代わりに黒光りする携行式バズーカが、独特の火薬の匂いを漂わせながら煙を吐いていた。

「まったく、相変わらず逃げ足の早えヤローでイ。…ま、しゃーねえ。オーイ、ここで解散だ。俺アテキトーに町ブラついて帰るから、先屯所戻ってな」

その一声で、辺りにくまなく鋭い視線を投げていた隊員たちがそれを切る。再び足取りを掴める気配もなく、隊を解散してふう、と肩をほぐしながら息をついた。

手近に自販機を見付け、汗ばむ陽気に首元のスカーフを緩めながら小銭を押し込む。

「……そういや、」

この太陽の登りきった昼日中では無意味な光を放つ緑のボタンをプツシュして、ガコンと音を立てて落ちた冷えた缶を取り出しながら、先ほどの万事屋での出来事を思い出す。ぷしゅっ、とコーラの缶が音を立てて開いた。

「桂のヤロー、何でわざわざ戻ってきたんだ？あのまま出てこなけりや、とつくに俺たちを撒けてたはずだ。おまけに大声まで張り上げやがって……まるで、自分に注意を向けようとしてたような………
…！！！」

口に付けた缶もそのままに、目を見開いた。

「そうか、あんやろ、ただ逃げるだけじゃつまんなくなってきたんだな！！俺たちをおちよくってたってーのかっ！！！！！」

缶をもった手がふるふると震え、今にも握り潰しそうな勢いだ。

まさか万事屋に真選組を踏み入れさせないがため桂がわざと注意を引き付けた、などという背景は露ほどにも浮かばないだろう。彼の声に、後ろで小銭を握り締めていた少年がジュースを買うことなく涙目で駆けていった。

「あー、ダリ。こつもあちーと何も考える気失せるぜい。テキトーに涼んでとつと屯所戻るか」

しかし、硬いスチールの缶がへこみはしたものの、この暑さの中ではスイッチは入らず、缶を片手に沖田はそぞろ歩きだした。

春の麗らかな空気など消し飛んでしまったある日の昼間。万事屋メンバーが江戸の町に繰り出す間の、別の側の動きである。

真夏、というには少し早い。

テレビは例年よりも早く梅雨入りすると言っていた。その言葉を信じるならば、このまわりつく湿度100%の蒸し暑さとはあともう少しておさらばだ。しかしながら、昨今の異状気象が叫ばれている中、その予報さえまとも信じることはできない。

「…これが地球温暖化ってヤツなのかねイ」

一昔前では物珍しかったこのワードも、今ではすっかり定着している。

自分がまだクソガキの、武州の田舎でやんちゃしていた頃は、この時期にここまで暑くはならなかった。時代が時代、田舎とコンクリートジャングルという差もあるのだろうが。あの頃は川の水も今ほどぬるくはなかったし、空気も綺麗だった気がする。

なんて珍しく昔のことを思い起こしながら、沖田はいつの間にか、長屋の並ぶ住宅街から活気の絶えない大通りへと出ていた。

「（人混みは一層暑さが増すな）」

手に持った缶が露ぶく。指先に僅かばかり伝わる冷たさがまだ救いだ。ちびちびと中身を口にして、喉を潤す。

「…ん？」

何の気なしに脇の寂れた駄菓子屋が目に入り、足がとまった。木造の古い店舗と掠れた看板が、歴史を感じさせる。両脇に迫るように建つコンクリートが、余計それを感じさせた。しかし実際沖田の目に留まったのは、その店内にいた“色”。

「……………」

仕事柄なのか。何かが匂った。

『 うんうん。わかるよ、それ！』

恐らく建て付けの悪かろう引き戸が開け放されて展ひらけた入口から中に踏み入り、半分をきった缶の中身を口にしながら、それとなく奥の小さなカウンターで話している人物と距離を詰める。“匂う”といっても、犯罪者のそれではない。目に鮮やかな淡い撫子の頭髮に、やや裾の切れた少し暗い青丹の着流し。自分とほぼ同世代と思える背格好。袖口から指先だけを僅かに覗かせ、裾はやや長い印象を受ける。

少々特異な出で立ちではあるものの、別段これといった異変は見受

けられない。何より、ここ江戸は全国各地、宇宙各地からモノと人の集まる都市だ。多種多様な人物がいて然るべきだろ^{しか}う。なら、沖田は何が気になり、わざわざ足を向けたのか。

「（……何か匂うな）」

一応は警察という職を勤める者のカンなのか。さらりと見過ごせな何か引掛かり、悟られないように気配を消して、適当に品を手にし客の一人を装いながら様子を窺う。

「んも、おばちゃんほんと面白いね」

「あら、ヤダわあ。僕ちゃんには負けるわよ」

他愛のない世間話に花を咲かせている様子。ますます、何ら変哲のない少年だ。しかし沖田は、ただの気のせい^で済ます気にはまだなれなかった。日常どこにでもありふれていそうなその光景を、じつと見る。

「そうね。ほら、これ持ってきなさいな」

「ええっ！？いいのっ？？？」

「いいからいいから。サービスよ」

カウンターのの上にどんと置かれた、使い込まれた風の暗い焦げ茶色をした木箱。中には細々（こまごま）とした茶色い品々。

「本当にありがとう〜！すごく嬉しいよ」

「喜んでくれたならおばちゃんも嬉しいわあ」

「でも、本当にいいの？」

「いいの、持ってきなさい^^」

店主らしき女性からその木箱の中身を受け取ったらしい青年は、それを肩に掛けていた、やや生地傷んでいるように見える麻袋に、そこそと入れはじめた。

「（…あれア……？）」

チラ、と見えた有名な某企業のロゴに、パッケージ。間違いない、それは大量のチョコレートだった。

「またいつでもいらっしやいね。僕ちゃんなら大歓迎よ」

「ありがとう、おばちゃん^^まだしばらくココにいるつもりだから、また来るね」

板状のものやらナッツ入りやら、バリエーション様々なチョコを入れて最初の時よりもかさの増した麻袋を肩に掛け、袋に入れなかった幾らかのチョコを手し、青年は朗らかな笑みを浮かべた。

『しばらくココにいる』

確かに彼はそう言った。“ココ”とは、かぶき町のことか。彼はどこか余所から来たのだろうか？

「…キナクセエ」

何か引つ掛かる。何かが違うのだ。手を振って店から出ていく彼を、

戸棚の影に隠れてやり過ぎす。しかし、この感覚の正体は、自分でもわからなかった。
店から出た青年は、ふんふんと鼻歌を歌いながら手のチヨコを頼張って、素知らぬ風に通りを歩いていった。傍はたから見れば、観光でもしに来たように見える。

「……やっぱ、ダリーヤ」

後をつけようかとも思ったが、やめた。

一番の理由は、この天候。過ぎしやすいものならいざ知らず、この天候のなかで対象に勘付かれず、かつ見失わない程度の距離を保ちながら尾行するのは、なかなか根気がいる上に体力を消耗するもの。端的に言えば少々面倒だ。指名手配犯や過激な攘夷浪士を捕縛する訳でもあるまいし、そこまでする気にはなれなかった。加えて、どうも何だが、今日は身体が重い気がする。

そして……

「…ちイと疲れちまってんのかね、俺ア」

最後まで何が引つ掛かったのか、わからなかったのだ。普段ならこ

んな感覚はそうない。自分でも、よくわからなかった。『疲れている』の理由に、原因のわからない身体の重さとダルさも含まれていた。

「やめだ。誰かさんに似ちまって、深く物考えんのは面倒だったらね
エ」

これだけ観察して自分が何が気になったのかもわからなかった。やはり、ただの気のせいだったのだろうか？行動力とやる気がゼロに等しい今の自分に、これ以上彼のことを考える気力はなかった。見ているだけでこっちまでアンニュイな気分になってきそうな銀髪頭の男を見習い、深追いはしないでおこうと、もともと用はない駄菓子屋から歩を外へ向けようとする。

「あら、お客さんかい？」

そのとき、カウンターの恰幅のいい女店主が沖田に気付き、陽気に声をかけてきた。

「ちょうどいい、さっきいた子にもあげただけど、よかつたらあんなも持ってくかい？」

そう言い彼女は、返事も聞かずカウンターの下から先ほどとはまた別の木箱を出してきた。

今度は幾分小さなその箱には、さっきのようなチョコレートがいくつかと、棒のついた飴玉やガム類など、よく駄菓子屋に並んでいそうなものが両手一杯と少しほど盛られていた。

「これは今日中にさばいちまわないともうダメだね。よかつたら持ってってくんない」

「金はいーのかい」

「いいわよ^^あんたもオマケしたげるわ さあさ、遠慮しないで」

あんたも。

さっきの青年も同じ理由であれほどのサービスを受けたのだろうか。店主の機嫌がすぐぶる良さげなところを見ると、きつと彼にも要因があったように思える。

「ありがたく頂くぜい」

「持ってきな持ってきな。あんた、いいタイミングに来たねえ」

「店主。ちと聞きてえんだが、」

木箱から菓子類を手にし、早速棒つきの飴玉を口に含む。

「さっきのヤツは、知り合いなのか？」

「いんや違つわよお。今日初めて来たお客さん。ちょっと話盛り上がっちゃって、甘い物好きだっというからうんとオマケしちゃったのよ。オマケに可愛らしい顔しててねえ」

「このモンじゃねエのか？」

「そつみたいよお？江戸には観光で来たって言うてたから」

「どこのモンなんでイ？」

「それは聞いてないわあ。でも、あまり訛りのある語り口でもなかったし、そう地方の子じゃないと思うけど」

確かに会話を聞いている限りでは、訛り声ではなかった。訛りは国の手形とも言う。京都や大阪といった上方の人間でも、また訛りの

ある人間がそれを消しているようなものでもなかった。

「そうかい。じゃ、ありがとうよ」

三、四個のチョコやガム類を片手で器用に指の間に挟み、手を振るようにして、店から出ていこうとする。

沖田の背中を、

『ああ、そういえば』

と店主の声呼び止めた。

「そういえば、あの子、『人を搜してる』とか言ってたわねえ」

「人を？」

「ええ。『ずっと人を搜してるんだ。ここで見つかったらいいんだけどね〜』って。深くは聞かなかったけど」

ふうん、と相槌をうち、手の菓子ポケットに入れる。

「随分昔からの捜し人みたいだったわねえ。話してるときも笑顔だったし」

「笑顔、か……」

捜し人の話を笑顔でできるなら、随分な時が経っているのは容易に想像ができる。

「……………」

何故か沖田の頭には、彼の笑顔が浮かんでいた。

『カコン』

中身の無くなつたスチール缶をごみ箱に放り込む。かわりにポケットに手をつ込み、先程得た菓子類からガムを探り出して口に含んだ。

居心地の悪い陽気に負け、もう帰ろうと足は真選組屯所へ向いている。

『今年に入り、江戸の人々の間で密かな人気があつた上方見物が、近頃急激なブームとなっております!』

ショーウィンドウの奥に陳列された大型のデジタルテレビが、近頃話題だという上方見物の特集を組んでいる。今年に入ってから、江戸っ子たちの間で上方見物がささやかに流行していたのは幾度か見聞きしていたが、今やその波は一部の天人にまで及んでいるそうだ。ガムで風船を作りながらウィンドウの前でしばし足を止めた沖田だったが、然して興味が無いのか、すぐにまた歩き出す。しかし、隣接した団子屋の客と店主の会話が耳に触れたとき、思わず歩調を落とした。

『んやーほんと、さっきの子可愛かつたわねえ。あたしもああい孫が欲しいもんよ』

『えらく人懐こい子だったなあ。ちとまけすぎちまつたかね(笑)』

『あたしが旦那なら同じ位したよ。にしても、あんな可愛い顔して甘いもの好きだなんて、女の子が放つとかないわね（笑）あたしもあと十年若かったら』

『何言ってるんでイ。女は歳とってからが盛りだぜ。しかしワシはどうもあの頭は好かんがなあ。イマドキの若いモンはああいうのが好みなのかね。奇抜な髪色じゃ』

甘いもの好き。人懐こくて、奇抜な髪色。すぐに彼が浮かんだ。

「（駄菓子屋の次は団子屋……食いもんに目がねエのか。どっかのクソアマみてーだな）」

特徴的なしゃべり方をするチャイナ服の女が脳裏に浮かぶ。が、気分が悪くなりすぐに頭を振って打ち消した。

「オヤジ、一本頼む」

「はいよ」

鼻をくすぐった芳ばしい香りに自分もそそれ、小銭を探る。頼んだ後で、ガムを含んでいることを今さら思い出した。

「（…あ、）」

目の前で若干黒く焼き目のついた団子が、艶やかな蜜を潜っている。どうしようか、まだ味が残っているのに捨てるのも…、しかし、目の前の串も捨てがたい……

「べらんめええい！！先に手え出したのはそつちだろつが、やい！！！！」

「ほざけカスがあああ！！オレの言うところが正しいんだよクソヤロウ！！！！とつとと失せんかいおんのらアアア！！！！！！」

沖田が迷っていたその時だった。長閑で穏やかなの限りだったなかに突如轟いだ、激しい男の割れた罵声。何事かと顔を向ければ、飲み屋らしいごちんまりとした店の店内から、バリントと派手な音を響かせて四散したガラス片と共に勢いよく椅子やら食器類やらが飛び出して、客と思われる男二人が躍り出てきた。通りにいた人々が小さな悲鳴をあげながら距離をとる。

騒ぎを起こした二人はどちらもかなり酔いが廻っているらしい男たちだった。フラフラと足元も覚束無いなか、顔全体に耳まで真っ赤にしながら互いに息巻いている。

「てやんでいべらぼうめエエ！！てめっ、言いがかりも大概にしるってんでいつ！！！」

「なアに言うかアアアア！！とつとと頭下げんかい！！コノヤロー、昼間っからやりあおつってえーのかアジジイ！！ああ！！??？」

まさに泥酔状態。まだ日も高々としているうちからこれだけ酔い潰れられるとは、やけ酒でもしたのだろうか。

にしても、酒絡みの揉め事はこの上なく処理が面倒なのである。これだけド派手にこじれていけば、数人が合力して、ともすれば飛び火することも覚悟して収めるよりは、刃物があった方が話は早い。そして今この場において最もこれの仲裁役に適任といえるのは、自ずとこの沖田以外に他ならないだろう。常に腰に剣を帯びることを許され、そして未成年ながらも、彼は（一応）公権力、警察権力を行使できる立場にあるのだ。恐ろしいことに。

偶然とはいえ、制服を着て帯刀した状態で場に居合わせてしまった。知らぬフリをするのは、ほぼ不可能だろう。心なしか通りの人々の視線が自分に集まっているのを感じながら、沖田は心のなかで溜め息をついた。

「オイオイ、一体え何の騒ぎでイ」

「あああ、？んだア、てめエエ！！関係ねー奴あすつ込んでろイ！
！！！」

ガラス片の飛び散る辺りへ向かい声を掛けるも、目の据わりかけている彼に猛反発を受ける。どうやら、沖田が真選組であるということとさえ理解できてはいないようだ。

揉めているのは、この沖田に怒鳴った冴えない中年風のくたびれたスーツを着た彼と、頭髪のほとんどが白く色変わっているべらんめえ口調の老齢の男。どんな理由でここまでなったかはわからないが、大体こういったケースは些細なことがきっかけとなっている場合が多い。

「……どーしようもねえな……」

こういう処理はこの上なく面倒臭い。
店内から顔を出した店主らしき老人に、取り敢えず話を聞く。

「ああ、あんた真選組かい……いやあ、参ったもんじゃ…店をこんなにしおって」

「何が理由でここまでなつたんでイ。相当荒れてやがる」

「それがなあ……あの二人は、何時間か前からうちで飲んでおつてな、気付いたときには意気投合して、互い気分よう語りちぎつとつたんじゃよ、さつきまで。じゃが、ちいと前に若いもんが店に入ってきてのう……初めて見る顔じゃし一人で来たもんで、珍しいと思つとつたら、二人の話に入っていつてなあ。どつちかの知り合いか何かかと納得したんじゃが、気付いたらその若いもんはいつの間にならおらんなつとつて、あの二人が揉めとつたんじゃ」

「若いもん？」

「ちょうどあんたぐらいの背格好じゃつたかの。変わった頭をしとつたなあ……確か名前は、か…なんじゃつたかな」

間違いない。彼だ。一体どういうことだ？これは彼のせいなのだろうか、それとも偶然か。しかし店主の話聞く限りでは、二人は揉める寸前まで意気投合していたという。まるで、彼のせいで二人が揉めたような構図ではないか。

駄菓子屋で初め見かけた時の違和感といい、彼は一体何者なのだろうか？ここまで“偶然”が重なれば、もう無視することはできない。

「おっと」

中年風の男がよるめき、沖田とぶつかった。男はふらふらと身体を大きくよろめかせながら、焦点が定まらなくなりかけている目で沖田を、それは鋭く睨み付けた。

「オウ、ガキイイイ!!!ここあテメーみてエなガキがいるとこじやね〜んだよ、とつとと失せんかオラアア!!!」

めちゃくちやに聞き取るのもやっとのように叫びながら、男は突然拳を振り上げようとした。右フックを沖田に見舞うつもりだ。瞬時に沖田は刀の柄に手を掛けて身構える。

だが、男のテレフォンパンチは避けるまでもなく大きく空振った。沖田との距離が正確にはわかっていないらしく、十分力を込めた拳は残念ながら届かなかった。しかし、酔いにも酔っている男は、自分の攻撃が沖田に避けられたと思い込んでしまったようだ。

「うをらてめええええ!!!避けてんじやねーぞウウ!!!男ならア逃げんじやねえ、齒あ食いしばれやアア!!!」

滅茶苦茶だ。酒とはこうも人を豹変させるものか。沖田に絡んだと思えば、今度はつつかけのようにかかどが潰れてしまっている革靴を、もと揉めていた老人に投げつけた。

争いは激しさを増して、もはやどうとも手のつけられない状況。通りは迷惑そうな表情の人々や、それ、いけ、と掛け声を送って囃す者、興味本位に集まってきた野次馬などで猥雑としてきていた。

「チツ……」

帰ろうと思っていたのにこんな騒ぎに巻き込まれるとは。もう刀を抜いてしまう方が早いのか？それともこのままばっくれてやるのか。

なんて邪心が芽生えたときだ。通りの向こう、この先の十字路を、見馴れた影が横切って歩いているのを見付けた。距離にして、おおよそ十メートルほど。締まりのない顔で、自分と同じく黒の隊服に身を包み、そいつは呑気そうに歩いていた。

「　　ついに、ついに例の新作のラケットが買える！最近全然余裕ねーけど、やっとこんだけひねり出せたああ…っ！よくやったあ、退！お前ならできると信じてたぞザキヤマあ！！」

財布を握りしめながら、誰が見ても分かるほど上機嫌な顔をしたその男は、以前スポーツショップで一目惚れしたバドミントンのラケットを買いに行く途中らしく、鼻歌まで聞こえてきそうな足取りで通りを歩いていた。誰も監察方とは思えない様子だ。

「…にしても、命が下ってから二日、さすがに時間がねえや……。やっそこさ上からお声がかかったと思えば、何か知らんけど副長は俺単体しか動かさないって言うし……ネタがネタだけに派手に動けねーのはわかるけど、今回の件、鬼兵隊が絡んでること以外ろくろく出てきやしねー…」

しかし、独り言は十分監察方のそれだった。二日前に土方から受けた命についてのことで、何かと納得のいかないところが多いものだった。その件について考え事をしようとした時、知っている人物が自分を呼ぶ声が聞こえた。

「おーい、山崎ー」

「え？」

突如呼ばれた山崎は、足を止めてキョロキョロと辺りを見回す。す

ぐに人だかりに目をとめ、こちらへ歩み寄ってきている沖田の姿を見つけた。山崎が即、嫌な予感を感じ取ったのは内緒の話だ。

「お、沖田隊長じゃないですか。一体、どうしたんで?」

「山崎。お前、暇だろイ」

「ええ!? いやっ、暇なことナイですよ、俺、いまからちよつと所用で出……」

「暇だよなア?」

嗚呼、もう、逃げられない。山崎は己の運命を悟った。同時に、この通りを歩いたことを、この場に接近したことを、己を恨んだ。山崎の第六感が、経験が雄弁に語っていた。この男のこの表情は、とてつもなく面倒であると。

「見ての通り、ついさっきその真ん中の男二人が派手におっぱじめやがった。店主によりゃ、二人共しこたま呑んでるらしい。後は任せたぜ、山崎」

「そ、そんなつ、沖田隊……」

「なんでイ?」

「……………」

何故だ。何も言い返せない。これ以上、何も言わせない無言の威圧。山崎が勝てるはずもなく、結局この揉め事の処理は、山崎が泣く泣く引き受けることとなった。否、そのままそろりと逃げようと思えば出来ないこともなかったのだが、何故だか履き潰された革靴が側頭部にクリーンヒットし、それをきっかけに揉め事に巻き込まれ、結果自分が折り合いを付けねばならなくなった訳だが。

『……………』

一連の様子を、物陰から丸い瞳が見ていた。ナッツ入りのチョコをカリッと噛み、甘みに頬をゆるめながら、彼は去っていく沖田を目で見送った。

「…僕とどっちが強いのかなあ……ふふ、楽しみだね、小次郎」

手元のナッツを、首筋から顔を出した小動物に与えつつ、意味深なことを呟いた。

第八部 敗北（前書き）

「やっぱり、それが全力なの？もあへトへト？だったら、ちょっと僕、シヨックかなあ……。あの人は君のこと、弱くはないって言うたのに」

第八部 敗北

堂々たる面構えの門をくぐり、ようやくと屯所に辿り着いた。その足でまっすぐ自室へ向かう。

「……………」

上着を脱ぎ捨てて言葉もなくふうー、と息だけ吐き、畳の上へぱたりと倒れこむ。それほど運動した訳でもないのに、案外この陽気は身体にダメージを与えていたようだ。火照りがなかなかひかず、いやにだるい。屯所に向かう足取りも、山崎と別れて（突き放して）少しもしないうちに、重いものになっていた。

「（…ばずつちまったかな…………）」

身体が重い。心なしか、頭がぼーっとするようないような…………

沖田はこの症状の原因に、思い当たる節ふしがあった。

「…昨日、の……………」

五月下旬。日中は初夏の陽気を呈しようとも、朝晩はまだ冷え込む。それなのに沖田は昨晚、湯上がり姿で髪も十分に乾かさないうまま、外気に触れながらうたた寝をしてしまったのだ。ぶるっと寒気を感じて目を覚まし、すぐに布団に潜り込んだのだが、もしや今日午前中この陽気のなかにいたことが、それに追い打ちをかけたのだろうか。

「へっ…ただ気だるいだけでイ……………何こたあねエ」

身体が重くだるさを感じ、少々頭が響かないでもないが、熱や喉の痛みや、まだいわゆる風邪の諸症状というやつはない。思えば今日は朝からもともと調子が優れなかった気もするが、病は気からという。風邪なんぞにかかってやるものか。

「総悟、戻ってたのか」

手にかかる吐息の熱さを感じつつ、遠くからこっちに向かってくる

足音が聞こえてきた。かと思えば、それはすぐ側で止まり、同時に低音ボイスが上から降ってきた。今のこの状態を、一番知られたくない相手。開けっ放しの障子から入ってきた土方に、うつ伏せていたのをなおだらけながら声だけで返事をする。もしかしたら顔色を見て何かしら気取られるかもしれない。顔は背けたままだ。

「ったく、ほんとにオメーはいつもいつもダラダラダラダラしやがって…」

「わざわざ人の部屋来て嫌味ですかイ」

「るせーよ。山崎知らねエか」

さがしてんだが姿が見えねえ、と言う土方。何も勘付いてはいないらしいが、それもいつまで続くことか。顔が火照りを増すことに、心拍もいつもより早まってきているのがわかった。

「ああ、山崎なら、街でミントンのラケットみてましたぜ」

「チツ……あんにやるー、帰ったらただじゃおかねエ……携帯にもでねーたアどういっつもりだ。もっぺんーから叩き直してやるか」

さり気なく手で顔を押さえてから何食わぬ顔で返事をすれば、土方からは盛大な舌打ちが返され、包み隠さず怒りをあらわにした。山崎がラケットの購入に向けて心躍らせていたのを知らずに適当に沖田は嘘を言っただつもりだったのだが、偶然にも、それは寸分違わぬ事実だった。哀れ山崎である。

携帯に出ないのではなく出られないことを知っている沖田は、静かに心の中で笑った。

「…ああ、それと、仕事持ってきたぞ」

「頼んでやせん」

「オメーに選択権ねーんだよ！！ちったア書類片付けろヤツ！！！！」

手に持っていた書類の束を半分キレながら机の上に叩き付ける。恐らくいま通りかかったのは、この書類を沖田の机へ置きに来たのだろう。毎日毎日多量の仕事に追われて^{いたずら}労いているというのに、一応は一部隊の隊長ともあるうこイツに日々目の前でだらけられては、もはや何かを言う気も失せるといふものだ。手伝ってやる気など甚だ起きない。

「とにかく、今日中にそれ、片付けとけよ」

用件の済んだらしい土方は、念押ししてすたすたと去っていった。まるで台風一過だ。

まったく、今日に限って書類の厚さはいつもよりポリューミーなような気がする。気分 of 優れないときは活字自体目にしたくないもの。書類整理などはなからやる気が起こるはずもなく、沖田はまた顔を伏せた。身体はなお火照ったようなままで、頭は働かない。いつもあまり使っていないけれど。

「……………」

もぞもぞと身動みじろいだかと思えば、例の人をおちよくり倒したようなアイマスクを手にとつて着用した。こんな時は、寝るに限る。きつと目が覚めたときには、身体も元に戻っているだろう。

「……スー……………」

ぼーっとする頭の端でそう考えながら、戸を開け放し、上着を脱ぎ散らかしたそのまま、沖田は即眠りについた。庭からの申し訳なさ程度の微風が、沖田の湿った髪を撫でた。

…なんだ、ここ……背景真っ暗でオマ。いつの日かもこんなあっ
たな……
おっと、場面変わりやがった……ここは、どこだ？こんなところ、知
らねえ……

『ハアツ……ハア……ツ……てめエ……』

…ん？ありゃあ……旦那か……？何怖えツラしてんでイ……

「……イ、……きる……そ……」

あれ、また場面が変わって……？……下のこの赤黒いのは、血か。誰
で、こんなへマやらかしたのは。

…そこに転がってんのは……木刀？……て、ことは……？

「　　オイ、総悟！！起きろッ！！！」

すぐ近くで降り注いだ怒鳴り声に、眠りから連れ戻される。不快そ
うに顔をしかめながら、アイマスクをずらし上げた。

「　　……なんですかイ……タイミング悪過ぎますぜ、土方さん」

「　　るっせエ、何がタイミングだ。眠りこけてただけだろ。こんな短
時間でマジ寝してんじゃねーよ、何度も呼ばせやがって。つか、頼
むからちよっとは仕事してくんない、マジで」

さっきのは、夢？にしては、やけにリアルだったような……
まるでスライド写真のような、断片的な映像。見えたのは知らない風景に見馴れた人物の銀髪。ぼやけた視界のなかで見えたその表情はいつもの締まりのないものではなく、ひどく険しいものにみえた。誰かと対峙していて、恐らくは刃を交えていた。
そしてすぐに場面が変わり、今度は地面に血溜まりが見えた。かなりの量で、血の持ち主は結構な深傷を負ったことだろう。その血溜まりと共に、白刃ではなく、木刀があった気がする。そう、よくよく見覚えのある、あの木刀だったような。

単純に考えれば、銀時が誰かと争い、窮地に立たされているような状況だった。あの血溜まりが銀時のものならば、いくら丈夫な銀時であれ、立ってはいられないだろう。目が覚めた今でも、まるで実際に見たように色濃く映像が頭に残っていた。
疲れていたからなのか。昼間のうたた寝にみる夢にしてはえらく縁起でもない内容だ。しかも夢にしては、やけにリアルで、現実味のあるものだった。銀時の身に危険が迫っているということなのか？

「……………寝覚め悪い」

まさかとは思うが、正夢にでもならなければ、と心の中で思う沖田を怪訝な眼差しで一瞥してから、土方は口を開いた。

「おーい総悟。起きてっか」

「やかましく騒ぐ誰かさんのせいでもろくろく寝た気分でもありやせん」

「そりゃよかった。だが、おちおち寝てもいらんねえみてーだぜ」

「？」

言葉に含みがある。自分を起こしたのには、何か理由わけがあるのか。言葉のかわりに疑問の顔を土方へ向ける。

456

「…客だ。お前に」

「客？」

「ああ。そりゃもう、美人が」

ニヒルに言う土方。美人の客？心当たりはない。

とにかく来い、と土方に急かされ、乱れていたスカーフを直し、上着を手にとって沖田は部屋を出た。

「客って、誰です？心当たりありやせんぜ」

小走りで土方に追い付き、上着に袖を通しながら肩を並べる。土方の顔は曇っていた。

「…オメーが呑気に寝てる間、真選組まっせんぐみに入隊希望ってヤローが来た。お前に負けず劣らず美人のな」

「…男ですよな」

「ああ。随分と男っ気がねエがな。刀も差さず丸腰の、着流し一枚で来やがった」

「俺に客って、どつういふことぢやア」

「会やわかる」

「？」

すたすたとその客のいるであろう方向へ歩いていく土方。寝起きであることもあり、沖田はいま一つ状況を飲み込めない。

「採用すんですかイ、そいつ」

「…お前次第、じゃねーか」

ますます話がわからない。そうこうしているうちに、目的地へ着いたようだ。

鼻を掠めた風の匂い。空の眩しさに若干目を細めるが、庭先の景色が目に入った瞬間、沖田の足と瞳が、ついでに呼吸も、ぴたりと止まった。眩しい光を食らった猫のように、目を見開く。意外な事態に直面した人がよくそうなるように、沖田は暫時足を止めて、ただ光景を凝視する羽目になった。

「ん〜、さあすがみんな、強いねえ〜」

耳に入る間の抜けた調子の、聞き覚えのある声。降り注ぐ日射しの

なか、揺れる撫子色の髪。裾の切れた暗い青丹の着流し。少々幼さの残る容姿に、不釣り合いな竹刀。そう、そこに居たのは、“アイツ”だった。

そしてそいつの前には、膝を付いた藤堂の姿。苦しそうに顔を歪め、頹くすぶれている。働かない寝起きの頭で、状況を理解しようとした。

「……………！」

「あのぼっちゃん、見た目のワリにや、なかなか腕が立つらしい。

原田が真っ先にかかったが完敗。藤堂もあのザマ。確かに力量だけで見れば真選組まけんぐみには惜しいくらいくらいのモンだが……て、オイ、総悟？」

「アイツが、俺に会いたいつつてんですかい？」

「んや、まあ、そんな感じ……っつーかオメ、あのヤロー知ってんのか？」

「別に。知りやせんぜ」

沖田の顔付きが変わった。さっきまでの寝ぼけ眼まぶたが嘘うそのように消えている。

『なっ、何なんだよ、アイツっ……！？なんつー速さしてんだっ！？』

『バカ強え…っ！…！さつきから負けるどころか全然よゆうだぜ！
！？』

『さつきの居合い、達人級じゃねえか！！？』

『何モンなんだ、あのガキ……！？』

周りに群がる隊士たちがざわざわと騒いでいる。なるほど、藤堂は居合いでとられたのか。原田とも一戦交えたらしいが、身なりは傷一つどころか、息があがってすらいない。恐らく圧勝だったのだろう。よくよく見知っている、あの銀髪の男とはまた別な余裕が、その青年には漂っていた。

「あああーっ！！もしかして…っ」

青年が沖田に気付き、ぱあっと嬉しそうに目を輝かせた。まるで遊び相手を手に入れた幼子のように、屈託のない晴れやかな笑顔だ。

「君が、一番隊の隊長さん、だよな？」

沖田のもとまでトトトつと歩み寄り、縁に立つ沖田を見上げて言う彼。

初めてこの距離でコイツを見た。色白の肌に、映える頭髪。くりりとした丸い瞳。あどけなさを感じる面立ちではあるが、背格好は沖田とさほど変わらない。ただ、着ている着流しが彼の容姿にはどこか不釣合いで、それが彼の印象を一層幼いものにしていた。

「初めまして。えっと、僕、八雲っています。八雲和葉。コツチは小次郎だよ^^」

彼が名乗ると同時に、首筋からひよこつと何かが顔を出した。小次郎と呼ばれたそれは、長い胴体と尻尾で青年の身体に張り付くように乗り、バランスをとっているらしい。その姿だけでみれば、恐らくはイタチ科の動物とみていいだろう。青年の肩に顔を乗せる形で、愛らしい黒い瞳を二人に向けていた。

「よろしくねっ^^」

同じく彼も愛嬌のある笑顔を浮かべ、すっと沖田に手を差し出した。

「…一番隊隊長、沖田総悟でイ」

意外にも沖田は、差し出された白い手に応えた。徹底無視でもするかと思っていた土方は内心驚く。隊士たちも同様だ。しかし、沖田の表情を見れば、決して歓迎などしていないことは誰もが一目でわかった。応えた手にだって、まるで力が入っていない。

「今日はね、えーっと、もう聞いた？僕が来た理由」

「真選組に入隊希望、って聞きやしたが」

「僕、一番隊隊長の座が欲しいんです」

手を戻した和葉と名乗る青年は、飴ちようだい、とでも言っているように、笑顔を崩さないまま軽い調子でそう放った。沖田の表情が、ぴくりと変わる。土方が自分に客だと言っていたのは、こういうことだったのかと合点がいった。隊士たちのざわめきが、一層大きくなった。

「…それア、俺に対する宣戦布告、ってことですかイ」

「そんなつもりはないんだけど、そーなっちゃうのかなあ〜?」

まるで武装警察に乗り込んで来たとは思えない。ペットまで連れ込んで、一体自分が何をしているのか、わかつているのだろうか。ふわふわとした雰囲気は、彼がここに居るのは場違いだとより一層感じさせる。

「俺を引きずり下ろして、自分が隊長になる為に、今日乗り込んで来た。そーいうことが」

「そおそお！そのとーり！^^」

『乗り込んだとか、そんなつもりはないんだけどねえ』と付け加える。

何とも、やっていることの割りには拍子抜けするくらい、あっけらかんとした雰囲気だ。本当に、この青年の意志で真選組に乗り込んで来たのだろうか。やる気満々の血気盛んな挑戦者なら、こちらも受けて立つといった気概で火花でも散らしてやるが、相手がこんな調子では覇気を出す気にもなれない。

「てことで、僕と勝負してくれませんか」

『 』
『 !!! 』
『 』

しかし彼が吐いた台詞は、どうも、恐らく自信と表現していいものに満ちていた。否、それがなければ出来ないような口ぶりだった。衝撃というのか、その場に何か走った。この、確かに人間性に難はあれど真選組随一の剣の使い手といわれる沖田に、見ず知らずの青年が真正面から勝負を挑んでいる。しかも、一番隊長の座を巡ってだ。場にいた全員の視線が、向かい合った二人に集まった。こやかに沖田を見上げる青年と、無表情に見下ろす沖田。ほんの刹那空気が流れたあと、僅かに口角をクイと上げたように見えた沖田が口を開いた。

「…おもしれえ。やってやりませア」

「っそ、そーごー!!!??」

まさか相手にするとは思っていなかった土方が逆に驚く。

いやいやいや、ちよつと待てよ。よもや沖田が負けるとは思いたくないが、しかし勝負ケンカの勝ち負けに絶対はない。直接口にごそしてはいないが、万が一にでも沖田が負ければ、隊長の座を退く。そんな条件が提示されている訳だ。そんなこと、させはしないしさせるつもりもない。だが、この青年が勝ってしまったえば、約束を交わした上で勝負に乗ったのだから待ったはかけられない。それを承知の上

で沖田は勝負を受けたのか。

「…だが、生憎俺ア起き抜けで身体がほぐれてねえ。今すぐには無理でイ」

「そつかあゝ…それは仕方ないよね。じゃあ、しばらくお預けかあ……」

退屈そうな素振りをして、竹刀をぶらぶらと振る青年。

まだ身体が整っていないのは本当だった。先ほどの仮眠程度の睡眠でも身体の火照りをだいぶとすることはできたが、あの気だるさは重くのしかかったままだ。頭に靄がかかったように、ぼーっとしてしまう。

青年が事の次第を見守っていた隊士の山に目を留めたとき、『あつ！』と、閃いたように声をあげた。

「そーだ！ねえねえー、総悟くん待ってるあいださ、誰か僕と勝負しよーよっ！」

沖田と手合わせ出来るまでの間あいの時間をただ待つだけでは退屈なのか、代わりに誰か勝負しないかと声をかける。

いきなり乗り込んできて、しかも沖田に堂々と隊長の職を退けとは何事だ、ガキにものをわからせてやれ、と、彼を快く思わない隊士や隊長たちの何人かが血気盛んに声を尖らせていた。その様子をにこにこと眺めながら、元居た場所に戻って竹刀を杖のように地面にトントン、とリズムカルに打つ青年。

「……さて、と。どーしやす、土方さん」

「どづもどづも……相手にすんのかよ、アレ」

「面白そうじゃねーですかイ。こんな珍しい展開、そうそうありやせんぜ」

「ハア………だと思った」

“面白そうだから”

そんな理由ひとつを行動源にとんでもないことを時たまやってくれるのがこいつだ。

縁側に片膝を曲げて残し、右足だけ投げ出して腰掛ける。まだトントン、と竹刀でリズムを刻む青年の前に、八番隊隊長の永倉が声援（青年への野次）を受けながら進み出てきた。

「んっ？しょーぶ、してくれるんだねえ」

杖のように剣先を地面に付けていたのを、柄を握り直して持ち変える。その様態は実に、剣を持つことに慣れていた。さあ、お手並み拝見だ。

「…それに、隊長の座をよこせ、なんて勝負ふっかけられて、黙ってられる訳ねーでしょう」

口調こそ普段と変わらぬものの、沖田の目は、真っ直ぐと彼を見据えていた。この時の沖田が脈動の度に響く頭に顔をしかめたくなるのをこらえていたのに、土方は全く気付きもしなかった。

「そつちからどーぞ」

あっさりと先攻権を渡し、身構えすらしない。緊張感はまるでゼロだ。

彼のことを快く思わず、既にイライラしかけている永倉は、普段よりもやる気に満ちて打ち掛かった。

「おおっとーお」

真正面からの打ち込みを、ひらりと身を翻してかわす。その動きには口に合わず余裕が見てとれた。めげずに永倉は、上段へと強打を続けて叩き込んだ。

「ふふん、やるねえ^^」

パシんつと響いた音。顔のすぐ横に迫った竹刀を、柄を両手で持った青年がニコニコとしたまま抑える。二人の力は拮抗らしい。鏝迫り合いの状況から互いにはね付けあうようにして、距離が離れた。

「ちよびつとは楽しめそーだね^^もうちよつとやる?」

どうやら、今までの相手のように即討ち取ってしまう気ではないようだ。何が気に入ったのか、永倉を相手にすることにしたらしい。

相変わらず顔から笑顔を絶やさない青年を、沖田はいつもと変わらない風に努めながら、しかし一切目を逸らすことなく見据えていた。

「…土方さん。俺、屯所に戻ってくるときに、アイツのこと見やした」

「ハア？本当か」

「ええ。初めて見たときに、なんか妙に気になりやしてね。しかもそのあと、帰る道中二、三度見かけたんでさア。まるで謀ったようにタイミングよく」

そいつが帰ってきたら乗り込んで来たんですから、驚いちまいやすぜ、と続ける沖田。ヤツの姿を見たときの沖田のあの反応は、そういう訳だったのかと土方は納得した。

庭では激しいやり取りがしばし交わされた。といっても、青年は心底楽しんでいる様子で、わざと決着をつけないでいるようだ。永倉が遊ばれているようにすらみえる。その表情も、いきり立っていた試合前と今とでは、辛いのだということが目に見えてわかった。

「…お前が帰ってきてしばらくしねえうちに、ヤツが来た。丸腰の着流し一枚で来て何言うかと思えば、いきなり『局長に会わせてくれ』だ。取り敢えず部屋に通して話聞いてやりや、一番隊隊長の座をくれてあの調子で抜かしやがってな」

「で、俺に話通す前に、原田たちが突っ掛かってっつってとこですかイ」

「そういつこつた。見事にこてんぱんだったがな。おまけに奴さん、居合いの武技まで心得てるらしい。ありやかなりのモンだ」

あののほんとした雰囲気の青年が達人級の居合いなんて妙技を持つているとは想像し難いが、土方が言うのだ。その腕は本物だろう。単身乗り込んできただけあって、腕だけは確からしい。それは先ほどの永倉とのやり取りを見ていれば、嫌でもわかった。何て速さで動きやがる。剣戟けんげきといい、身のこなしといい、素早さには目を見張るものがあつた。ちよこまかと猫のように不規則に動き回り、攻守自在。土方が、『どーするよ、隊長さん』とからかう口調で言いながら、煙草に火を点けた。

「……………しっかし、洒落になんねえな、こりゃ」

勝負の様子から一旦目を逸らした土方が、懐をまさぐりながら距離をとる。手にしたのは携帯。

「ああ、もしもし、近藤さん？非番の時に悪いな」

数回のコール音のあと、持ち主が電話にでる。連絡をとった相手は、今日は非番らしい近藤のようだった。煙を吐き出しながら、中庭をちらりとしつつ話す。

「……んや、実はよオ……いま、真選組に入隊希望ってヤローが屯所に来てんだが………や、そうじゃなくて………」

近藤を呼ぶまでもないと思っていたが、この状況では連絡を取らない訳にもいかない。少し考えたが、土方は概略を説明して、近藤に戻るよう頼んだようだ。

しばらく話してから通話を終えた。ついでに画面の時間を確認してから、携帯を懐へと戻し踵かかとを返して顔を向ける。目線の先、その時土方は、腰掛けているそいつの姿に初めて“異変”を感じた。

「……………」

さっきまで、真っ直ぐと顔を上げて青年を見据えていたはずだ。なのにいまは、俯いて、やや辛そうに顔をしかめているようにみえる。息も少々乱れ気味だろうか。何を考えているか読み取りづらいあの飄々とした雰囲気さえ影を潜めている。ヤツにしては珍しい姿だった。

「オイ、総悟？どうした、具合でもワリーのか？」

誰が見ても様子がおかしいのは明らかだった。しかし沖田は、土方が戻ってきたのを察知するなりすくつと顔を上げて、何でもないと
いう風な表情を作った。

「別に、何でもありません。気のせいじゃねーですかイ？」

体裁ていさいを整えた沖田が取り繕う。

言わずもがな、いまの沖田の調子は良くなかった。いまだ続く
気だるさ。去ったはずの頭がぼーっとする身体の火照りが、身体を
起こしたせいかぶり返してきてもいたし、頭は響いていた。しかし、
土方に調子がすぐれないことを悟られる訳にはいかない。もし知ら
れれば、きつとこの男のこと。恐らく青年との手合わせをさせては
くれないだろう。何としても、こいつにだけは知られたくなかった。
ああ、まったく、我ながら情けない。全て自分のせいだけに余計
不甲斐なかった。季節の変わり目にまんまと体調を崩してしまうと
は、らしくもない。気持ちと相反する身体に、沖田は苛立った。

「ほんと、何ともねーです。ちいとハラ下してるだけなんで」

「本当にそうか？」

確かに弱味を見せるなんてヤツのキャラじゃない。が、もし本当に調子が悪いならば、アイツと戦わせる訳にはいかないだろう。土方の考えは、まさに沖田の予想通りだった。

「ヤツに負けるなんてことにもなりや、俺が直々に介錯してやる。わかってんだろうな？」

「安心してくだせエ。生憎、俺の未来予想図にやアイツに負けることも土方さんに斬られることも入ってやせん。ヤ・ツ・テ・ヤ・ルの五文字だけですぜ」

いつもの憎まれ口を叩いて、澄まし顔で庭の様子に顔を向ける沖田。こいつのことはよくよく知っている。これ以上聞いてもきつと無駄だろう。

「…そーかい。ま、せいぜいボロ負けしねえように頑張るんだな。隊長殿」

「あ、ヤベー。手滑ってそっちに竹刀、じゃなくて刀いっちなまうか

もしんねー」

「抜かなきゃ刀は飛んでこねーだろうがよ!!!つかどこの刀飛ばす気だ!オメーのは部屋にあんだろ!」

「何言ってるんです。いつでも土方さんを始末できるように、刀物のひとつやふたつ常に携帯してますぜ。なんなら毒殺でもいいですが。青酸カリでいいですかイ?これもスタンダード装備なんで」

「よおし上等だ…… オメエを泡吹かせて二度と立てなくしてやる……」

嫌味に嫌味で返す姿はいつもと変わらない。このままこの調子でいってくればいいのだが、しかし現実には、そうもいかないらしかつた。

「(…チィ…………)」

心の中で沖田は歯をぎりぎり食い縛っていた。いま思えば、すべてがタイミングが悪い。こんな陽気の日に桂捕縛に出なければ。彼が訪ねてくるのが今日でなければ。そもそも、昨晚あのタイミングで眠気が襲ってこなければ、うっかりうたた寝などしなかったかもしれない。人間の性^{さが}、“たられば”を言っても何にもならないことはわかっている、後悔せずにはいられなかった。

現にこの身体では、負けることはないにしても、彼相手に善戦してみせる自信は正直なかつたのだ。普段なら喜んで勝負を受け、圧倒的な差をもって余裕綽々と彼をのしてやるつかとサディスティックの血が騒ぐところだが、いまの自分にその余裕がないかもしれないことが、悔しさに似た感じがした。こんなに面白いことはないのと。

「…ふん。ねえ、君って、ここで何番目くらいなの？ けっこー上？ 総悟くんとどれくらい差あるのー？」

戦いの手を止めてトン、とまた竹刀の先を地面に付け、何が気になつたのか問を並べる彼。永倉が肩でぜーはー、とやっと思をし全身ボロボロなのに対し、彼は勝負を始める前と何一つ、不自然なほどに様子が変わっていない。

「もー飽きちゃったあ。君の剣筋、読めちゃったしねえ」

笑顔で言い放った。辛辣な言葉を、全くそうと感ぜさせない笑顔でさらりとこぼす様は沖田にも思い当たる節があるが、どこか違う。沖田はサド心にそれをするのに対し、彼のこれは、まるで無邪気な子供が時折見せる残酷さに似たものだった。だからこそ、余計に心をつんざく鋭さを内包していた。彼はきつと、悪気がある訳ではな

い。まさに子供のように、ただ感想を述べただけなのだ。

「…言っじゃねえーか」

「筋が読めた、ですって。アイツ、そんな素振り見せてやせんでしたかね」

相手に向かって『筋が読めた』などと言えるのは、よほどの自信家か、よほどの秀才である。もし彼が本当のことを言っているのなら、彼は後者なのだろうか。

そして、くすっ、と口元をゆるませて、

君がもし上の方にいるなら、結構真選組まへんぐみって、大したことないんだね。

そう、付け加えた。

土方と沖田が、びっくり、と反応した。

「総悟くんは、期待通りだといいいんだけどなあ〜。
ねえ、そろそろ総 ……」

「オイ」

身体は平気ではないはずなのに、彼の言葉をぶつりと遮り沖田がすくつと立ち上がる。起きた立ち眩みも噛み殺して、庭へ降りて、永倉の竹刀を拾った。

「黙って、構えな」

上着を脱ぎ捨て袖を捲った沖田が、青年を見据えて言った。射竦めるなんてものじゃない。そのまま、射貫くような勢いで、真っ直ぐと彼を直視していた。彼の一言は、沖田のやる気を一息で起こすに十二分だった。

火照る身体を宥め、戦う前から乱れ気味の呼吸を、悟られないように鎮める。熱を帯びた視線が、余計その鋭さに輪をかけていた。流れる汗は、この陽気のせいにしては量が多い。幸い、誰もそれには気付いていなかった。

「あ、やっと勝負してくれるんだねえ！^^」

「ああ、相手してやりませア。それと、」

沖田の鋭い眼光もまるで臆する様子を見せずに受け流す青年。いや、気付いてすらいらないのか。それも、彼の子供のようところが影響しているのだろう。自分が威圧されていることにすら気付いていない。

「真選組が“大したこと”ねえかどうかは、俺とやりあってから言いな」

前述した通り、彼は真選組を愚弄するつもりなど毛頭なかった。けれど沖田の自分に対する視線と口振りは明らかに好意的なものではなく、彼は沖田の言葉で、ようやっと自分がまずいことを言ったのではと気付いた。

「もしかして、怒ってる？僕、まずいこと言っちゃったかなあ？」

「永倉のことはどう言ってもらっても俺ア結構でさア。だが、真選組のレベルがああだこうだ抜かすのは、まだ早えんじゃねーのか？ つってんでイ」

「ああ、んー、確かにそうかもしれないね。まだ、総悟くんとも十四郎さんとも、局長さんとも戦ってないもんね」

納得の素振りを見せ、ふんふんと頷く青年。

彼の言葉の一端を、土方は聞き逃さなかった。

「オイ、いま『十四郎さん』つったか、オイ」

「あれ？お名前、十四郎さんじゃなかったっけ？」

「何怒ってんですかイ、十四郎さん」

「るせエ、フツーに考えて合つてねエーだろうがよ、オイ」

「俺的にはばつちしでさア。十四郎さん」

「やかましわ！！！」

縁の上から横槍を入れる土方。女ならまだしも、男にまるで番いつがのような呼ばれ方をされたのは初めてだ。おまけに青年の言い方が、何だかやけに親しげな感じなのだ。彼の性格ゆえなのだろうが。敢えて具体的に表現するなら、新婚ホヤホヤ夫婦の妻が夫に言うそれと同じ響きであった。

「さてとお。それじゃあ総悟くん、始めよつか^^」

クスクスと沖田らのやりとりに笑みをこぼしてから、青年が竹刀を握る。

「お手柔らかに、とかナシだよ！お互い、絶対負けないうって感じだね」

楽しいという感情を隠しもせず顔に出しながら言う。加減はなし。いや、普段の沖田なら疼いただろうが、正直いまは、加減“できない”かもしれない。そんな余裕は、恐らくない。頭がぼーっとしてしまう。ズキズキと痛い。身体が火照って、頬は熱い。寝起きのように身体が重い。ほとんど怒りに任せて勇んでできてしまったが、どこまでも余裕そうな顔をしているこいつを前に、身体は予想以上に疲労していた。しかもそれを、周りに、特に土方に悟られる訳にはいかなかった。

「あ、ルールみたいなのある？僕は何でもアリ、とかの方が嬉しいけどなあ」

「どちらかが闘えなくなりや終了。それでいーだろイ」

「やった！それって、ほとんど何でもアリ、てことだよね？やっぱ勝負はそーこなくっちゃ」

嬉しそうに相好を崩して跳ねる。つくづく子供のそれを感じさせる人物だ。持っているものは竹刀よりか、キャンディーの方がよっぽど似合う。そしてそのアンバランスさこそ、その意外性こそ、周りの注目をより集めていた。

「んじゃ、宜しくお願いしまあーすっ　総悟くんが負けたら、僕を隊長にしてくれる？」

「あれこれほざくのは勝ってからにしな」

「…はい」

ぴしゃりと言われ、機嫌を損ねた様子もなく素直に返事する。むしろ、表情は愉しげだ。

ざわざわと相変わらず周りは騒がしかったが、沖田の耳には遠くきこえた。無風状態だったのが、すっと一筋、そよ風が吹いた。

「試合開始、だね」

頬を撫でた風を合図に、勝負が始まった。ふわふわと浮わつた青年の雰囲気は掴み所がなく、ペースを乱される気分がする。それだけでなく、その空気のせいでハラも読めなかった。沖田は静かに心のなかで頭かぶりを振った。しゃきつとしる。だってほら、すぐそこに、目の前に、

「っ……!!」

ふわつと流れた風が頬を撫でた。手首から肩にずしんと力がかかる。視界に捉えていた青年の姿が消えた。いま目の前には、深い赤茶の瞳。

彼はもう、既に沖田の目先三寸に居た。竹刀を受け止めた瞬間、思わず呼吸を止めていた。二人の間に交差している竹刀が、ミシミシと音を立てている。両足でのし掛かってくる力に強く踏ん張った。楽しげに口角をゆるませているくせに、何て速さで来やがんだ。

一瞬でこいつは、遠間とつまの距離から沖田に打ちいつてきていた。沖田がほぼ無意識に、反射的に竹刀を滑り込ませていなければ、竹刀の軌道は袈裟けさを捉えていた。実戦ならまだしも、竹刀打ちの勝負でこんな打ち込み方をしてくるなんて。

「あれえ、さすがだね^^防がれるとは思ったけど、まさか踏ん張れちゃうなんて、やっぱ違うなあ」

沖田が踏みとどまったことに嬉しそうに言う青年。こんな打ち込み、並みの隊士なら避けきれないか、受け止めたところで吹っ飛ぶだろう。まるで牽制されたような格好に、沖田は嫌気がさした。だってこんなの、挑発以外の何物でもない。勝負が始まって初っぱなの第一打目に、竹刀を弾く筋の訳でもなく、明らかに袈裟懸けの筋で打ち込んできたのだから。

「べらべらと口数の多いヤローだな」

「えー、また怒らせちゃってる？そんなつもりはほんと、ないんだけどなあ」

わざとなのかどうかはわからない。撥ね付けるように押し返して、青年が退き距離が離れた。

すぐに追い掛けるように沖田が中段に飛び込む。彼に退けをとらない速さで打ち込んだ。やはりこれまでの勝負を見てわかってはいたが、そう易々と打ちたい所に打たせてはくれない。竹刀だけでなく、身体の使い方もよくわかっているようだった。

一打一打打ち込む度、彼の攻撃をかわす度、受ける度に、頭が響いた。足元がふらつきそうになるのを何度か堪えた。

「さっ、さすが沖田隊長！」

「いけ、やっちまえ！」

目の前で繰り広げられるハイレベルな勝負を見守りながら何も知らない隊士たちがやんややんやと声を送るが、沖田の耳には遠く聞こえた。

「（身体が言うこと聞きやしねエ……長くは持たねえな）」

短期戦に持ち込もうと沖田はペースを上げるが、青年もそれに全く劣りなく、互いに譲らず序盤からハイスピードで竹刀を交える。その中で、青年の目がちらと隊士たちを見た。

「…よそ見る暇あるたア、ナメられたもんだな」

「ナメてるつもりなんてないよ。ただ、総悟くんは慕われてるなー
て思っ」

沖田が慕われている、というよりは、青年が敵視されている度合いの方が大きい気がする。

しかし何だろう。青年と手合わせを始めてから、沖田は彼の立ち回りに、何かを感じていた。土方でも、近藤でも、たぶん銀時相手でも感じることはないようなもの。よくはわからないけれど、何か、ヘンな感覚を拭えなかった。モヤモヤを抱えたままの気分だ。確かに腕はあるが

…

だが、余所事を考えさせてくれるほどこいつは甘くはなかった。打ち込み一筋一筋、一打一打に集中しなければ。さつきから思いもしないようなところに打ち込まれてきている。少し気を許せば、即KOだ。

「うんうん。さすがだね。期待通りだよ」

激しいやり取りが一端中断されて、試合が始まったときと同じ立ち位置で向き合い、青年は未だ涼しい顔をして言った。試合を始めておおよそ五分ほど。沖田が肩で息をしているのに、さすがに不自然すぎる。この立ち合いの前にも四人の隊士たちと連戦したというのに。沖田の体調が優れないということも考慮しても、彼の平然振りはおかしかった。

「でもさあ、正直、これくらいかなーって期待はしてたんだよ。なんていうか、期待“通り”っていうかあ……総悟くんさ、もつと強いよねー？」

挑発する口振りではなく、本当に疑問に思っているように彼は言った。いまの沖田が全力を出しきれてはいないことを見抜いたのか。彼なら、あり得えないことはない。困む隊士たちの野次が煩く響いた。

「あ、まさかまさか、手加減してる、なんてことはないよね??」

ハア、ハア、と乱れた息を整えながら、沖田が彼の言葉に顔を上げる。

手応えは全てあった。全くダメージを与えていないはずはない。いくら普段通りの実力が出せていないとはいえ、いつもなら相手も自分と同じほど体力を消耗していてもいいくらいに渡り合ったはずだ。なのに何故、何故コイツはこれほど平然としている？　だめだ、頭がまわらない。

「ん〜、でも、それだけ息があがってるところを見ると、加減してくれたって訳じゃなさそうだね〜。総悟くん、本気出してこれくらいなの?」

「ハアっ……………ッ……………」

「真選組で一番の凄腕剣士って聞いたんだけどなあ」

残念そうな顔をして竹刀の先を地面につけ、リズムを刻む青年。普段の沖田にこんなことを言えば、間違いなくタダでは済まない。

「……………言ってくれるじゃねーかい……………」

時折、辛そうに顔をしかめる沖田に、土方は勝負が始まってほどなくして気が付いた。内心落ち着かない心持ちで勝負を見守っていたのだが、縁側で様子がおかしかったこともあり、沖田の動きについてもよりキレがないことに早い段階で気付いたのだ。

「（チツ……………あんにやるー、何が腹下しただ……………ボロボロじゃねーか。あんなの、ヘタすりゃ山崎でも勝てちまうぞ。一体どーなってやがんだ）」

ただでさえ負けず嫌いなアイツがあれだけ辛そうにしている。あんなふざけたヤローに何故ここまで追い詰められている？認めたくはないが、ただならぬ事態だった。サドパワー全開でじつくりと反応を楽しみながらなぶり倒す姿が容易に浮かぶのに、今の姿は、まるで劣勢ではないか。

「ったく……」

オイ総悟、どーしたア？そんなヤロー相手に何手こずってやがる」

聴こえていないのか、または無視されているのか、沖田からの反応はなかった。まるで口出しするなどでも言っているようだ。

じれったい気分だったが、他人の勝負に割り込むほど野暮なこともない。それに割り込んだところで突っぱねられてしまうか、もしかすれば、さらに状況が悪化してしまうことだってあるかもしれない。何よりこれは、アイツが望んで始めた試合だ。迷ったがそう考え、開きかけた口を閉じて、土方はまだしばらく様子を見ることにした。

いま思えば、この選択は間違っていたのかもしれない。

「総悟くんは勝つたらさあ、僕に隊長、譲ってくれる？…あ、ごめんごめん。こういうのは、勝ってから、だったよね」

疲れを知らないかのように、青年はトドメをさそうと勝負が始まったときと変わらない速さで沖田に迫る。土方は思わず、沖田の名を叫びかけた。

が、青年の動きにあわせて舞った土埃がきれたそこには、半端でない力のかかった彼の打ち込みを、どうにか受け止めた沖田がいた。

「ッ………」

「あつれれえ、やつぱ速いね！正直、もうもらったと思ったんだけど。よく筋読めたねえ^^さすがさすがあ」

“よく筋が読めた”

土方は最初、よくわからなかった。筋を読むもなにも、単純明解なただの振りかぶりだったろう。だが、すぐに気付いた。彼の打ち込みは、ただの振りかぶりではなかったのだ。まさか。沖田の様子に気がいつてしまっていたとはいえ、彼の剣筋を見切れなかったというのか。

彼は一度、竹刀を上大きく振り上げながら沖田に叩き入ろうとした。しかし今の沖田の体勢は、それを防いでいる格好ではない。下からの打ち上げを、上から押さえるような格好だ。つまりヤツは、数メートルの距離を一瞬で詰め、上に振り上げた竹刀を、沖田に当たるギリギリのところまで鼻先を掠めながら一気に降り下ろし、すぐさま返して逆袈裟に仕掛けていたのだ。

何て速さだろう。もし、今のが実戦で、彼が敵だったとしたら。竹刀ではなく真剣で差して向かい合ったとき、今のような攻撃をされたら、果たして自分は彼の刃にかからないで済むのだろうか？しかもこれが、彼の実力のほんの一部だとしたら　いや、いまはそれどころではない。

「咄嗟には受け止めるので一杯だった？まあ、無理ないよねえ。そんなにへとへとなんだもん、受け止めたことの方がすごいよお。やっぱり一番って、言われるだけはあるね　僕、感激しちゃった　でも総悟くん、こっからどーする？もし試合じゃなかったら、コレ、ピンチってやつだよな」

「…同じこと何度も言わせんじゃねえ…べらべらと、うるせえつつってんだろイ…ッ…」

体力と気力の残り僅かな状態で沖田は機転を利かせ、全く力を保って青年の竹刀を受けたまま、ふつと虚を突いていきなり彼の右側へ滑り込んだ。ぎりぎりと力をかけていた沖田がいきなり目の前からいなくなり、青年は意外なほど呆気なく、大きくバランスを崩した。そこへすかさず追撃を叩き込む。

「おわつと！…！…つふ、危ない危ない。やるね、総悟くん　けっこー、危なかつたよお」

止められた。

完全に死角からいれたはずの竹刀は、残念なことに高く乾いた音を響かせた。

もう、限界だ。試合の始まる前から既に身体は重く、頭は熱にやられていた。それでもいつもと変わらない動きをしようと無理をしていたのだ。ほとんど体力はもう残っていないに等しかったし、視界は歪みかけてきていた。働かない頭を働かせてこのフェイクを仕掛けたが、まだ彼と渡り合うには、沖田の身体は悲鳴をあげていた。

「でもやつぱり、それが全力なの？もぉへトへト？だったら、ちょっと僕、シヨックかなあ……。あの人は君のこと、弱くはないって言うてたのに」

あの人？一体、誰のことだろう。けれどこのままじゃ、本当にコイツの言う通りになってしまう。こんなふざけたヤツに、自分は負けるのか？

「まあ、人の噂は信じちゃいけないっていうよねえ、うん。ごめんだけど、総悟くん、今日から僕が一番隊の隊長さんするね^^」

なに調子のいいこと言ってんだ。だけど、もう、身体が言うことをきいてくれない。いまずぐぶっ飛ばしてやりたいのに。まだまだ余裕そうな顔をしているコイツと、これ以上やり合うなんて

「総悟!!」

「いままで、お疲れ様」

土方の怒鳴り声と、その声を最後に、沖田の意識はそこで途切れた。

第九部 見えない目的（前書き）

「あ、ろ…じゃなくて、和葉だよ。八雲和葉」

第九部 見えない目的

「ひでー熱だ。しばらくは安静だな」

場所は局長室。沖田を部屋に運んだ土方が戻ってきた。

「ただの風邪だろ。バカは風邪ひかねーつつうが、珍しいこともあるもんだ」

「そうか……」

安堵したような、でも心配そうな微妙な声を返した私服姿の近藤の向かいには、心なしか、同じく心配そうな面持ちに見える青年が正座で座っている。

青年との激しい立ち合いの終盤、沖田は意識を手放した。しかしそれは、青年が最後にとどめの一打を決めようとした寸前のことで、彼の打撃を受けて倒れたわけではなかった。積もり積もった疲労が遂に限界に達し、ひどい熱に沖田は倒れてしまったのだ。沖田の目が虚ろになったかと思えば、ふっと身体が脱力してしまったのを目の前にした青年は、はたと攻撃の手を止めた。困んでいた隊士たちが沖田に駆け寄り、青年に喰って掛かった者は土方が制した。

ちょうどそのごたごたのなかようやくと近藤が到着し、何とかその場を収めて今に至る。

倒れた沖田と、竹刀を手にした見馴れぬ男の姿を目にした近藤が自然の解釈をしてみまい、肝を潰したのは言うまでもない。そして土方がその場と近藤を収めるのに少々とは言えない手間と時間を要したのもご察しの通りである。

「いやあ、驚いたよ。まさかうちの総悟がやられたんじゃないかかってな。まあ、風邪なら仕方ない。タイミングが悪かったってやつだな」

沖田が実力差で負けた訳ではなく、青年が殴り込んできたのも悪意からのものではないとわかって、上機嫌の近藤。表情は柔らかだ。

「総悟くん、体調悪かったんだねえ……だから、動きがよくなかったんだ。なあるほどお」

試合のときの様子とは打って変わって残念そうに肩を落とす青年に、土方からかい摘まんだ説明しか受けていない近藤が口を開く。

「なに、そう肩を落とすことはない。奴ア風邪なんかで寝込むようなキヤラじゃねえからな。すぐ復活するさ(笑)」

「寝込んでんだろーがよ現在進行形で」

「まあ、君が気にすることじゃない。アツハツハ」

男らしい笑い声をあげて近藤は続ける。青年が来てからのことを何一つ知らないのだから近藤に憤っても仕方ないがなといえそうなのだが、土方は溜め息をついた。

「それで、えっと、君がうちに入隊希望っていう……」

「あ、ろ……じゃなくて、和葉だよ。八雲和葉」

「和葉くんか。うむ……うちの奴らには、全勝したんだってな」

「うん」

「一番隊の隊長がやりたいんだって？」

「そーだよ。総悟くんに勝ったら、譲ってくれる約束だったの」

近藤は戸惑った顔で脇の土方に視線を向けた。

いくら体調が優れなかったとはいえ、それを押して勝負に応じたのは沖田。しかも、勝負は土方や他の隊士たち立ち会いのもとで行われ、残念ながら、沖田が優勢であったという訳ではなかった。青年のここに来てからの振る舞いを考えても、きっと当然という顔をして隊長の職を主張するだろう。土方はそう思っていた。

しかし、実際は違った。

「でもいや」

「へ？」

予想外の言葉に、思わず間抜けな声を返す近藤。土方も顔付きが少し変わる。

「だって総悟くん、ようは全然実力出せてなかったんでしょー？そんなの、僕勝ったなんて言えないよ」

「…そ、それは…つまり……」

「まだ隊長さんさせてって言うつもりはないよあ」

『まだ』という言葉が引つ掛かりつつも、意外な展開に二人は驚くと同時に内心安堵した。

だがなぜだろう？いきなり単身乗り込んできて圧倒的な力量を示し、宣言通り、こんな形であれ沖田に負けはしなかった。隊長をさせると言ってきそつなものだが、彼の考えが読めない。目的は何だ？

「じゃあ、隊長の話は諦めてくれんのか？」

「んー、そうゆう訳にもいかないんだけどねえ」

どこか思案顔をして否定する。となるとやはり、再挑戦を挑むつもりだろうか。

「まあ取り敢えず、総悟くんが元気になってから、かな？」

「どうしても一番隊の隊長がいいのかい？他のじゃダメか？」

「ああ、それも楽しそうだねーっ」

土方が『近藤さん』と、諫めるような声をする。他の役職だったら本当に入隊を許可しかねない。

「わかってるさ、トシ」

土方の言葉にそう返した近藤だが、土方の顔色は優れなかった。

「……さて、どーしたもんかな」

「総悟が回復するのも、一日二日じゃあさすがに無理だろうからなあ……」

土方が呟き、近藤も腕を組んだ。「うん……」と口をとがらせて青年も唸る。よほど沖田を目当てに訪ねてきたらしく、他の隊士には興味がないのだろうということが改めて確認できた。というより、自分よりも力量のない者にはあまり興味がないらしい。

三人がそれぞれ言葉を切り、暫時の空白が流れる。その時、閉じられたこの部屋の奥の奥、正確に言えば、障子戸の反対側の僅かに隙間の開いた襖の奥からは、異常なまでの殺気だった空気が漂っていた。明らかにそれは青年への拒絶を物語っていて、青年が部屋へ招かれてからずっと熱い視線が送られており、土方はそれに気付いていながら触れず無視していたのだが、気付いている人物はもう一人いたようだ。

「じゃあ、取り敢えず今日は僕帰ろっかなあ。ほんとほ、十四郎さんにも勲さんにも相手してほしいけど、楽しみを一気に楽しんじやうのももつたいないし。今日は総悟くんと戦えただけでよしとするよ」

ちらつと僅かに開いた襖の間隙かんげきを微笑と共に一瞥して、脇に置いてあった麻袋に手を伸ばそうとする。気付かれているとは思っていなかった隊士たちが僅かにたじろいだ。無論、近藤は殺気だった隊士たちの視線を唯一全く感知していない。

「オイ待てよ。テメーにやいくつか、聞きてえことがある」

席を立とうとした彼を、土方が鋭い声音で引き留めた。もちろん、このままかえす訳にはいかない。

「んー？なあに？」

存外素直に応じ、麻袋に伸ばした手を引っ込める。
土方は真っ直ぐ、もう一度座り直した彼を見据えながら問うた。

「…まず、テメーが総悟にこだわる理由はなんだ？狙いは役職じゃなく、総悟か？」

「ああ、それはねえ……」

再び腰を据えたのを見て襖の奥の機嫌がより一層悪くなる。今にも襖を突き破って乗り込んできそうだ。

確かに、青年はここに来てからというものの、一番隊隊長の役職、というよりは、沖田自身にこだわっているようにも思える。

「えつとお、総悟くんがすごく腕利きつてきいたからだよお。天才剣士とかいわれてるくらいだって^^僕、強い人と戦いたかったんだあ」

なるほど、あれだけの手前なら理解できる言い分だろう。こういう考えを企てる者は、一昔前なら珍しくなくとも、いまのご時世ではそう多くはないが。侍と名乗る者も多くが姿を消し、いまやこの青年に並ぶほどの腕のある戦い手など、探さなければ見付かりはしないかもしれない。

「どうして真選組なんだ？腕試しってんなら、他にもいろいろあるだろ」

「んーっと、この前テレビでね、バズーカとか戦車とかめっちゃくちゃやってるの見て、真選組っておもしろそうだなあ〜と思ってそれで腕もそこそこあるってゆーから。どうせなら楽しいほうがいいじゃん」

土方は頭を抱え、近藤は苦笑いした。興味を持ってもらったのはありがたいが、そんな理由では逆に複雑だ。

「あんたの素性を教えてもらおうか」

「自己紹介ってこと？改めてえ、僕の名前は八雲和葉です。好きな物は食べ物で、嫌いな物は刺激物と〜……口だけの人は好きじゃないかなあ。趣味は食べることだよ」

「ほお、食いものに目がねえのか！俺もよく食べるヤツは好きだぞ」

「わあ、勲さんほんとあ〜っ？」

「食い付くところかよ」

どうも波長があうのか、変なところで息が合うらしい二人。このまま近藤がこいつを気に入って、隊長ではないにしろ是非真選組へ、なんて運びになりかねない。それだけは勘弁だ。

「随分と腕が立つみてえだが、どこで経験積んだ？道場モンの筋じやねえな」

「えつとねえー、僕の父さんはすごくケンカが強かったんだ。だから、僕も小さい頃からいろいろ仕込んでもらったの。殴るのはキライだから、僕は剣術にしたけどね」

「お父上は武芸に秀でておられるのかい？」

「うん、そりゃあもう、すごく強かったんだよお！父さんが負けたことなんて、僕一度も知らないもん 戦いのプロだから！」

「トシ、そんなに和葉くんは強いのか？」

青年に対して、敵意どころかやや好意的らしい近藤。病を押して勝負に応じた沖田を易々と倒したということをおぼろげに忘れてはいないだろうか。あの、沖田をだ。

「ああ、強いんじゃないか？ なんだって、うちの総悟を倒したくらいだからな」

「おお、そうだな！ いくら風邪気味だったとはいえ、総悟に余裕で勝つたらしいじゃないか」

「それはほんと、総悟くんの風邪が酷かったんだよお。総悟くんが調子のいいときだったら、わかんないよ」

「謙遜することはないだろう。総悟の他にも何人かうちの奴らとやり合ったらしいが、全く傷一つ付いておらんところを見ると、君の実力は相当なもんだろう」

「もー勲さんてば、上手だねえ〜っ まあ、総悟くん以外の人たちは話にならなかつたんだけど」

…何和んでんの。と呆れる土方。むしろ敵くらいの相手にこうも愛想よくできるとは、さすがお人好しの近藤だ。

「（そこが良くもあり、悪くもあんだよな……）」

口には出さず心の中でもらす。今に始まったことではない。

それにしても、だ。本当にこいつは一体どういふつもりなのだろう。

前述したが、単身乗り込んで来てあれだけの力量を見せ付け、最初から沖田を名指しで勝負を挑んできた。勝てば沖田から隊長の座を貰うと堂々と宣言し、そしてその自信通り、終始優勢に立ち回ってもみせた。彼の実力だけではないにしろ沖田が倒れたとき、彼にしてみれば、勝利を主張してもよかつたはずだ。自己管理もできず、しかもそれを押して応じた勝負に負けた。勝った自分が隊長だ、と。しかし、彼は沖田が倒れたとき、はたとトドメをさそうとし手を止めた。そして先程、沖田に勝ったとは言えない、とはっきりと言って、隊長の職を乞うような素振りなど見せなかった。

談笑する彼の和やかな表情を見るが、どうも何だか腑に落ちない。もっとも、真選組のドンパチ騒ぎを見たことその他に、沖田の腕の評判を聞き付けて訪ねてきたところをみるに、強者つわもの相手なら非常に好戦的な嗜好の持ち主なのだろうとは考えられるのだが……

「へえ！じゃあ、勲さんと総悟くんと十四郎さんって、真選組ができる前からずうっと一緒にいるんだあ」

「ああそうだ。総悟なんか、こんなガキン頃から面倒みてるからなあ」
「あ」

「すごいっ！」

「オイ近藤さん。あんまべらべら喋んじゃねーぞ。まだそいつのことは信用ならねえからな」

「いいじゃないか、トシ。総悟に敵うくらいの子だぞ？隊長じゃなくてもいいなら、俺はこの子の入隊を考えてもいいと思うがな」

やっぱりな……予想した通りのことを言いやがる。

土方がそう思ったその時、突然、脇の襖が派手に吹っ飛んだ。先程から殺気が漂っていた、あの襖だ。遂に様子を覗き見ていた隊士たちが近藤の言葉にキレてしまったのだ。

「局長オオオオオオ!!!本気ですかっ!!!?本気でコイツを真選組に招き入れるおつもりっすか!!!??」

「俺は反対ですよッ!!!ぜっつってエー!こんなヤツ断固反対っす!!!」

「副長!!!副長もコイツの入隊に賛成なんですか!!!?」

大勢の隊士たちが部屋に流れ込み、青年を指差しながら敵意を包み隠さず剥き出しにする。まあ、無理もない反応だろう。近藤が試合に立ち会っていれば、きっと態度も変わっていたはずだ。

「…近藤さん。俺もたとえ一隊士としてっつてんでも、素直にイエスとは言えねえ。それに、総悟が黙っちゃいねーだろ」

「…そ、そうか…お前たちがそこまで言っなら…」

予想外の反応にうろたえる近藤。

一連の流れに、くすつと面白そうに笑った青年が口を挟んだ。

「あはは^^みんな安心して。僕はね、総悟くんに用があるんだあ。だから、総悟くんが元気になったら、もっかい会いに来るよ」

そう言い、彼は麻袋を手を取った。

すくつと立ち上がった彼は、やっぱり笑顔のよく似合う、どこにでもいそうなあどけない男の子だった。

「今度は、十四郎さんや勲さんも、相手してね^^」

遊ぶ約束を取り付けるような物言いと、沖田の一早い回復を願う言葉を残して、隊士たちの槍のように鋭い視線を涼しい顔で受け流しながら、彼は部屋を出ていった。

「んやぁトシ、和葉くんは実に可愛らしい子だったなあ！お前の電話聞いたときは一体えどこのどいつだと思ったが、なかなか良い感じの子じゃないか」

青年が帰り、隊士たちを突っ返して静かになった部屋に向かい合って座る。彼をお気に召してしまったらしい近藤が、愉快そうに言った。

「だからよ、近藤さん……」

本当にこの人は…

「…あいつのことはどうも気に食わねえ。近藤さん、頼むから用心しといてくれよ」

「ああ、わかってる。カンの働くお前がそこまで言うんだからな。けど、何がそんなに気になるんだ？腕も立つみたいだし、俺は良い子にみえたぞ？」

確かに、一見しただけでは感じの良い、可愛気のある好青年だ。自ら入隊を希望し、しかも腕も確かとあっては、是非と招きたくもなる。だが土方は、何か納得がいかなかった。

「…わかんねえ。けど、なんか引つ掛かんだよ。ヤツの剣筋だってそうだ」

「剣筋？」

相変わらずの、射抜きそうな鋭い双眸を光らせて言う土方。

「剣筋がどうした、そんなにヘンなのだったのか？」

「んや、へんつつーか……」

今思えば、彼の剣筋も少々、いやかなり引つ掛かるものだった。

「ヤツの剣は、道場モンでも流派モンでもなかった。かといって、俺たちのようなもんでもねえ」

「となると、我流か？」

「ああ……ヤツあ親父に習った、つってたが、もしそうなら、とんでもなく荒くれモンだったんだろーな」

「ケンカが強かった、とか言ってたが……」

「……アイツの剣筋……メチャクチャだ」

『？』の浮かぶ近藤。沖田と張り合う程の腕だというのに、剣筋がメチャクチャとはどういうことだろう？そんな基本もなっていないような輩に、沖田は負けたというのか？

「け、剣筋がメチャクチャって、どういうことだ？何で総悟に勝て

「たんだ？」

「人のこと言えた義理じゃねーが、アイツのは基本もクソもねえもんだった。型も技も全くなく、ただ相手にダメージを与える。決まった構えも骨組みもねーし、規則性もほとんどなかった。本当に……ただ相手をのす、それ以外の要素が皆無の……」

「……………」

「……見た限りじゃ、精度もとても高いとは言えねえ。狙いも甘い。全体を通して粗雑で……言わば力押し。これだけじゃ、フツは総悟にこてんぱんにやられてたろ。……ところがだ」

それでも沖田を圧倒した理由。そう、これのせいで、あのメチャクチャとも思える太刀筋が逆に見切るのを難解にさせていた。

「ヤツの動きは全てが、とんでもなく速かったんだ」

「……速い？そんな速エのか。剣がメチャクチャで、なのに速エなんて矛盾してやしねーか？」

「ああ、だから総悟がすぐ攻略できなかつたんだよ。攻めも守りも筋にパターンがなくて突拍子な動きしやがんだからただでさえやりにくい。そんであの速さで動かれちゃ、なかなか辛えぜ」

沖田ならわからないが、少なくとも自分には、速さだけで言えばヤツと同じレベルに並ぶのはきつと無理だろう。それほど、ヤツの速さだけは抜きん出たものだった。第三者の視点から見ていて、時折剣閃けんせんを見失うことさえあったのだ。言うなれば、人外の領域といつても過言ではない。いつぞやかに戦った柳生家の神速と謳われる剣の使い手も、名の通りの代物であったが、それとはまた別な次元での素早さであった。熱に浮かされた沖田が筋を読みきれなかったのは、むしろ当然といえるだろう。もとい、これほどの熱を出しておきながらあれだけの動きだったのだ。

「そうか……随分と変わった子もいたもんだなあ。あの若さでお前にそこまで言わせるとは……俺もあの子の剣を見てみたいもんだな」

「心配せんでも、あちらさんからまた出向いて来てくれんだろ？ま、総悟もやられちゃったことだし……気長に待つとするか」

彼は沖田に用があると云っていた。強者を求めるなか沖田がやり手だという評判を聞き、テレビで目にした真選組のやりたい放題に興味を持ったと。

沖田が体調を崩してさえいなければ、ここまでなることはなかっただろう。わざわざ非番の近藤を呼び戻すことも、隊長格の半数をやられることも。

…にしても、彼がやり手であるのは、沖田を呼びに行く前に原田が一瞬で下された時点で気付いていた。沖田の調子がおかしかったあ

の時、無理にでも止めていれば、ヤツも倒れずに済んでいたかもしれない。自分が見ている前で、アイツが敵を前に膝を付くことになったのは、自分の責任でもある。

「…近藤さん。すまねえ」

「…ど、どうした、トシ」

「俺がいながら、隊がここまで乱れちゃった……俺の責任だ。総悟の様子がおかしいのに気付いたとき、無理にでも勝負を止めるべきだった」

アイツもプライドが高い。青年の実力を見くびり、まさかここまでやると予想出来なかったはものの、ヤツが体調を拗らせたのは自分の不手際だ。

「なアに言っただ。お前は何も悪かねーよ。総悟だってケガも何もしちゃいねえ、ただの風邪だ」

「けど、そりゃ今回運が良かったようなもんだ……相手によりゃ、もつと事は大きくなっただ」

もしかすれば、相手が相手であったら、怪我では済まない傷を負っていたかもしれない。

「…後で様子、見に行つてやるか……」

今回ばかりは、沖田に申し訳ない気もした。もちろん、それを口にするつもりはなかったが。

第十部 警護任務（前書き）

「実の親を捜しに遠路はるばる江戸まで出てきたはええが、なかなかうまいこといっくらんゆうよつなことをこぼしとったそつじや…」

第十部 警護任務

一方、真選組で青年が暴れている頃。不運にも偶然沖田に見付かってしまったがためにあのこじれにこじれた揉め事の仲裁を、青アザ四つと口内出血でどうにか収めた山崎は、痛さに顔をしかめながら屯所へと歩を進めていた。手には隊服と腰の刀には不釣り合いな、真新しいラケットと白い羽のセット。彼自身がこれだけ傷だらけなのに、この二つには傷ひとつない。

「っってて……チキショー、ほんと俺運悪すぎるよなあ。コレ3日は治んねーや……ま、ラケットとシャトルはなんとか守りきったけど」

情けない声を出しながら再び携帯を開いて、何度目か知れない深い溜め息。

「でも副長から4件も着信来てたなんて、帰ったら絶対ソックコードやされんだろ……あゝ俺のせいじゃねーつつうのによー、ったく！！！！

言い訳どうしよ。素直に言ったって信じてもらえっこねーし……充電きれちゃってましたとか？あ、いや、代わりに出るあのお姉さんの台詞で電源入ってるかどうかなんてとうにバレてる……へたにそんなウソぶっこきや間違いなく俺に明日は来ねーぞ退！あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あ〜っどーすんの、俺!!??」

誰も聞いてくれない呟きを垂れ流し、頭を抱える。悲運な己を恨みながら、積もるのは自分勝手な上司への恨み辛みと、もう一人の上司への恐怖心である。それは重く両肩に押し掛かり、自然と山崎の歩を重くするのであった。

悲しみに暮れていると、ふと、先程の飲み屋で店主に言付かった内容を思い出した。ああそういえば、と携帯をしまい手帳を開いて確認する。

「…にしても、この“和葉”って男、なんなのかな……あの店主、わざわざ言いに来たけど……」

軽傷を負いながらもやっと事を収め、野次馬も散っていった頃、店の店主が山崎へ礼と、沖田はどこかと訊ねた。

『ああ、沖田隊長ならもう先帰っちゃいましたよ。面倒事全部俺に押し付けて』

『そうかい……じゃあ、その子に言伝てを頼みたいんじゃないの。さっき言っておった若いもんは、“和葉”ちゆう名前じゃったのを思い出しての。それをあの子に伝えてくれんか』

『和葉？』

『おおそれと、これは隣に座ったうちの常連に聞いたんじやが、その子は母親を捜しに江戸に来たらしい』

『はあ……』

『実の親を捜しに遠路はるばる江戸まで出てきたはええが、なかなかうまくいこといっとらんゆうようなことをこぼしとったそうじや……ま、あの子に言えばわかるはずじや。何か役に立てばええがのう。頼んだぞ、若いの』

とりあえず手帳にペンを走らせたはものの、いまいち飲み込めない山崎に構うことなく、店主は店に消えていった。口振りから察すれば、沖田がその和葉とやらの事を気にしていたことになるが……

「……沖田隊長が真面目に仕事っぽい仕事してる……てことなのか、コレ？」

だとしたら、この異常気象や、例外的な早さの梅雨入りといい、いよいよおかしくなってきたかもしれないと顔を青くする山崎であった。切れた口の端が、ぴりりと痛んだ。

「しかし山崎のヤロー、いつまで外ほつつき回ってやがんだ」

不機嫌にならずにはいられない。何せ今日、朝姿を見かけてから一度も見えていない。いつになく重大な仕事を抱えてはいるものの、折り返しくらいしろ、というのが土方の心中だ。

「見付けたらせってータダじゃおかねエ……」

書類整理を進める右手のボールペンが、今にもバキツと行ってしま
いそうだ。心なしか、字が乱れてきている気がしなくもない。

「…チッ」

和葉だかいう奴のことといい山崎の勝手といい、イライラして大人しく座つてなどいられない。煙を口に運ぶ回数が自然と多くなっていた。灰皿は灰と吸殻でいつになく溢れ返っている。時計を見れば、沖田が倒れてからいい時間が経っていた。

「…そろそろ行つてやるか」

落ち着いた頃合いだろうとふみ、イライラの治まらないまま煙草を揉み消して部屋を出た。

トントン、と一応障子をノックする。

「オイ総悟、入んぞ」

取っ手に手をかけて障子をスライドさせ、ようとした。しかし、それは実際には叶わなかった。

「大丈夫……」「ひいじかたコノヤロー……ッッ……!!」

「ふに、やああっ」

障子を開ける前に、中からどしんと重量のある机がすっ飛んできた。角からモロに受けた土方が縁側から庭まで吹っ飛ばされる。

「ッテ……総悟てめッ、いきなり何すんだ!!せっかくの見舞いに何てことしやるっ!!!!」

「おっと、すいやせん土方さん。先日から土方さんに付きまどつてるストーリーカー女が遂に乗り込んできたのかと思いやして」

「いねーよそんな女!!!テメー俺だつて100パーセントわかつてたろっ!!!?俺の名前言つてたろっ!!!??」

「ああ、頭が痛え。おかしいな、土方さんがボヤけて見えませア」

「真顔でウソつくなアア！…んなモンぶん投げといて今さら病人ツラすんじゃねーよ！…！！！」

寝巻き姿の沖田が再び布団の上に座り込む。平気そうな風をしてぴんぴんしているかと思いきや、やはり実際は結構ツラいらしい。

「まったく、調子悪いときくらい、大人しくしてろっての」

「土方さんは頭が悪いんですから一生大人しくしてください」

「…テメー、もっと素直になれねーのかよ……」

『誰に言ってるんですかイ』と布団に潜り込みながら言われ、そりゃそーだ、と思い、溜め息をついた。

様子からすれば病人でも何でもなさそうだが、顔はまだ赤みを帯びていて熱っぽく、額は少し汗ばんでいる。しかもきつとコイツのとだからそれを表に出さまいと無理をしているだろう。すぐに布団へ座り込んでしまったところをみるに、相当疲弊していると容易に察しが付いた。

「調子はどーだ」

「よく見えやすかい」

「フリーが俺にや机をぶん投げるヤツが病人には見えねーがな」

「土方さんに弄ばれた猟奇的なストーカー女から身を守るための咄
嗟の行動でさア。火事場の馬鹿力的な」

「火事はテメーの頭だ。熱が頭に廻って幻覚でも見えるようになって
たか」

口だけはいつもと同じ可愛げのないことを言っているが、それも土
方の前だからのこと。もちろん土方もそのことを承知だ。

524

「…アイツ、どうしやした」

「帰った。オメーが戦えねえんじゃ用がねーってよ。また来るっつ
つてたぜ」

すつと真面目な顔に戻って、気になっていたことの返事を聞き、沖
田は力ない表情ながらチツと舌打ちをした。

「弱ってる今のテメーなんぞじゃ、勝ったとは言えねーだと。ま、隊長は諦めてねえらしいがな」

「…アイツ、止めやがった」

後の土方の言葉は恐らく耳に入っていない。手で拳を作りながら、ひどく気に食わなそうに低く呟いた。

「あんな戦い方しといて、最後の一打、止めやがった。俺の調子がおかしいのに気付いた瞬間」

沖田の言いたいことが判り、土方もあの時の場面を思い返した。沖田が青年の動きに反応するも身構えることは叶わず、そのまま身体力が抜けて膝から崩れてしまったとき、青年はトドメの一打を寸前で止めた。決めていれば間違いなく自分の勝ちだったのにもかかわらずだ。

「…変わったヤローだったな。あんな見てくれして、フタ開けてあらまビツクリだ」

「…あんなの、初めてだ」

そして沖田が気に食わないのは、それまでの戦い方と、その対応の“ギャップ”だった。沖田が倒れるにしろなんにしろ迷わずそのまま一発決めていれば、ヤツの勝ちも誰にも否定できない間違いないものになっていた。ヤツの、『勝つ』という要素以外を切り捨てたような戦い方。顔面に竹刀を叩きつけることだっけいとも容易くしそうな粗暴な剣。なのにあの時、トドメはささなかつた。

「俺よりメチャクチャな戦い方しやがるヤツなんざそういねーがな。総悟、実際にやりあってみて、お前はどう感じた」

「……不自然。…無理に一言で言うなら、そんな感じですか」

しばらく考えた沖田は、そうこぼした。

熟練した老齢の剣豪なら、目にも止まらぬ太刀筋と卓越した身のこなしで、まるで剣閃が見えないかのような錯覚に相手を陥れることも不可能ではないという。しかしそれは、実際には現実味の薄い話だ。長年の経験と老功の技術があればこそそのもの。

だがどうだろう？和葉というあの男。アイツの剣筋は、竹刀を持ち始めたばかりのガキンちよのような、笑ってしまうほど滅茶苦茶なものだったのに、その速さだけはそれに“近かった”。そのままではいけば隙だらけで、いくらでも叩くタイミングのある、テクニク技術の無さをすべてカバーするかのよう。速さ以外の要素が伴っていないのは何故だ？彼の荒くれだったという父親が乱れた型の剣を仕込んだ

から？そしてそれを自分なりにあそこまで昇華した　いや、あの年で一体どうやって？

「同感だ。調子のいいお前でもまた手玉に取られて終わり、だったりしてな」

そして気になることはもう一つ。仮にも剣に長けた真選組の隊士四人との連戦を、どうすれば休憩も無しで“息一つ乱れずに”全勝できるのか？特に沖田との手合わせではかなりの運動量だったはず。その間もずっと変わらない様子だったのだから、まるで人のスタミナとは思えない。しかも、全ての試合を通して一度も直接太刀を受けずにだ。

「俺がいつ手玉に取られたってんですかイ。ありゃ、手加減してやっただけさア」

「そうか？俺にゃそんな余裕そうには見えなかったがな」

「なら土方さん圧勝してみせてくださいエ。『申し訳ありませんでした。とてもあなた方には敵いません』て手エついて吐かせてくださいエ」

「俺にそんな趣味はねーよ。お前が自分でやりゃいいだろ？」

ニヤリとして言った土方の言葉に、沖田も同じような微笑を浮かべた。しかし、その表情も長くは持たなかった。何度かゲホゲホと出た咳に、沖田が背中を曲げる。土方が来てから辛いのを出さまいと無理をしていた訳だが、さすがに限界が来ているようだ。そろそろ部屋を出ようと、土方は腰を上げた。

「ま、今回はさすがのお前でも、今の状態じゃアイツには敵わねエ。とつとと治すこつたな」

「土方さん。風邪って、人にうつすと楽になるんですよねイ」

「間違っても俺にうつすなよ。ソッコウうつし返してやるからな」

釘を刺したが、コイツならどんな手を使ってもやりかねない。…あとで手洗お。と真剣に思った。

「せいぜい拗らせねえように大人しくしとけ、へボ」

「大丈夫です。とつとと土方さんにうつすんで、ポンコツ」

ヤツを部屋へ運んだときに測った体温計は三十八度七分なんて数字を出していた。幾分時間が経っているとはいえ、さほどその数字も変わってはいないだろう。口も利けないほどやられていたっていいくらいなのに、本当にコイツの意地というのか、それには感心させられる。

沖田の言葉に顔だけで返事をしながら、障子の無い敷居を過ぎて縁側に出た。その時だった。自分の右側で、誰かがピタッと歩みを止めた。ギクリ、なんてベタな効果音が聞こえそうなりアクシヨンだった。

「……………」

「ッあ……ああの、ふ、ふくちょ……………違うんです、違うんですよ。違うんです。決して八幡はちまん掛けて、八百万の神に誓って、ついさっきまでラケットとかシャトルとかウエアとかそんな感じのモンを見に行つてたとかそんな訳じゃっ……………」

本当に運が悪い。町で聞いた例の店主の話をしようと思つた沖田の自室を訪れたのに、まさかこうもタイミングよく土方が出てくるなんて。ポトリ、と彼の足元に、小さな白いプラスチックの円錐形が落ちた。彼は両手を後ろ手にした格好のまま、蛇に睨まれた蛙の如く微動だにせず、ただ冷や汗を垂れ流している。必死の弁明も、今の土方には戯れ言だ。

「久しぶりじゃねえか、山崎。どうした？顔色ワリーぞ？熱でもあんじゃねえか？」

もちろんその白い羽を見逃すはずもなく、目の端に留めながら土方は徐々に彼との距離を詰めた。カラン、と背に握り締めていた真新しいラケットが、悲しげな音を立てて落ちた。

「いやちよつ、まっ、ちよつと待ってください副長。副長？ふくちよ、ふく…イ、ア、ア、アアア…」

その後、まどろむには少し暑い、陽が燦々と照る静穏の陽気のなか、真選組屯所には空気を裂く断末魔の叫びが轟いた。鬼の副長と呼ばれる由縁かのような形相の彼の怒りを、山崎は問答無用一身に受けることになった。その怒りの内訳は山崎の勝手よりも、突然の来客のせいであるところの方が多くを占めていることは、障子の壊れた部屋の布団のなかで惨劇を耳だけで楽しんでいる沖田以外に知る由もなかった。

いまの頭にはその音量も割れそうなほど苦痛だったけど、それと同じくらいに沖田は愉快で仕方なかった。

「沖田隊長が風邪、ですか？」

「らしーぜ。全身の倦怠感に三十八度越えの発熱、発汗。風邪以外の何でもねエ」

切れた口と青アザに加えて、所々にある血の赤と白の包帯が痛々しい山崎は、縁に腰掛けながら煙草を吹かした土方の言葉にクエスチョンで返した。

「ふ、副長、ほんとですか？あの沖田隊長がですか？」

「水母クラゲの骨みてーな話だが、本当だ。そのせいで、うちに乗り込んできたあのふざけたヤローに負けたんだ。おまけに無理してやりあうもんだから風邪拗らせやがった」

沖田が寝込んでいる経緯、自分が帰るまでに屯所で起きたことの一

通りを聞かされ、山崎は動揺を隠せなかった。

町で会ったあの飲み屋の店主の話。彼はこう言っていた。

『 さつき言っておった若いもんは、“和葉”ちゅう名前じゃったのを思い出してる。それをあの子に伝えてくれんか』

同姓同名ということもなければいかもしれないが、沖田を負かした和葉なる男が、あの飲み屋でもいざこざを引き起こしていた……と考えられなくはないだろうか。店主に男の風体までは聞いていなかったため沖田に聞かなければ事實は分らないが、屯所に戻る前に沖田が気にしていた男が、屯所に来て沖田に勝負を挑み、そしてその力量の高さで勝利した 筋書きは出来る。

「沖田隊長が風邪引いたつてのにもビックリだけど……いくら調子悪いったつて、まさかあの人の方が負けるなんて……」

一体どんな野郎なんだろう。山崎は率直にそう思った。よほど経験も豊富な剣士かと思えば、沖田とさほど変わらない年回りだということだからなおさらだ。勝負の場に居合わせていなかったのを、惜しく思った。

「それと、山崎」

「へい」

「例の殺傷事件の方はどうだ。何か掴めたか」

四件にわたる着信の用件。不機嫌そうに見える土方の顔が一際険しい目をして言った。先達せんだうてから起きている、幕府の人間ばかりが幾人も襲われているという事件のことだ。殺害されたのが五人、重傷が三人。狙われたのはいずれもある程度の地位にいる役人ばかりで、重傷で済んだのは護衛の家来や他の役人たちだけだ。首を一太刀、真正面から袈裟懸け、背後から一突き。その残忍性の高い手口は役人たちの恐怖を一層煽り、犯人の特定は急務だった。

「副長、やっぱり鬼兵隊のヤツらが犯行に関わっているとみて、間違いなさそうです。高杉の情報はまだ今のところありませんが」

「またザクザクとやってくれたもんだぜ……斬られたうちの四人が天人のおエラいさんときちや、ハデにやらかしたもんだ。フツーンらしいお声が掛かるか知れねエ」

しかし何故か、今のところ真選組に護衛やら警護やらの要請はなか

った。犯人の特定をくれぐれも秘密裏に進めると命が下ったのも、なんと三日前のことだ。だからこうして山崎だけが動かされている訳だが、どうしたものか、奇妙な話である。あの天人共にしたら真選組は使い捨ての捨て駒扱い、自分たちを護らせるためにいくらでもき使うのは分りきっているのに。全力をあげて捜査という訳にもいかず、ここ三日は山崎のみが動いて、土方たちは上からの連絡待ちだった。

そんななか、昨日六人目の役人が殺されたのだ。

「まったく、妙な話ですね……おエラ方は何考えてんでしょう」

「俺たちが死のうが斬られようがヤツらにや毛ほども関係ねエ。とつくに駆り出されてていい話だが……真選組を介入させられねー事情でもあるとしか思えねえな」

「事情といっても、上の連中なんかでは手に負えないのは分かりきってるってのに、このまま犠牲者を増やすつもりですかね。最初に被害者が出てからも二週間弱経ってるんですよ」

犯人についてサグリを入れるという命も、くれぐれも公にするなど念押しに念押しを重ねられた、と近藤は言っていた。それほど神経をつかわなければならぬ理由があるのだろうか？

「……まあしかし、総悟が倒れちまってる今声が掛かっても、だ。ど

うせならヤツが復帰するまで何も言つてこなきゃーんだがな」

「おう、トシ。山崎も、ここにいたか」

フウーと煙を吐き出してそう零こぼした所に、廊下を近藤が歩いてきた。

「局長」

「お、山崎、戻ってたのか。どうした、その傷？…まさか、鬼兵隊の奴等にやられたのかっ!？」

最初は土方を見ながら近付いてきた近藤が、山崎に気付き、そしてその姿に驚いた表情で聞いた。

「あー……いや、…」

当事者である土方は、実に涼しく澄ました顔で、煙を細く吐き出している。

「…派手に一人ですっころんじまいやして、ハハ」

「なんだそうだったのか。まったく、本当にドジなヤツだなあお前は、アツハツハ（笑）」

いやアンタには言われたくねーよ。と山崎は心のなかだけでツツコ
んだ。心のなかだけで、唇を噛んでおいた。

「どうしたんだ、近藤さん。俺に用か？」

「おっとそうだった。トシ、お前の言ってた通りになっちまったぞ」

「ん？」

促した土方に、思い出したように近藤が言った。

「さっきとっつあんから連絡が入った。幕府高官の身边警護の要請
だ」

「ハア……何だよ、このグッドなタイミング」

「ほんと、なっちゃいましたね副長。今さらお声がかかるなんて」

土方がシニカルな口調でこぼした。本当に、なんてタイミングだろう。言った側から話が持ち上がってきた。今まで一向に真選組を使う素振りを見せなかったのに、よりによって沖田がダウンしているときに。

まあただの警護なら、沖田がおらずとも出来ないことはないだろう。土方は二本目の煙草を探りながらそれほど慌てはしなかった。次の近藤の言葉を聞くまでは。

「しかもな、トシ。今回の警護は、少々厄介だな」

「タイミングがワリー上に厄介ときたか」

「うむ……警護対象のお役人は、ご自分の船で明日大阪へと向かわれるらしい。俺たちにはその船に共に乗船し、道中と現地での警護の一通りを頼みたいそうだ」

「ハア??」

二本目をくわえて火を点けようとした寸前で止め、思わず近藤を見上げた。ラケットを握ったままの山崎も、戸惑った顔を向ける。

「こ、近藤さん、そりゃ本気か？俺たちが江戸を離れんのか？」

「俺もそう主張したんだ。真選組は江戸を護る武装警察であって、江戸を離れるお役人の警護までは業務に入らんな。だが、どうも他のヤツらでは信用ならんという話らしい。しかも、そのお役人はとつつあんにとって等閑なおよしに出来んお方らしくてなあ……今回の警護は、とつつあんからの頼みでもあるんだ」

本来ならば役人一人の警護のために江戸を空けるなど、真選組の趣旨には添わない。だが、今回は具合が違ふようだ。近藤の話からすると、これは役人の意志だけでなく、松平片栗虎も真選組を使うことを了承していることになる。

「松平のとつつあんがまた長官の権力で真選組を使うってことですか、局長」

「そういうことだ。まあとにかくにも、決まっちゃったことは簡

単には覆らん。とつつあんがやれつつつてんなら、俺たちに拒否権はねえ。…トシ、またお前に迷惑掛けちまうが……」

「…まったく、私物化もいいとこだぜ」

諦めたように溜め息と一緒に煙を吐いた。否が応でも、もう大阪行きは拒否れないらかった。

「高杉は京に潜伏している。殺害の手口と腕の的確さから見て鬼兵隊の幹部あたりが江戸に出てきているかもしれないが、ヤツ自身がわざわざ江戸に出向いてきているとは考えづらい。大阪は京のま隣だ。そこに俺たちが行くことは、多かれ少なかれ悪いようにはならねーだろうよ」

「しかし、それじゃ江戸の警備が手薄になるんじゃないんですか？ お偉方がますますやられ放題になるってことも」

「上が動けつつつてんだろ？ 都合悪いならコツチにこんな話寄越さねーさ。江戸の警備も奉行所のヤツらでも総動員すんじゃないか」

「やれやれ……そうまでして我が身が可愛いですかね。自分一人のためにここまでするなんて」

「敵と対峙して『逃げる』しか選択肢がねえんだよ。何にせよ、大将が護るつつつてんなら、俺は命張ってそれを護るだけだ」

土方の言葉に、山崎もどこか納得した表情を見せた。

土方が近藤に詳しい説明を求める。ターゲットは今のところ、中堅層以上の幕府の役人に限られていることがわかっていく。近藤の話では、今回の警護対象はそのど真ん中だった。

「ところで局長、沖田隊長はどうするんですか？」

山崎が沖田の部屋の方向を指して言った。

「そうだな……ただの風邪とはいえ、万病の元と言つ通り侮れんからな。拗らせちまつてるし、お役人に移してもことだ。仕方ねえが、今回は屯所に残すとするか」

「…大人しく寝てりゃいいんだがな」

「さすがの沖田隊長も熱でぶっ倒れてりゃ無茶しませんって」

「「「……たぶん」「」」

三人ともの声が同時だった。常識で考えれば答えは当然なのだが、何しろ、常識が通じないお相手だ。

日取りは明日。近藤と土方は、早々準備に追われることになった。

「大阪か……少々チャレンジだけど、虎穴に入らずんば何とやら、だな」

監察方の山崎も、高杉の潜伏先である京都の隣に向かう今回の任に同行することにした。

いつもと変わらないはずだった真選組屯所の空気は、慌ただしくなっていた。明日は丸一日駆け出されるだろうという話を受け、それぞれが各々準備にかかった。この時誰も、大阪で起こることをもちろん何一つ知る由もなかった。

「なあ、お前大阪行ったことあつか？」

「ねえよ。だから今回の任務、俺超ー楽しみなんだよなあ！」

「俺も！まさか仕事で行けるなんて思ってたぜ」

「オイ。オメーら、遊びに行くんじゃねえんだぞ。わかってんだろ
うな？」

「ふ、副長！！ハイ、もちろんです！！」

「ったく……もう少し緊張感持ってたの。鬼兵隊がちよこまかしてる
ってーのに……なあ、近藤さん」

「トシ。お前、大阪行ったことあるか？」

「……んや、ねーけど」

「俺もなんだよ！いや〜楽しみだよなあ！まさか仕事で大阪行ける
なんて俺思わなかったよ、うん。この仕事やってよかったなあ〜。
まずはベタにたこ焼き、お好み焼き、いか焼きも食わんとあ！それ
から……」

「……………」

第十部 警護任務（後書き）

みなさま、新年明けましておめでとうございます！いやー、前の1/27更新予定、すっ飛ばして申し訳ありませんでした；；てか、だいたい更新スピード上げませんか？て話なんですけれどもお・・・ハイ、自分でも思います。

こんな私をお気に入りユーザー登録してくださいさってるみなさま、この話お気に入り登録してくださいさってるみなさま、目を通してくださいさってるみなさま、本当にありがとうございますm)——(mめっちゃくちゃ励みになってます！どうか今年も、よろしくお願いします！

(^o^)/

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8765g/>

いわゆる二次創作ってヤツです。

2012年1月6日23時48分発行